
気ままな風吹くこの世界

BURST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気ままな風吹くこの世界

【Nコード】

N8151D

【作者名】

BURST

【あらすじ】

居場所を無くした一人の少年が、ある少女との出会いをきっかけに、二人である魔術学園に入学し、そこで様々なことが二人の周りで起こっていく…

第1話 二人の出会い

とある街の静かな裏路地に一人の少年が歩いていた。少年は15歳くらいで、銀髪で青色の瞳をしている。

「はぁ……ここなら少しは休めるかな」

少年はそう言うとなりの壁に、もつれかかるように座り上を見上げる。

空は漆黒の闇に染まっていて、月は雲に隠れている。

それでも、辺りは月明かりでほのかに明るくなっていた。

「これから先どうするかなあ……」

少年は上を向いたままそう呟いた。

空は相変わらず薄暗く、幾つかの星がにわかに煌めいている。

「まあ、その時はその時で考えればどうにかなるかな。夜もそこまですることはないし、これくらいなら充分耐えられるだろう。とりあえず……今日はもう寝るかあ」

そう言う少年は上げていた顔を下ろし、そのままの体勢で眠りについた。

まだ見ぬ自分の行き着く場所を想いながら……

ここはラドヴィスという国にある、セリアという名の街だ。王都からそう遠くない場所にあり、隣国との国境からも近い。

そのため隣国との交流の場所の役目となっていて、街の規模が大きく、多くの人々が行き交う。しかし、それも昼間までで日沈を迎えると昼間の活気が嘘のように静かになる。

そんな静かな街のなかで、

「遅くなっちゃった。早く帰らないと…でももう一人暮らしだしべつにいいかなあ」

1人家路につく少女がいた。

彼女の名はルリア。

桜色のマントを身に纏い、肩の辺りまで伸ばした蒼色の髪、淡い緑色の瞳をしている。

「でも暗いし怖いから早く帰るかあ。今日のご飯は何にしようかなあ」

そんなことを思いつつ、足早に歩いていった。

暫く歩いているとルリアは壁に寄りかかるようにして倒れている人を見つけた。

不思議に思い近づいてみる。

どうやら少年のようだ。

夜空に輝く星のような銀色の髪をしている。

「大丈夫ですかあ？」

声をかけるが返事がない。

しかし耳をすませると、かすかに寝息が聞こえてくる。

どうやら寝ているだけのようだ。

「起きてください。こんな所で寝てたら風邪ひいちゃいますよ」
そう言いつつ体を揺するが反応がない。

「しょうがないですねえ」

ルリアはそう言うと少年から少し離れる。
すると少年の足元に緑色の魔方陣が広がる。

同時に風が吹き始める。

「彼の者…我望む場所へ…」

そう言い終えると更に風が強くなり、少年の姿が消えた。
そして風も吹き止む。

「ふう…これでよしと。じゃあ帰るかなあ」

ルリアは一息つくと足早に自宅に向かっていった。

第2話 これから進む道

（あれ、ここは？）

少年が目を開けると視界に入ってきたのは天井だった。

（確か昨日は、外で寝たはずなんだが？）

そう思いつつ体を起こし周りを見回す。

しかしここが何処なのか全く分からない。

暫く少年が考えていると、

「気が付きましたあ？」

と部屋の奥から声がした。

そっちを見ると見知らぬ少女が見えた。

「君は誰？そしてここは？」

そう少年は尋ねる。

「私はルリア。ここは私の家です。昨日帰り道であなたが外で寝ているのを見つけて、呼びかけても返事がなかったの〜」

「そうか。俺はセント。昨日のことは礼を言う。ありがとう」

「いえいえ〜。セントさんはなんで外で寝ていたんですかあ？」

「ん〜、ちよつと言いくいんだがなあ」

セントは苦笑いを浮かべ続けた。

「俺はもともとは王都に住んでたんだが、いろいろとあつて向こうにいられなくなつたんだ。それでとりあえずこの街に来たんだが、向こうを出たときにあまり金銭を持ってこれなかった。だからすぐ底について宿がとれなかったから、昨日は彼処で寝てたつて訳だ」

「そうだったんですか。たいへんでしたね〜」

セントの話を聞いてルリアはそう返したあと、いろいろと考えていたが少し経って口を開いた。

「これからどうするんですか？」

「どうするって言ってもあてがないからどうしようもないんだがなあ」少し投げ遣りにセントが言った。

「それなら……ここにいてもいいですよ」

「え？」

思ってもいなかったことにセントは驚き、思わず聞き返す。

「だって街に出ていってもお金がないなら何もできないですしまた、野宿することになるじゃないですか」

痛いところを突かれてしまったセント。

「まあな。でもいいのか？」

「はい。私もこの街に来てまだあまりたってないから不安だったですしちょうどいいと思って」

「そうか。じゃあ御言葉に甘えてそうしてもらつよ。これからよろしくな」

「ふふつ。よろしくね。それじゃあさごはん食べましょ」

そう言うところルリアは部屋から出ていった。

セントは何か考えていたが少しして部屋を出た。

「そういえばセントさんは魔術は使えるんですか？」

朝食をとり終え、片付けも終えたルリアが問いかけた。

この世界では各地で名称がそれぞれ違うが魔術がひろまっている。

「ああ。いくつかなら使えるよ」

「そうなんですか。それなら頼みたいことがあるんですけどいいですか？」

「ああ。あと普通に話して結構だぞ」

「はい。えっと、もうすぐこの近くにある魔法学園の入学試験があるんだけど二人以上のチームで受けなければならないっていう条件があつて……」

世界的に魔術がひろまっているから、それを学ぶ学校もある。

もちろんラドヴィス国にもいくつかの魔法学校や魔術科のある学園があるのだが、全てにおいて二人以上での受験が決められているのだ。

「それに俺がペアとしてでてほしいと言うことか」

「うん。その学校に行くためにこっちに越してきたんだけど相手が見つからなくて……」

そう言うところリアは少し俯いた。

「そうか。いろいろと苦労してるんだな」

「うん……ぐすっ」

「な、泣くなよっ」

突然涙ぐむリアに驚くセントだったが少しして口を開く。

「じゃあ一緒に試験受けてやるよ」

「え……いいの？」

「ああ。それにこっちに来てからもやることなんか無かったし別に入学しても問題ないだろう」

「ありがとう……ぐすっ」

「だから泣くなって、ほら」

そう言うところセントはリアを優しく抱き寄せ、頭をなではじめた。

「ふえええん……」

「やるからには出来る限りのことはするから」

「うん……」

泣き続けるリアをなでていたセントは自分の過去を思い出していた。

第3話 試験への準備

あれから数日後、セントとルリアは、近くの広場に来ていた。
あのあとルリアが落ち着いてから、試験日までどうするかを話し合った。

そして、特にしなければならぬことが無く、またセントが最近あまり魔術を使っていないらしく、久々に使っておきたいと言ったので毎日魔術の訓練をすることになった。

「セント、じゃあいくよ」

「ああ。いつでも大丈夫だ」

それを聞いてルリアが詠唱を始める。

同時に、ルリアの周りに風が吹き始め蒼い髪がなびく。

そして緑色の魔方陣が浮かび上がった。

「世界を巡る風よ、刃となりて彼の者を切り裂け…ゲイルカッター
！」

ルリアがそう言うのとセントに向かって突風が吹いた。

しかしその風はセントに届くことなく消えた。

「もう一度やるね」

そう言うのとルリアは再び詠唱を始める。

「…刃となりて彼の者を切り裂け……！」

しかし詠唱の途中、突然目眩に襲われ身体に力が入らなくなり、バランスを崩す。

それでも異変に気付いたセントが素早くルリアを支えたため、倒れることは無かった。

「大丈夫か？」

「うん…大丈夫だよ…」

「無理するな。今日はもう終わりにしよう。歩けそうか？」

「うん…」

そう言っ立ち上がり歩き出そうとするが転びそうになり、またセ

ントに支えられていた。

「しょうがないなあ、ほら」

セントはそう言っているとルリアを背負う。

「ごめんね……」

「いいって。それより試験近いから早く体調治そうな」

そう言っているとセントは家に向かって歩き始めた。

試験前日。

ルリアの体調も良くなり今日は明日の準備に取り掛かっていた。

今2人は魔術書や術符などを揃えるため魔法店に来ている。

魔法店とは、魔術を使うときに補助として使う杖や術符、特殊な魔術を発動させるときに使用する魔術書など魔法に関するものがひととおりおいてある店だ。

「じゃあ俺は術符を見てくる」

「わかった。またあとでねえ」

そんなやりとりをした後セントは歩いていった。

「私は魔術書でも見てくるかな」

そう言っているとルリアも歩き出した。

ルリアは魔術書が置いてある場所に来ていた。

魔術書は用途と属性によって別れているため種類が多いのだ。

そのため、魔術書がある場所は他よりも広い。

「んゝ、なんかどれもいまいちだなゝ」

風の魔術書を見ながらそう言った。風の魔術書を見ながらそう言った。

「風属性のなら家にもちよつと古いけど家に何冊があつたしと出来るから他のをみるかあ」

そう言うって持っていた風の書を棚に戻し他の属性の書を見始めた。

日も沈み、辺りが暗くなった頃、2人は結構な量の荷物を抱えて帰ってきた。

あの後ルリアが魔術書を見ているときにセントがやってきた。

そして一緒に魔術書を見てから戻ってきたのだ。

2人が買ったものは術符5枚、魔術書2冊、杖だ。

さらに店を出た後食料の買い出しもしたので荷物が多くなってしまったのだ。

「ふうゝ重かつたゝ」

荷物を置いたルリアが肩を回した。

セントも腕が疲れたのか家に着いて直ぐに荷物を置いていた。

「少し休んだら準備始めろよ」

そう言うってセントは先に準備を始める。

「わかつたゝ。そういえばセント杖買わなかったけど大丈夫なの？」

「俺は自分のがあるから大丈夫だよ」

「そうなの？」

「うん。ほら」

セントは右手をかざす。

すると突然輝きだし気付くとその手に水色の半透明の杖が握られていた。

セントの背丈と同じくらい長い杖だ。

「綺麗…」

「この杖は自分の魔力のようなものだから簡単な魔術なら詠唱無しで使えるんだ」

そう言くとセントは何か思い出した様で荷物から術符を取り出しそのうちの2枚をルリアに渡す。

「これはルリアの分だから。」

「私のはあるから大丈夫だよ」

「御守りみたいなもんだ。一応持っておけ。」

「うーん…そこまで言うなら貰っとくね。ありがと」

ルリアは渡された符を鞆にしまった。

「そういえばセントは料理出来る？」

「ああ。長い間1人だったから自然と身についた」

「なら、今日の夕飯作ってくれる？」

「別に構わないが、何故？」

「セントはいつも何食べてたか気になったからかなあ？」

「そうか。じゃあ久々にやりますか」

そう言つて台所へと向かつていった。

「セント、なかなか美味しかったよ」

夕食を食べ終えたルリアが嬉しそうに言った。

「そうか。久々だったから思うようにいかなかったけどよかった。そういえば試験はどんなことするんだ？」

「よく分からないけど魔術の測定とかだと思うよ」「そうか」
そう返すとセントは食事の片付けを始めた。

「あつ私が片付けるから置いといていいよ」

「いや、片付けまで料理って言うから今日はやるよ。いつもやってもらってるし」

「そう？じゃ、よろしくね」

「おう」

セントは再び台所へと向かっていった。

「さて、準備の続きしないと。」

ルリアは居間に戻り、今日買ってきた術符や魔術書などを鞆に入れていた。

そして一通り入れ終わったときにあることに気付いた。

「こんな魔術書あったけ？」

ルリアはそう言いつつ一冊の魔術書を手にとった。

表紙はほとんど色褪せていて微かに緑色をしている。

どうやら相当古いものようだ。

「だいぶ古いみたいけどセントのかな？」

そんな事を思いつつルリアは本を開いた。

本の中も文字が薄くなっていて所々読める程度だった。

暫く魔術書を頑張って読み進めっているとセントが片付けを終えて戻ってきた。

「何を読んでるんだ？」

「あつ、これセントの？」

セントに持っていた魔術書を渡す。

「いや、向こうを出たときには一冊しか書を持ってこれなかった。

その書はもう鞆に入れてある」

セントは渡された書を眺めながら言った。

「そうなの？じゃあなんでここにあるんだろう」

「これはルリアの無いのか？」

「うん。気が付いたら此处に置いてあつて…」

そう言つて鞆の横の置いてあつた場所を指差した。

「んー…前のこの家の持ち主が忘れたつて訳でも無さそうだな」

「うーん…」

2人はいくら考えてもこの魔術書は何故あつたのか分からなかった。

「この書はどうするんだ？」

「それで困つたんだよ」

「だったら貰つておいたら？見たところ風の魔術書みたいだし多分使えるだろう」魔術書は例外を除いて属性ごとに色分けされていて、詠唱時に発生する魔方陣の色と同じ色にされているのだ。

この魔術書は緑色なので風の書となる。

「私もそれは思つただけど表紙に何も書いてないのは初めて見たからちよつと…」

「あー…まあ確かに俺も初めて見たな。模様はないけど中からして一応魔術書みたいけど」

魔術書には色と同じく必ず表紙には模様が描かれているのである。

模様が複雑化するほど難解で高度な魔術書となり、逆に単純な模様ほど簡単な魔術書となる。

しかし、この魔術書は模様がないのでどのくらいのものなのか全く分からないのだ。

「とりあえず…使わなければ問題無さそうだよねえ？」

「無い…とはい切れないが多分大丈夫だな」

「そうか」。じゃあ一応持つていくかあ」

そう言つとルリアは魔術書を鞆に入れ、ボタンを留めた。鞆から入りきらなかった杖が顔を出しているような状態になっている。

「このくらいでいいかなあ」

「終わったか？」

「うん。これで大丈夫だよ」

「そうか。それなら今日はもう寝よう」

「そうだね。じゃあおやすみ」

「また明日な」

そんなやりとりをして二人はそれぞれの部屋へと入っていった。

第4話 静かなる夜

夜も更け、街の家々から明かりが消えた頃、ある家から一人の少年が出てきた。

（明日は試験だけど珍しく眠気がないしたまにはいいかな）
出てきたのはセントだった。

どうやら目が覚めてしまい眠れないようだ。

セントは行き先も決めず歩き始めた。

外は相変わらず静かで月も出ていないため真っ暗である。

（にしてもほんと静かだなあ）

そんな事を思いつつ歩いていく。

暫くして、セントはある場所に出た。

以前セントがこの街に来て夜を過ごした場所であった。

（確かここでルリアに出会ったんだっけ）

セントは立ち止まり、路地裏の一カ所を見ていた。

（あの時はこんなに早く目的が出来るとは思ってもなかったな）

そんな事などを考えて、暫く立ち尽くしていると、遠くから明るい声が聞こえてきた。

「あれ、もしかしてセント？」

振り返りセントは驚いた。

暗いので分かりづらいが漆黒の髪、瞳をした一人の少年が立っていた。

「フォルスじゃないか。久しぶりだな」

「やっぱりセントだ！どうしちゃったのさ、急に姿が見えなくなったからみんな心配してるよ」

フォルスと呼ばれた少年はセントだと分かると駆け寄ってきた。

「ああ、すまないな。ちょっといろいろとあって王都のほうに居られなくなった」

「そっか。無理はしないでね」

フォルスは久々に居なくなつた友人に会え、嬉しそうな表情だつた。それにつられてセントも笑みが溢れていた。

しかし疑問に思うところもある。

「分かつてる。ところでフォルスは何故こんな所に？」

「んと、頼まれ事でいろいろと調べてたんだけど、遅くなつちゃつて今帰つてる途中なんだ」

「いったい何を調べていたらここまで遅くなるんだろうか。」

「いろいろと疑問に思うことがあつたが特に深入りはしなかった。」

「そうか。そつちも気をつけろよ」

「僕だつて少しくらいは魔術は使えるから大丈夫だよ。セントはこんな時間に何してたの？」

「ああ。特に何かしてたつて訳ではないんだが……。今日は珍しく早く眠れないからこうして外を歩いてたんだ」

「困つたものだ、というかのようにため息をつく。」

「なんかセントらしいね」

少し笑いながらフォルスは言った。

「そうか？」

「うん。昔からセントは夜中によく外を出歩いてたよね」

「そう言われてみればそうだな」

セントは気分が安らぐからとか言つて、夜中街を歩いていた自分を思い出し、何となく懐かしい気分になつた。

「そういえば、セントはなんでこの街に？」

「そういえばまだ言つてなかったな。向こうを出てこの街来たんだがすぐに金銭が底をついてな。宿もとれなくなつて仕方無いから此処で一晩過ごしていたんだ。その時に偶然通つた親切な人が暫く泊めてくれることになって、そのお礼にと魔術学校の受験を付き合ふことにしたんだ」

「そこまで言つとフォルスは少し驚いたようだ。」

「魔術学校つてもしかしてオルレイ魔術学園？」

「実際は何処だか聞いてないけどこのあたりならそこで間違えない

だろう」

「そっかー。彼処は有名だから受験者も結構多そうだね」

「それは仕方無いだろう」

「そうそう、調べ物をしているときにそれについて妙なことを見つけたんだ」

そう言々とフォルスは真剣な表情になった。

「妙なこと？」

「うん。試験は二回あってどちらかに合格すればいいんだって。それで内容は二回とも適合検査とかでは無くて、さらに合格者の定員も無いみたいだけど、さらにおかしなことがあっていつも合格者は受験者のほぼ半分の人数しかないみたいだよ」

「そんなに試験が難しいのか？」

「分からないけど…必ず何かあるんだと思う」

「んー…」

会話が途切れ、やや重い雰囲気になってしまったようだ。

この雰囲気はなくすべく再びセントが口を開く。

「まあ大丈夫だ。もう一人のほうもだいぶ魔術を使えるみたいだし二人だけと何とかするよ」

それを聞いてもフォルスは心配そうな顔をしてたが、何か吹っ切れたかのように会ったときのような笑顔になった。

「そうだよな。セントなら大丈夫だよな」

「やるからには全力でいくから心配はいらない」

「セント頑張って合格してね！」

「ああ」

いつの間に二人に笑顔が戻っていた。

「それじゃあね、セント」

「ごめんな。長々と話して」

「ううん。久しぶりに会えたんだしいいよ」

「そうか。あと、皆によろしくと言っといてくれないか？」

「分かった。それじゃあね」

そう言くとフォルスは歩いていった。

歩く速さが少し速く、角を曲がっていったのですぐに姿が見えなくなつた。

（だいぶ時間も過ぎただろう。そろそろ戻るか）

セントは家に向かって歩き始めた。

フォルスと話していた時間が長かったのか、それともセントがフォルスに会う前に長い時間立ち尽くしていたのか、すでに辺りは薄暗く空は暁色となり、夜明けを迎えようとしていた。

第5話 不穏な試験

試験当日。

セントはフォルスと別れたあと、家に戻ってきた。

しかしもう朝日が出始めていたのでそのまま起きていることにしたのだった。

それでも今日は、不思議と調子が良いような気がしていた。

そして暫くしてルリアも起きてきたので朝食をとり会場に向かったのである。

「やはり結構多いな。ざっと1、2千人くらいかな」

「そうだね」。ここは有名みたいだから各地から集まるみたいだよ」
「そうらしいな」

二人はたくさん受験者達の中で、試験が始まるのを待っていた。

セリアの街外れの広場が会場となっていて、すぐ近くには雄大な森が広がっている。

この森はどうやら学園の所有地のようだ。

暫くして鐘の音が響き渡り教員らしい男の声が聞こえてきた。

「これからオルレイ学園の入学試験の説明を始める。試験内容は…

…」

教員による説明が始まったのだが、セントは昨日の晩にフォルスと話していたことを、ずっと考えていた。

（フォルスは何かあるって言うていたんだよね…。合格者が多くないのは単に試験が難しいのか、それとも…）

セントが考えている間にもどんどん説明が進んでいき、ついには説明が終わってしまった。

説明の最中にもルリアが何回か話しかけてもセントは気づくことはなかった。

ルリアは最初こそは説明を集中して聞いていると思ったのだが、説明が終わっても気がつかないのはおかしいと思い、再び声をかける。

「セント？」

「……………」

「セント？」

先程と変わらず返事が返ってこない。

「セントってば！」

「！、なんだ？」

ようやく呼ばれていることに気がつき、返事をした。

しかしルリアは大声を出してしまったため、何人かの受験者がこちらをみた。

それに気づき、小さな声でルリアは話始めた。

「呼んでも気がつかないってセントにしては珍しいねえ」

「ああ、すまない。少しばかり考え事をしていた。それにしても説明がいつの間にか終わっていたから、試験内容を教えてくれないか？」

「やっぱり聞いてなかったのかあ」

ルリアはそう言って一息おいてから、話し始めた。

「えーっと、試験内容はこの近くにある森を無事通り抜けることなんだって。森には学園の教員らが造り出した擬似生命体がいるみたいだから、倒すなり逃げるなりしてやられないようにしてって。それで、もしチームのうち一人でも、重傷を負い行動不能に陥ったら強制で森から転送されて失格なんだって」

「そうか。ありがとな」

「ううん。でも何かあったの？」

「実は昨日な……………」

セントはまだ言っていなかった昨日の出来事をルリアに話した。

夜遅くに外に出ていったこと。

辺りは寝静まっているにも関わらず、偶然にも親友フォルスと会ったこと。

そして、フォルスから入学試験で受験者のうち半分近くが、不合格となっているということなど。

ルリアは驚いたような表情をして聞いていた。

「……………という訳だ。まあ、実際に何かがあるのかはまだ分からないけどな」

「そうだったんだ…」

ルリアは話を聞いて俯いてしまった。

合格者が半分くらいしかいないので不安のようだ。

そんなルリアを見てセントは口を開く。

「まあ心配することはないさ。何があろうと必ず合格させるよ」

「……………うん、そうだよ。ありがと」

「俺は約束を果たすだけだから気にしなくていい」

セントがそう言ったあと、再び鐘が鳴った。

「それでは、これから試験を開始する」

教員が言ったのを合図に受験者達が我先にと一斉に走り出した。

「じゃあ、俺達も行こう」

「うん！」

その言葉にルリアは頷くと二人は、たくさんの受験者が向かっていく森の中へ歩き始めた。

しかし、フォルスが言っていた『何か』は既に起きようとしていたのだった。

第6話 招かれざる者

「あれ？さっきまであんなに沢山受験者がいたのに誰もいない……」
二人はたくさん受験者たちと共に森へと入っていった。

それなのに、周りには誰一人の姿も見えず、風が木々の枝葉を揺らす音しか聞こえてこない。

「きつと森の中に続いていた道に転移魔法が仕掛けられていたのだろっ」

そんなことを言ってセントは辺りを見渡した。

獣道らしきものが奥へと続いているのが見えた。

「とりあえずここで立ち止まっていてもしょうがないし、先に進もう」

セントはそう言つと歩き始めた。

「ゲイルカッター！」

森にルリアの声が響き、二人に襲いかかってきた狼を風が切り裂いた。

狼は力尽き動かなくなると、光の粒子となり消えた。

「ふう〜。何だか遭遇する回数が多いね」

ルリアは一息ついてそう言った。

「まあ試験だから仕方無いじゃないか？」

セントがそう返した。

二人が歩き始めてから、一時間ほど時間が経った。

そしてルリアが言った通りに、これまでも何回も遭遇していた。

しかし、受験者を一度も見かけることはなかった。

「ねえ、セント」

再び歩き始めてから、ルリアは何かに気づき、セントに声をかけた。

「なんだ？」

「小さいけど水の音が聞こえない？」

そう言われてセントは耳を澄ます。

微かにだが近くに川が流れているのか水音が聞こえた。

「本当だ。よく気がついたな」

「すごいでしょ？昔から耳はいいんだ」

「そうか。方向は……こっちか」

そういうとセントは音のする方向へ歩き始めた。

ルリアもセントの後を追う。

進む先には獣道などは見当たらなかったが、それでも伸びきった草をかき分け進んだ。

暫く進むうちに水音が段々と大きくなっていった。

「セント、川が見えてきたよ」

そう言うのとルリアは走って行った。

「あ、おい！」

セントは慌てて呼び止めたが、ルリアには届かなかったのかそのまま走って行ってしまった。

「……………たくつ、しょうがないなあ」

セントはそう言うのと、走り始めた。

しかし、追いつく気配がない。

（あいつ、こんなに足速かったか？）

セントはそんなことを思いつつ尚も走った。

「！」

しかし、ちょうど視界が開けた場所に出たとき、セントは立ち止ま

って辺りを見渡した。

しかし、目にはいったのは横を流れる川と、そびえ立つ木々だけだった。

暫くしても、何も起こらずセントが再び走り出そうとした時、セントは前に跳んだ。

その直後、

ドオオオオン…

爆音と共に火柱があがった。

セントはそれを確認することなく素早く立ち上がると、走り出した。セントを追うように次々と火柱があがる。

（この木に炎が当たっても燃え上がらないんだな…。っと今はそれどころじゃないか）

セントはそう思うと大きく右に跳び茂みにはいると、そのまま近くの木の後ろに隠れた。

すると上手く撒けたのか火柱があがらなくなり、代わりに受験者らしき男達が4人ほど先ほどの所に出てきた。

セントは耳をすまし、男達の会話を聞き始める。

「……逃がしたようだな」

「でもまだすぐ近くにいますはずだな。探すぞ……」

（相手は………四人か…）

先ほどの攻撃は、避けられたものの四人を相手にするのは少し厳しかった。

逃げるべきか？、と思ったがルリアも先ほどの爆音で、此方に向かってきているかもしれないので、それは無くなった。

（相当きついが、やるしかないか…まあ、走り回れば何とかかなるか）

そう思うとセントは杖を手にして、駆け出した。

同じ頃、ルリアは来た道に戻っていた。

ルリアはセントがついてきていなかったことに気がつかなかった。そして最初の爆音がしたときに初めて、セントがいないことに気がついたのだ。

爆音はルリアが来た方からしたため、ルリアは焦っていた。

（セント、無事でいて…）

そう思うと、足をさらに速めた。

途中に何度も転びそうになったがそれでも走った。

暫くして、人の気配がしたので走るのをやめ、ゆっくり歩いた。

そして開けた場所では何人かの人が見えたので近くの木影から様子を伺った。

どうやら対立しているらしく、奥には4人の受験者らしき男がいた。そして近くにいる受験者を見て、ルリアは思わず声をあげた。

「セント!？」

その声と同時に、男がセントに向かって、術を放った。

幾つもの炎の玉がセントを襲う。

しかし、セントは特に詠唱をすることもなく、杖を振った。

すると杖から水の刃が飛び、炎を消していく。

それでも連続して詠唱をしているのか、炎の数が多くセントは避けながら、相殺していて反撃する余裕が無かった。

ルリアはそれを見てはっとなり、急いで詠唱を始めた。

「世界を巡る風よ、そのひと吹きで全てを吹き飛ばす強き者となれ

…」

ルリアは術を発動させるタイミングを見計らう。

そしてセントが後ろに飛び退いたときに、発動させた。

「ブラストブロー！」

強い突風がセントに向かって飛んでいた炎、を全て吹き消した。

「なっ!?!」

突然の出来事に男達は驚いた。

セントは今の風はルリアが発動させたものと分かっているのか、先程と同じ様に杖を振った。

「セント、大丈夫？」

ルリアはすかさずセントのところへ走った。

「ああ、ありがとな」

セントは相手の方を向いたまま言った。

ルリアも相手の方を向く。

見ると、いつの間にか男達は六人になっていた。

「何が目的だ？」

セントは杖を構えたまま言った。

「悪いけど君たち受験者を失格にするのが目的だよ！」

一人の男がそう言ったと同時に詠唱を始める。

「燃え盛る火炎よ、彼の者を焼き尽くせ！ フレイムスピア！」

巨大な炎がセント達へと飛んでいった。

セントは詠唱もせずに今度は杖を突き立てた。

すると目の前に水柱が空高くあがり、炎と衝突する。

ジュウウッ！

ものすごい量の水蒸気があがり、辺りの視界が一気に悪くなった。

ルリアはその隙に、後ろへ下がると魔術書を取り出す。

しかし手にした魔術書があのだボロボロの古い魔術書とは気づかなかった。

そして、詠唱を始めようとしたときに急に目の前が真っ白になった。
「!」

突然のことに驚き、思わず手を放すが持っていた魔術書は、不思議

なことに宙に浮いたままだった。

ルリアが2、3回ほど瞬きをすると視界は戻ったが、今度は何か言葉が直接頭の中に聞こえてきた。

その言葉は初めて聞いたはずなのに、何処か懐かしく思えた。

そして、魔術書を気にすることもなく、自然と口が動き始める。

「気紛れな風は、時に厳寒を運ぶ嵐となる……」

少しずつ風が強くなり、気温が下がり始めた。

同時に段々と視界も晴れていき、ようやくもとの状態に戻る。

男達は再び詠唱を始めていたが、セントが水の刃を飛ばしているため、中断を余儀なくされていた。

「小賢しい真似を！」

男が悪態をつきながらそう吐き捨てた。

互いが睨み合いをしている間にも風は強くなり、ルリアの詠唱は続く。

「……厳寒を運ぶ風は、ここに集い、悪し者に破滅をもたらす……」

ルリアの詠唱は尚も続く。

「あの女の詠唱を止める！」

男がそう言つと、ルリアの詠唱を中断させようとして先程から詠唱していなかった男達が走ってきた。

セントはそれを見ると水の刃を飛ばすのをやめ、詠唱を始めた。

「流れゆく水よ、その強き力で全てを押し流せ……アクアフロート！」

セントの杖の先に球体が現れるとそこから大量の水が溢れだし、走ってきた男達は足をとられ流されていった。

そうこうしているうちにルリアの詠唱が終わり、叫んだ。

「セント、下がって！」

「！」

その声を聞いたセントは大きくバックステップをとり、下がった。

そしてルリアが術を発動させた。

「吹雪け！ブリザードサイクロン！」

吹雪のような冷たい突風が巻き起こる。

そしてそれらが巨大な竜巻となり、男達を巻き込んだ。
セントは、余りの風の強さに思わず腕で顔を隠した。
竜巻はうねりながら、段々と弱くなっていく。

竜巻が殆んどおさまったところでセントは腕を下ろし、辺りを見る。

先程までいた男達はいなくなっていた。

恐らく強制転送されたのだろう。

そう納得するとルリアの所へ行った。

ルリアは浮いたままだった魔術書を手にとると、余りの疲労感にその場にへたりこんだ。

「大丈夫か？」

「ちよつと派手にやりすぎちゃったみたい…」

確かにルリアの言うとおり木々や川面が所々凍っているように見え、実際にまだ肌寒く感じている。

「気にすることないさ。初めて使ったんだろ？」

ルリアはその言葉に頷くと、立ち上がるとする。

しかし、身体が鉛のように重く、動かなかった。

「あれ？」

「どうした？」

「あはは…、立てなくなっちゃったみたい」

「わかった。ほら」

セントはルリアを立たせると、そのまま背負った。

「ごめんね。迷惑かけちゃって…」

「いいって。それよりも…」

セントはルリアがまだ手に持っていた魔術書を見て言った。

「その魔術書、古いやつじゃないか」

「え？」

ルリアもつられて魔術書を見た。

「あ…ほんとだ」

「…もしかして気づいてなかったのか？」

「だって焦ってたんだもん」

「そうか。それにしても初めてなのに、よく突っかからずに詠唱出来たな」

セントは感心しながら言った。

「よく分からないけど何か頭の中にその言葉が聞こえてきて、自然と口が動いたの」

何だったんだろう、というように首を傾げる。

「不思議なこともあるんだな」

セントはルリアを背負い直しながら言った。

「とにかく、この魔術書を持ってきておいて良かった……のかな？」

「まあ結果オーライでいいんじゃない？」

「うーん……」

ルリアは考え込んでいたが納得したように言った。

「それもそうだね」

「あと、だいぶ時間が過ぎたから走るけどいいか？」

「うん。大丈夫だよ」

「わかった」

そう返すと、セントは再び静寂の訪れた森の中を走り始めた。

第7話 試験の結末

再び進み始めてから、一時間ほどたった。

幸い、何にも遭遇することもなく順調に進んでいたが、それでも先ほどの足止めのせいで大いぶ遅くなっている。

（ふう、少し休憩するか）

セントは、休憩をとろうと近くの倒木に腰を下ろした。

ルリアはというと、先ほどの魔術で疲れてしまったのか今では眠ってしまっている。

セントは休んでいる間にあることを思い出した。（そういえば、フォルスが言っていたことってもしかして先程のことだったのか？）確かに彼らは、受験者を失格にするためだと言っていたので、その可能性は考えられた。

しかし何故そうする必要があるのか分からないため、確信は出来なかった。

（なんにせよ、もう何も起きなければいいな…）

そう自分でまとめると考えるのをやめ、辺りを見渡してみる。

相変わらずすぐ近くを流れている川と木々ばかりだったが、大いぶ進んできて地面が初めの方よりは、多少なり歩きやすくなっていた。

（もう少ししてとこかな）

セントはそう思うと、立ち上がりルリアを背負い直して再び走り始めた。

（やっと着いたか）

さらに走ってから三十分ほどたち、ようやく外に続く道が見えてきた。

道の先には試験前に集まった広場がうつすらと見えていた。

セントはルリアを起こそうと器用に身体を揺すった。

「ルリア、着いたぞ」

「……………」

「とりあえず、起きてくれ」

「……すう……………」

しかし、何度呼び掛けても、寝息が返ってくるだけだった。

「……………まあ、いいかな？」

セントは諦めると、再び背負い直して外へと歩き始めた。

段々と少なくなっていく木々に、見送られている様な気がした。

そして、ようやく広場へと戻ってきたのだった。

すでに日沈を迎えているので、二人は半日近く此処にいたことになる。

セントは見渡すと教員が近づいてくるのが分かったので、自らそちらへ向かった。

「おめでとう。君たちは文句なしの合格だ。詳しい説明は後日するから暫くは自由にしているとよい」

「ありがとうございます」

セントはそれだけというと、会場を後にした。

（流石に疲れてきたなあ）

会場を後にしてからだいぶ時間がたち、すでに月も綺麗にでているのだが、まだ家に着いていなかった。

ルリアはまだすう、と静かに寝息をたてて寝ているので、セントがずっと背負って歩いているのだった。

それでも、セントも疲労が溜まり始めていて歩みが遅くなっていた。疲労と戦いながら歩いていると、何処からか聞き覚えのある明るい声が聞こえてきた。

「あれ？セント？」

「フォルスか。こんな時間にどうしたんだ？」

フォルスはセントだと分かると、此方に走ってやってきた。

「ちょっと気分転換にまたここに来たんだ。セントは？」

「昨日話していた入学試験に行ってきた」

「そうなの！？大丈夫だった？」

「ああ。フォルスが言っていた様なことは起きたけど、無事合格すること出来たよ」

フォルスはそれを聞いて、安心した表情をした。

セントのことを心配していたのだろう。

「おめでとう！さすがセントだね」

「ありがとな」

フォルスはそう言ったとき、セントが誰かを背負っていることに気づいた。

「ところでセント、その人は？」

「ああ、一緒に試験を受けたんだ」

セントが少し下にずり落ちてきたルリアを背負い直しながら言った。
「試験中に派手に一発撃ったせいで、力が抜けたみたいで歩けなく

なつたから、ずっと背負って来たんだが……」

「寝ちやったってこと？」

フォルスの言葉に同意するかのようにルリアの寝息が聞こえた。

「ああ。多分唐突に疲れが出たんだろう」

「そっかあ。セント、大変だったね」

「いや、結構軽いからそんなに負担にはならなかった」

「そっか。とにかく、お疲れさま」

フォルスはそう言った後、何かを思い出した。

「そういえば、みんなにセントのことを話したら、たまには顔出しに來いって言ってたよ」

「そうか。余裕が出来たら行くようにするよ。皆に伝えてくれてありがとうとな」

「ううん、そのくらいは頼まれたんだから当然だよ。それじゃあ、セントも試験後で疲れてるだろうし僕はそろそろ戻るね」

「分かった。気をつけてな」

「うん！じゃあね」

フォルスは闇の中へ走っていった。

それを見えなくなるまで見送る。

「さて、早く帰るかな」

そう言ってセントが歩き出そうとしたとき、再び声が聞こえた。

「…セント……」

「ん？」

セントは振り返るが、後ろには背負っているルリアしかない。

「起きたのか？」

「すう……」

セントは起きたと思い声をかけるが、返ってくるのは先ほど同じく寝息だった。

（寝言だったのかな？まあいいか）

セントはそう納得すると家に向かって再び歩き始めた。

第8話 夢の中の少女

（あれ？ここは…）

ルリアは気がつくと、見知らぬ場所に立っていた。

（夢の中かな？）

そう思いつつも周りを見渡す。

ずっと平原が広がっているが、やはり何処かは分からなかった。

（そういえば、試験はどうなってるんだろう…）

そんなことを考えていると、突然強風が吹いた。

「うつ…！」

余りの強さに立っていらなくなり、その場に身を屈み目を瞑った。
風は少しの間吹き続け、吹き始めと同じように突如吹きやんだ。

「……止まったかな？」

ルリアは恐る恐る目を開けた。

先ほどと変わらない景色が広がっている。

（とりあえず大丈夫かな？）

そう思うと立ち上がるうとする。

「だれ？」

「きやあっ！」

しかし突然後ろから聞こえた声に驚いて、バランスを崩し、尻餅をついた。

「だ、大丈夫？」

「いたた…大丈夫だよ」

ルリアが後ろを振り返るとそこには、若草色の髪をした少女が困惑した表情をしていた。

「良かったあ。ごめんなさい、驚かせたりして」

「うつん。大丈夫だよ」

ルリアは少女を落ち着かせようと頭を撫でてみた。

少女は最初は警戒していたが、安心してくれたようだ。

「お姉ちゃんの名前は？」

ふと少女が尋ねてきた。

「私はルリアだよ。あなたは？」

「エミリっていうの。ルリアお姉ちゃん、その鞆から出てるのは？」

「え？あ…」

ルリアはいつの間にか鞆を持っていることに気がついた。

ルリアは鞆の中の物を取り出す。

「これは…」

鞆の中の物を取り出してみると、一冊の古い魔術書でルリアが試験中に使ったものだった。

「わあ！すごいぼろぼろだねー。見てもいい？」

「うん。いいよ」

ルリアはそう言うのと魔術書を渡した。

「わーい！」

エミリは受け取ると、早速中を見始めた。

「ルリアお姉ちゃんはこんな難しい本を読んでの？」

「そうだよ」

「すごい！」

目を輝かせながら、エミリは言った。

ルリアは過大評価じゃないかと思いつつも、少し照れ臭い気分で魔術書に見入るエミリを見ていた。

少しして、一通り見終わったのかエミリは魔術書をルリアに返す。

「お姉ちゃん、ありがとう！」

「いえいえ」

「それじゃあ、わたしは行くね」

「そうですか。気をつけてね」

「うん！今度は森で会おうね！」

「え？」ルリアはエミリが最後に言った言葉に思わず聞き返す。

しかし、再び先ほどよりもさらに強い風が吹いた。

ルリアは腕で顔を隠し、飛ばされないように身を屈めるが身体が浮

いた。

（まずい！）

そう思ったがもう遅くそのまま風に流された。

ルリアは飛ばされている中で元いた場所を見ると、既にエミリの姿は無かった。

そして、ルリアの意識は途切れた。

「う……………」

ルリアは小さな呻き声をあげ、目を開くと見慣れた天井が視界にはあった。

（やっぱりさっきのことは夢だったのかなあ。それにしても、また会うつて…）

ルリアはエミリが最後に言った言葉について考えていたが、奥から声がしたので考えるのをやめた。

「やっと気がついたか？」

「セント？」

ルリアは身体を起こし、セントと向き合う。

「1日経っても起きないから心配したよ」

「そうなの？」

「ああ。外を見てみなよ」

ルリアはそう言われて外を見ると、既に日は沈んでいて夜を迎えていた。

「ほんとだ…私はそんなに長く寝ていたんだ…」

ルリアは戸惑いながらも、気になっていたことを聞く。

「そういえば試験はどうなったの？」

「ああ、無事合格したよ。詳しいことは後日連絡するそうだ」
それを聞いてルリアは安心した表情をみせた。

「そっか。ありがとう…」

「良かったな」

「うん。セントが引き受けてくれてほんとに良かった…」

ルリアはそう言ったが、声が涙ぐんでいた。

セントは、優しくあやすようにルリアの頭を撫で始めた。

暫くして、ルリアが落ち着いたのでセントは撫でるのをやめ、口を開く。

「とりあえず夕飯にするけど、歩けるか？」

ルリアは頷くと、ベッドから降りる。

セントはそれを見ると先に部屋から出ていった。

ルリアは歩き出す前に何となく、外を眺めた。

窓の外は変わらず静かな街が見える。

「今度は……森で…」

そう言い聞かせるように呟くと、ルリアは部屋を後にした。

第9話 新たな始まり

「結構広いね」

部屋に入ってきたルリアはそう言うと、置いてあったベッドを見つけて飛び込んだ。

「そうだな」

遅れてセントが部屋へと入ってきた。

今日は学園の寮への移動日で、二人も寮へ来ていた。

学園は試験会場でもあった広場と森を挟んで反対側にあり、セリアの街の近くでもあるので来るまでには余り時間はかからなかった。

「なにやってんだ？」

セントはベッドに倒れ込んでいるルリアを見て言った。

「んー、ベッドの硬さを確認しようと思って何となく？」

ルリアは起き上がり、ベッドに座る。

「そう聞かれても困るんだが…」

セントは部屋の隅に荷物を置いた。

授業自体は2日後から始まるので、それまでは一応自由行動となっていた。

「セント、片付け終わったら時間もあるから寮の中を見てまわらない？」

ルリアが外を眺めながら言った。

寮は森の隣にあり、窓からは鬱蒼と生い茂る森が見える。

「ああ、いいよ。ちょっと待っててくれ」

セントはそう言うと、手早く荷物を棚にしまっていく。

数分後、二人は部屋を出て見学を始めた。

寮は四階しかないが、建物が広く作られているため相当な大きさだった。

部屋割りは各パーティーにつき一部屋、人数が多いときは二、三部屋となっていて、階や区画に応じて男女分けがされているのだが、

セントたちのように男女混合という場合もある。

セントたちはとりあえず今いる四階を歩き、自分達の部屋の位置や階段の場所を把握する。

余りに広く、更にやや複雑な構造のため場所が分からなくなってもおかしくないとセントは思い、先に自分たちのいる階層を見てまわることにしたのだ。

廊下を歩いているときにルリアは、ここの大きさを改めて実感していた。

途中で誰ともすれ違わなかったが、最上階ということもあるのだろうとルリアは思った。

ある程度見てまわった所で下に降りた。

一階へ降りると、生徒らが続々とやって来るのが見えた。

到着した生徒達は部屋割を確認すると次々と階段を上がっていく。

どうやら、二人が来るのが早かったようだ。

寮の一階には、食堂や運動場などの公共の施設があり、食堂に関しては時間によつては非常に混雑するため二ヶ所もあるのだ。

食堂のメニューは分類が多く豊富で気になったものもあるので、楽しめそうとルリアは思ったが、セントは良いものが無かったという表情をしていたように見えた。

その後、室内運動場や売店、もう一ヶ所の食堂などまわった。

どの場所でもちらほらと生徒が見られたが、食堂だけは、大勢の生徒で賑わっていた。

時間的にはもう日が沈み、暗くなり始めていて夕食には丁度いいくらいになっていた。

「ついでに食べていくか？」

ルリアはそれを聞いて頷こうとする。

しかし、

くきゅう...

「！！」

腹の虫が鳴ってしまいセントを見るがセントは少し笑っていた。

ルリアは恥ずかしさのあまり、顔が真っ赤になり否定しようにも言葉が出なかった。

「…とりあえず入るか」

セントは困ったように言う。ルリアは俯いたまま無言で頷いた。

二人は注文をし、受け取ると座席を探す。

幸い席はまだいっぱいではなくすんなりと座ることができた。

ルリアは先ほどのことのせいでまだ顔が少し赤かったが、とりあえずほとんどもとに戻ったようだった。

「それじゃあ頂きます〜」

「頂きます」

そう言う。それぞれの料理を食べ始めた。

暫くの間、黙々とルリアは食べていたが嬉しそうに口を開く。

「中々美味しいね〜」

「ああ、そうだな」

セントがそう言った時にはもう食べ終わっていた。

決してセントの分の量が少ないわけではなくルリアのとはほぼ同じか、むしろ多いくらいなのである。

それでも気がつくといつもセントは、食べ終わっているのだった。

「それにしても相変わらず食べるの速いよね〜」

「そうか？」

セントは食後の珈琲で一服をしていた。

「うん」

「特に意識している訳ではないんだが…」

「そうなんだ〜」

ルリアはそっけなく返した。

ちなみにルリアは食べるのが遅く、今もまだ半分以上が残っていた。セントはのんびりと口に運ぶルリアを見ていて何となく微笑ましく思えた。

数十分後、ようやくルリアが食べ終わった頃にはセントは三杯目の珈琲を口にしていた。

セントがそれを飲み終え、少ししてから席を立ち部屋へと戻ってきた。

「はあ。ちょっと食べ過ぎちゃったかなあ」

ルリアはそんなことを言いつつベッドに寝転んだ。

「じゃあ、俺はもう寝るな」

「わかった。おやすみ」

「ああ」

そう言っているとセントは自分の寝室へ入っていった。

ルリアはそれを見送ると外に目を向ける。

今夜は弓張り月で薄暗く、すぐ近くまで迫っている森が少し不気味に見えた。

ルリアはしばらく外を見ていたが、カーテンを締めると立ち上がり簡単に支度をする、導かれるように部屋を出て外へと向かった。

第10話 少女との約束

夜の闇に覆われた森の奥の、月明かりが射し込んで少しだけ明るい場所に一人の少女がいた。

その少女はやや大きな切り株に腰掛けて誰かを呼びかけるように小さく呟いた。

「……お姉ちゃん……」

高い声は大きくはなかったが辺りが静かなため、少しだけ響いた。するとその言葉に答えるかの様に弱い風が吹き、木々を揺らした。しかし少女が辺りを見渡しても特に異変は無かった。

「待つてるよ……」

風の音に掻き消されるほど小さい声で再び呟くと、月が昇っている天を仰いだ。

約束の人が必ず来ることを信じて…

「ほのかな光よ、小さな明かりとなり辺りを照らし出せ……」
ルリアが詠唱をすると杖の先に光が灯った。

風魔法以外は、魔術書無しでは扱えないのだが簡単なものは一応使うことが出来た。

ルリアは部屋を出てから、あの夢の少女が言っていたことに導かれるように森に来たのだった。

「とりあえず灯りはこれでいいかなあ」

ルリアはそういうと、森の中へ歩き始めた。

森は試験の時とはだいぶ違った姿で、数歩歩くだけで先ほどいた場所が見えなくなるほど見通しが悪く、更に相変わらず道らしきものはあるが足元も良くない。

それでも走っているのとはほとんど変わらないくらいの速度で進んでいった。

しばらく進むと、少し足元がすっかりとした場所に出た。

「ここは……」

ルリアは杖をかざし、辺りを照らし出した。

近くには川が見えるこの場所は見覚えがあった。

「結構近くだったんだあ」

ルリアは辺りを見渡して、そう言った。

前回試験で来たときは、この場所で男達に襲撃され何とか退けたものの、その時に放った魔術の反動でルリアは、意識を失ったのだった。

ルリアはそのことを思い出したのか、苦笑いを浮かべたが、さらにあることを思い出し小さく呟いた。

「そつえばあの魔術書……」

試験後からあのときルリアが使った魔術書が何故だか見当たらないのだった。

「たしか鞆にしまったんだけどなあ……………今度セントに聞いてみよう」と

そう自分で完結させると再び奥へと進んでいった。

更に進んでから二時間ほどたった。

ずっと歩き通してルリアの息が少し上がっていた。

杖に灯っている光もだいたい時間がたち、弱くなって消えかけていた。

「はあ… ちよつと疲れたなあ」

そう言いつつもさらに歩みを進めた。

しかし途中で明かりとなっていた光が消えて、辺りが闇で閉ざされた。

「もう一度つけないと…」

そう言うのと立ち止まり、詠唱をしようとする。

ガササツ

「！」

突然茂みから音がして、杖を構え直すと周囲を見回す。

しかし視界が悪いため何処から音がしたのかが分からなかった。

しばらく警戒していたが何も変化がなく、ルリアが少し気を緩めた時だった。

「お姉ちゃん！」

茂みから小さな影が飛び出してルリアに飛びついた。

「きゃっ！」

ルリアは振り向きはしたものの、飛びついてきた衝撃に踏ん張りきれずそのまま倒れ込んだ。

「いたた…」

体を起こして見てみるとそこには夢の中に出てきた少女がそこにいた。

「来てくれたんだね！」

少女は嬉しそうにそう言つと半身を起こしているルリアに抱きついた。

「えっと……エミリちゃんだよね？」

「うん！覚えててくれたんだね」

それを聞いて、色々と思ひに思ひつつも再び出会ったことが嬉しく思えた。

「そつえばどうしてここに？」

ルリアは当然のように出てくる疑問を聞いてみた。

「ん……あれ？」

エミリはルリアに言われて答えようとしたが何故か頭をかしげる。

「なんでだろう？」

「え？」

思つてもいなかった言葉に驚き、ルリアは思わず聞き返した。

「ほんとに？」

「うん。気がついたらここにいたんだもんっ」

エミリはルリアが信じていないと思ひ、頬を膨らませて言つた。

「そうですか。ごめんね」

ルリアはエミリの機嫌をとるために、頭を撫でた。

暫くすると、エミリは嬉しそうな表情に戻つた。

それを見てとりあえず安心したルリアだつた。

「さて、じゃあ帰るかなあ」

「お姉ちゃん、ついてつてもいい？」

「もちろんですよ」

そう言つとルリアは屈むとエミリに背を出した。

「わーい！」

エミリはルリアの背に勢いよく飛び乗つた。

勢いが強く、少しだけふらついたが思つたよりもエミリは軽くどうやら普通に歩けそうだつた。

「じゃあ行きますよ」

「うん！」

そう言くとルリアはエミリを背負い直して歩き出した。

ガサ…

「！」

歩き始めてから間もなく茂みから小さな物音がして、思わず立ち止まり辺りを見渡す。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

エミリは先ほどの音が聞こえなかったのか心配そうに声をかける。

「ちよつと走るからちゃんと掴まっててね」

ルリアは少しだけ小さい声で言った。

「うん！」

元氣よく返事したのを聞いてルリアは静かに走り出した。

第11話 空を舞う翼

「はぁ、はぁ……」

「大丈夫？」

ルリアはエミリと出会った場所からずっと走り続けていて、だいぶ息が上がっていた。

「大丈夫だよ……ふう……」

ルリアはそうは言ったが、辛そうな表情をしていた。

「わたし、自分で歩くね」

「大丈夫だよ……」

ルリアはエミリが降りようとしても、降ろさずに走り続けようとした。

しかし木の根に気づかず足をとられ前のめりに倒れた。

「いたたた……」

ルリアは手が塞がっていたものの、幸いどこも怪我をしなかった。

「お姉ちゃん、少し休もう」

エミリはルリアから降りるとその場に座り込んだ。

「そうだね……」

ルリアは早く寮に戻ろうと思っていたが、走りっぱなしだった身体が悲鳴をあげ始めていたので近くの倒木に腰掛けた。

「エミリちゃん、怪我はなかった？」

「うん！」

「そうですか……ごめんね……」

ルリアはそれを聞いて安堵しつつ、エミリに謝った。

「お姉ちゃんこそ大丈夫？」

「私は大丈夫だよ……」

それだけ言うと、ルリアは空を見上げた。

木々の間から少しだけ見える空は、夜明けが近づいているのかほんの少しだけ明るくなっていた。

少ししてだいぶ呼吸が落ち着き、身体が楽になった。

「ふう……」

ルリアは一息つくとしち上がり、少し身体を動かしてみる。
これならどうやら普通に走れそうだった。

「じゃあ行きましょう」

「うん！」

ルリアが屈んで背中を差し出すと、エミリは再び勢いよく飛び乗った。

しかしルリアもそれを予想していたため、先ほどのようにふらつくことは無かった。

「じゃあまた掴まってくださいね」

立ち上がり、エミリをしつかり背負い直してそう言う走り出した。
「！」

しかし先の方で赤く光るものが見え、足を止めた。

それと同時に寒気が全身を駆け抜け、咄嗟に左に跳んだ。

ドオオオオオン……

直後、爆音が響き振り向くとルリアがいた場所には火柱が上がった。

「お姉ちゃん、前！」

「！」

突然の出来事に驚いたルリアだが、エミリの声が聞こえ前を見ると赤い光が視界に入った。

そして慌ててその場から再び跳んだ。

しかし、僅かに反応が遅れたため、爆発の衝撃に耐えきれず吹き飛んだ。

受け身をとろうにもエミリを背負っていてとれないため、何とか踏み止まろうとする。

しかし耐えきれず横向きに倒れ込み、その拍子で右足を挫いた。

「っ……」

ルリアはかろうじて立ち上がったが、挫いた足が痛み走ることは出来そうに無かった。

「エミリちゃん、逃げて！」

ルリアはいつ炎に当たってもおかしくないと判断すると、エミリを降ろして逃げるように言った。

「やだよ！お姉ちゃんと一緒にいる！」

しかしエミリは側から離れようとはしなかった。

ルリアはエミリを逃そうと振り向いたときに、再び赤い光が見えた。ルリアは何とか回避しようとするが、痛む足のせいでバランスを崩し倒れた。

（避けられない…！）

ルリアはそう思うと思わず眼をつむる。

バサッ

その直後、突然翼が羽ばたくような音が聞こえたが、ルリアは眼を開けようとはしなかった。

しかし、しばらくしても先ほどのような爆音が聞こえず衝撃なども感じられない。

「……………」

さすがに不思議に思い、眼を開けた。

「えっ…」

しかし、視界に広がっている風景に言葉を失った。

鬱蒼と生い茂っていた木々が下に広がり、ずっと遠くまで見えた。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

何が起こったのか分からず必死に考えていると、エミリの声が聞こえた。

そして、ルリアは振り返ってエミリを見て驚いた。

「っ、翼…」

「？」

いつの間にかルリアの背に捕まっていたエミリから、ガラスのように透き通った薄い緑色の一对の翼がはえていた。

そして、今二人は森の上空を飛んでいるのだった。

「お姉ちゃん？」

何故ルリアが驚いているのか、エミリにはよく分からないようで、首を傾げもう一度ルリアを呼んだ。

「！、なに？」

ルリアはようやく呼ばれていることに気づき、返事をした。

「どうかしたの？」

「えっと…その、後ろの…」

「？」

エミリは、後ろと言われて振り向いた。

「？、何もないよ」

「そうじゃなくて…背中から翼が…」

エミリはもう一度後ろを振り向き、何かに気がついたように頷いた。

「このこと？」

「うん。どうしたの？」

「んと、これは気がついたらあつたの」

そついうと背から伸びている翼を、羽ばたかせた。

「そつですか」

ルリアは色々と疑問に残つたが気にしないことにした。

「ともかく、助けてくれてありがとうね」

「うん！」

（外見が変わつただけみたい）

エミリが元気よく頷いたのを見て、ルリアは何となく安心した。

「お姉ちゃん、どこに降りればいい？」

「じゃあ……このまま真つ直ぐ行つてくれる？」

「はい」

そついうとゆつくりと羽ばたかせ、前へ進み始めた。

「ふう……あつ」

ルリアは小さくため息をついて今一度空を見た。

「もう夜明け…」

気がつくと空は金色に輝き太陽が昇りかけていて、1日が始まるつとしていた。

いつもより空に近いところにいるルリアは、思わず見とれていた。しばらくして寮の近くまで来ると、エミリは高度を下げて着地をした。

「じゃあ行きましょ」

ルリアはそういうとエミリを連れて寮へと入っていった。

第12話 風変わりの少女

「ふう、これで完成つと」

そういうとルリアはテーブルに針を置いた。

「おはよう。足はもう大丈夫か？」

「あつ、セント。おはよう」

すると、ちょうどセントが部屋から出てきた。

「まだちよつと痛むけど一応歩けるよ」

「そうか」

セントはそう言うのと近くの椅子に腰を下ろした。

昨日はセントに夜にあったことを一通り説明をして、エミリをここに居させることを伝えた。

それを聞いてセントは、どうせならいつも一緒にいたほうが良いと言い、そして怪我をしているということで、エミリを連れてメンバ―追加の申請をしにいったのだ。

さすがに事実をそのまま伝えるのは避けたほうがいいと決めていたので、エミリはルリアの親戚ということにした。

セントもルリアも申請が通るのか心配していたが、その心配を裏切るように学園長の、構わないという一言であっさりと許可が出たのだった。

周りの先生らも特に反対する者は出ず、エミリを可愛がる教員までいたのだった。

セントは椅子に腰かけると不意に、机に置いてあった物が目に入った。

「そういえば今日はやけに早いみたいだが何してたんだ？」

「それはね…」

ルリアが答えようとしたとき、エミリが起きてきた。

「おはよー…」

「おはよー、エミリちゃん」

「おはよう」

「そうだ。エミリちゃん、ちょっと来てみて」

「ん…」

エミリは頷くと眠たそうに眼を擦りながら、ルリアの近くへときた。

「はい」

ルリアは手に持っていた物を、乗せてやった。

「？」

それは先に綿の様な黄色の玉がついている、赤色の布地で作られた帽子だった。

エミリは近くにあった鏡を見ると、目を輝かせた。

「わぁ、これお姉ちゃんが作ったの？」

「そうだよ」。それはエミリちゃんに作ったんだよ」

「わーい、ありがとう！」

「良かったな」

「うん！」

セントは嬉しそうにするエミリの頭を撫でた。

「それにしても、器用なことするなあ」

「私、こういうのは得意なんだ」

「そうか。ところで朝飯はどうするんだ？」

「あつ私、作っておいたから」

「そうか。じゃあ早く食べよう。今日から登校だからな」

そう言つと皿を並べ朝食にした。

「今日からここ担当となったセフィルだ。まあ、あまり顔を会わせる機会は少ないと思うがよろしくな」

セフィルと言った教師は適当に挨拶をした。

「何だかだいぶ親しみやすそうな人だね」

「そうだな」

ルリアがそう言つとセントは少し苦笑いを浮かべて言った。

今日から授業が始まるということで教室へと移動して、今は顔合わせの最中だ。

新入生の教室は寮とは違う校舎の五階にあるため、若干肩で息をしながら入ってくる生徒も数名だがいる。

生徒のほとんどがセント達と同じ年くらいかそれ以上で、エミリくらいの生徒はいなかった。

そのため、席に着いた時はほとんどがエミリに注目をしていたのだった。

「まず実習のグループを決めてもらう。人数は大体……五人から八人くらいだな。少しの間席を離れるから、戻ってきたときに報告してくれ」

セフィルは立ち上がると扉へと向かい扉を開けた。

「ついでに……現在のメンバーで充分いるんなら、そのままでもいいからな」

そう言い残すと、教室から出ていった。

するといくつかのグループが他のグループの生徒と話し始めた。

「さて、どうする？」

「ん……誰か声掛けてくれるかな？」

「どうだろうな」

「ちよつといい？」

そうセントがルリアに言った直後に声がかかった。

ルリアは声のした方に振り向くと、少し目のつり上がっている気の強そうな少女がこちらを見ていた。

「私？」

「そうよ。一緒に組まない？」

「えっと……ちよつと待っててください」

ルリアはそう言うのとセントに視線を移した。

「セント、そういうことなだけいい？」

「ああ、べつに構わないよ」

ルリアは再び少女に視線を戻す。

「いいですよ」

「やったあ！女子のいるグループのほとんどが、人数一杯で困ってたんだよねー。本当ありがとー！」

「う、うん……」

余りに感激していたため、どう対応すればいいのか分からず戸惑った。

「そうだ、まだ紹介してなかったね」

少女はそう言うとかを探すように辺りを見渡す。

しかし、どうやら見つからなかったようでため息をつく、再びルリアの方を向いた。

「あたしは、スティアよ。よろしくね」

「私はルリア。こちらこそよろしく願いますね。それと……」
そこまで言う、と再びセントの方を向く。

セントは頷くと、前に出た。

「俺は、同じパーティーのセントだ。よろしくな」

セントは小さく手を挙げてそう言った。

「エミリちゃん、ちよつと来てください」

セントが言い終わるとルリアはエミリを呼んだ。

「えっと、この子も私のパーティーだよ」

「わたしはエミリっていうの」

「きゃー可愛いー！」

「ふえ！？」

スティアは突然エミリに抱きつき頬擦りを始めた。

突然のことにセントもルリアも啞然としていたが、少ししてようやくルリアが声をかける。

「あ、あのスティア？」

「え？……あつ」

ようやく気がついたのかスティアは慌ててエミリから離れた。

「ご、ごめんね！」

そしてすぐに謝ったが、既にエミリは少し放心状態になっていて、こくこくと頷くたびに帽子の玉が揺れる。

「突然どうしたんですか？」

ルリアがエミリを膝に座らせて、スティアに聞いた。

「実はこれ癖になっちゃってるんだよねえ。自分でも直したいって思ってるんだけど……」

スティアは少し困った表情をして言った。

「そうなんですかあ」

（変わった人もいるんだなあ）

そんなこと思いつつ、ルリアはあることに気がついた。

「そういえば、パーティーの人はどうしたの？」

「あたしのパーティーは二人だけださっき捜してみたらいなかったわ。トイレにでも行ってるのかしら……悪いけど、またいるときに紹介するね」

やや残念そうにスティアが言ったとき、扉が開いた。

「それじゃ、グループの人数が集まった所から言いに来てくれ」

セフィルが教室へと戻ってきてそう言った。

「じゃあ、行くわよ」

「あつ、うん」

「はい」

スティアがそう言うのとルリアとエミルは返事をして、セントは一度

頷いて歩き始めた。

「……メンバーはこの五人でいいんだな？」

セフィルは名簿に書き込みながら、セント達に聞いた。

「はい！」

皆を代表するようにスティアが返事をした。

「わかった……ん？」

そう言ったときにセフィルは一人足りないことに気がついた。

「そういえば、一人足りないがどうしたんだ？」

「あたしの連れが居ないんですよ。トイレにでも行ってると思います」

「そ、そうか」

スティアの余りに投げやり気味の言い方にセフィルは少し驚いていたが、余り気にせずにスティアはその場を離れた。

「では、失礼します」

セフィルに一礼するとセント達も、後を追った。

「スティア？」

「悪いけどちょっと捜してくるね。さすがに遅すぎるから……」

「それじゃあ私達も手伝う？」

「ううん、大丈夫。ありがとね」

そう言う教室から出ていった。

「……お姉ちゃん、どうするの？」

「スティアを手伝いたいけど、足を引つ張るだけになりそうだからここにいましょ」

「はい」

三人は、スティアが戻るのを待つことにしたのだった。

第13話 振り回される少年

「まったく、何やってたのよ!」

「わかった、悪かったって!」

ルリアはスティアを捜しに来て、ちょうど見つけたのだがスティアの行動に茫然とした。

スティアは何故だか分からないが、先ほどから一人の少年を殴っていた。

とりあえず何がどうなってるのかを聞くため、スティアに声をかける。

「ス、スティア?」

「!」

ルリアがいることに気がつく、スティアはすぐに手を下ろした。

「あら、どうしたの?」

殴られていた少年はその場にうずくまっていたが、何事も無かったかのようなスティアの対応に、ルリアは驚いたが触れないほうが身の為だと思い、聞かないことにした。

「もう終わったから、スティアを捜してたんだよ」

「そうだったの?」

「うん。だってもう同じパーティーなんだから仲間じゃないですか」

「!」

スティアはルリアの言葉に感激して、ルリアに抱きついた。

「えっ、ちょ、ちょっと!」

「ほんとにあなたたちと組んで良かったわ!」

「ちか……が……」

余りにも力強い抱擁にルリアは意識が薄れていく。

「やっと見つけた……って何してんだ?」

その時、ちょうどセントとエミリがやってきて、今の状況を見たセ

ントがそう言った。

「あら、セントも来てたの？」

スティアはセントの姿を確認すると、ルリアから手を離れた。すると、気を失っているらしくその場に力無くへたりこんだ。

「お姉ちゃん！」

それに気がついたエミリが慌てて近づき、ルリアを揺さぶり始める。

「またかよ……………」

先ほどまでスティアに殴られてうずくまっていたがようやく復活した少年が、呟くように言った。

「……………ごめんなさい」

少年の呟きが聞こえてスティアは少年を睨んだが、事実を突かれてしまったのでそのまま謝った。

何が何だかよく分からなくなってきた状況にセントは、仕方なく苦笑いをしていた。

「改めて紹介するね。こいつがあたしの連れのウェディよ」

「おう、よろしくな…って痛いから！」

少年は、セントたちに挨拶をすると自分を叩いているスティアに言った。

五人は今、寮の談話室にいる。

先ほどまでは廊下にいたのだが、邪魔になるということで此処に移動したのだ。

「あら、そんな強くはしてないわよ」

「そういう問題じゃなくて！」

また騒ぎ始めた二人からセントはエミリに視線をやった。

「起きてよー……」

此処に着いてからもエミリはずっとルリアのことを呼んでいるが、未だに眼を覚まさない。

「お兄ちゃん……」

すると、エミリは今にも泣きそうな声でセントのことを呼んだ。

「はは……ほら、おいで」

苦笑いを浮かべてセントはそう言うと言とポンポン、とエミリを撫でた。
「うう………」

セントの服を掴み顔を埋め、エミリは小さく嗚咽を漏らす。

「そういえば、まだこっちの紹介はしてなかったな」

セントはエミリを落ち着かせながら、ふと思い出した。

「そういえばそうだったわね」

エミリの様子に、やや俯き気味だったスティアもセントの言葉に頷いた。

「俺はセント。そして、この子がエミリで今椅子で寝ているのがルリアだ。これからよろしくな」

「おう。それにしても、慣れてるんだなあ」

簡単な紹介が終わるとウェディが、ふと漏らした。

「ん？」

「いやあ、なんというかさ……その、子供を宥めるといふかさ」

「ああ、そういうことか」

ウェディの言いたいことが何となく理解したのか、セントは再び苦

笑いを浮かべた。

「そんな大したことじゃ無いんだけどな」

「そうよ。アンタが過大評価し過ぎなだけよ」

「……それもそうか」

ウェディは、釈然としないものがあつたが渋々納得をした。

「あら、もうこんな時間だわ」

ふとスティアが時計を見ると、ちょうど1時になるところだった。

「そろそろ昼飯にでもするか？」

「そうね。でもあなたたちはどうするの？」

「部屋で作ることにするよ。エミリがきつとルリアから離れようと思わないから食堂にも行けないだろう」

そう言つとセントは、再びエミリを撫でた。

「そう。それじゃあ、此処に戻るからまたあとでね」

スティアはそれだけ言つて立ち上がると、ウェディを待たずに談話室から出て行つた。

「あ、おい！……はあ」

ウェディが呼び止めたが気にせずに行つてしまい、溜め息を漏らした。

「じゃあ、また後でな」

「ああ」

そう言つとウェディもスティアの後を追つてここから去つて行つた。

「さて、部屋に戻るからちょっといいか？」

「うん……」

セントはエミリを立ち上がらせると、自分も立ち上がる。

「よつと」

そして、椅子に寝かせていたルリアを上手く背負つと談話室を後にした。

第14話 魔術と剣

「う……………」

気がつくとベッドの上にいた。

「…………あれ？」

辺りを見渡して此処が自分達の部屋だということが分かった。

「たしかスティアを見つけて…………ん？」

ルリアは考えているときに、やけに温かいことに気がついた。

そこを見ると、エミリが寄り添うように寝ていた。

「エミリちゃん？」

何となくルリアは呼んでみたが、意外にも返事はかえってきた。

「あ！気がついた？」

寝ていたはずのエミリが起きて、ルリアに抱きついた。

ルリアは何だか分からなかったがとりあえず、頭を撫でてやった。

すると徐々にエミリの力が抜けて、そのまま寝てしまった。

「やっと気がついたか」

「セント？」

聞き慣れた声がしてセントの姿が視界に入った。

「その…………スティアは？」

「ルリアが起きるのを待っていたがもう部屋に戻ったよ」

そう言われて、なんとなく外を見ようとしたが、カーテンが閉まっ

ていたせいで外の様子は分からなかった。

「因みにもうそろそろ日付が変わるよ」

ルリアの意図を読み取ったのか、セントがそう言った。

「えっ!？」

その言葉が信じられず、勢いよくカーテンを開けて外の様子を見たところでルリアは固まった。

「ほんとだ…………」

真上で輝いている月が、セントの言葉の真偽を表していた。

変わらない事実ルリアは小さく呟き、色々と考え込み始める。

「気絶だけで半日近くも眼を覚まさないのは珍しいと思うのだが……」
ルリアは、セントの言葉に頷いたが、セントは無意識に頷いているのだらうと、ルリアの様子を見て思った。

「……とりあえず、空腹は大丈夫か？」

どう返せばいいのかなかないかつかず、少し悩んだセントだが話題を変えることにした。

しかしそれもルリアはまともに返事をせず、先ほどと同じように頷いただけだった。

「……………食べたくなったら言ってくれ」

とうとう諦めたのか、セントはそう言い残して部屋から出ていった。

「……………あれ？」

しばらくして我にかえったルリアはセントの姿が見えなくなっていることに気がついた。

どうやらセントが思った通り、無意識に頷いていたようだ。

（お腹空いたなあ……）

そう思っただけルリアはベッドから降りようとしたが、あることを思い出した。

「そういえば……」

寄り掛かるように眠っているエミリを抱きあげてから立ち上がると、ベッドに寝かせた。

あどけないエミリの寝顔を見て、自然と頬が綻ぶような気分になりながらルリアは部屋を後にした。

「実技試験？」

「なんだ、聞いてなかったのか？」

首を傾げたスティアにセントはそう言った。

今日も授業らしいことはせず、ほとんど連絡だけで解散となり、今は昼食にむけて食堂に移動している最中だ。

「先生が忘れて慌てて伝えてたのだよ」

ルリアが続けて補足する。

「そつえば、言っていたような…」

「ちゃんと聞いておけよ…」

頑張っと思いついて出しているスティアの隣で、ウエディが小さく呟いた。しかしその言葉が不運にもスティアに聞こえてしまう。

「うっさいわね！そういうあんたは聞いてたの？」

「当たり前だ！」

「ちよつと二人とも落ち着いて」

言い争いが始まりそうなところでルリアが仲裁に入った。

「こんなところでケンカしないでよ」

所構わず言い争いをするのは、他人からしてみれば迷惑であるため、二人は仕方無く押し黙った。

「ねー、お兄ちゃん」

「ん？」

スティアたちの少し後ろを歩いていたセントは、エミリが服を引っ張っていることに気がついた。

「なんでよくケンカするの？」

主語が抜けているが、どうやら前を歩く二人のことを聞いているらしい。

「あー……」

エミリの疑問にどう答えようか悩んでいると、ルリアがこちらにきた。

「どうしたの？」

セントはルリアに先ほどエミリが言ったことを聞くと、困ったように笑いながらも答えた。

「それはね、二人が仲良しだからだよ」

「？」

しかし、エミリは何故そうなるのか分からず首を傾げていた。

「そのうち分かるようになりますよ」

そんな様子を見たルリアは、エミリを撫でてそう言った。

「何の話してるのかしら？」

いつの間にか前を歩いていた二人も加わっていた。

「ねーねー、スティアお姉ちゃん」

「あら、なに？」

スティアがエミリの方を向くと微笑んだ。

「スティアお姉ちゃんとウエディお兄ちゃんって仲良しなの？」

「え、ええ！？」

突然な質問の内容に、スティアは顔を赤くしてあたふたと落ち着かなくなっていた。

ウエディも驚いたように目を見開いて、エミリを見たがすぐに下を向いた。

「スティア！？」

ルリアは慌てて近寄り、スティアを落ち着かせる。

この状況を作り出したエミリだが何が何だか分からず、首を傾げてセントを見た。

そんな視線に気がついたセントは、苦笑いを浮かべるとエミリを撫でてやった。

「……もうっ、行くわよ！」

落ち着きを取り戻したスティアだが、今度は取り乱したことが恥ずかしくなり、先に歩いて行ってしまった。

「あつ、おい！」

ステディアの後を追ってウェディも早歩きで前に行った。

「何だかんだで仲良いよね〜」

「確かにそうだな」

ルリアは二人の後ろ姿を見ながらそう言うのとセントもその言葉に頷き、そして二人を追い始めた。

食堂に着くと、既にたくさんの生徒で混雑していた。

「おい、こっちだ」

しかし、先に行ってしまった二人が席を取っておいてくれたようで、座席からウェディが手を振って呼んでいた。

三人は適当に注文を済ますと、席へと向かった。

「遅いじゃない。食べずに待ってたのよ」

「ごめんごめん」

ルリアは謝りつつ、席に着いた。

「そういえばさ」

あとの二人も席に着き、皆食べ始めたときにウェディが何か思い出したように言った。

「実技試験がどうかしたのか？」

「ああ、特にどうってことは無いんだが一応良く使う魔術くらいは聞いておこうかと思っただけ」

「そういうことね。あたしは光属性の魔術を使うわよ」

「俺は……」

何か言いかけたが、すぐに口を閉じてしまった。

ステディアが心配そうにウェディを見たが、一度頷くと再び口を開いた。

「実は、魔術とかそういうのがほとんど使えないんだよ」

「あたしがずっと教えてきたんだけど……」

ウェディの言葉にステディアはやや俯いてそう言った。

「丁寧に教えてくれるんだけど、厳しすぎるんだよなあ」

「あんたがちゃんと言った通りにやらないからよ！」

「だからってわざわざ殴る必要は無いだろ！」

再び言い争いを始めた二人をルリアが落ち着かせる。

「それにしても、よくそれで入学試験合格できたね。」

「昔、父親がこの国の王立軍に所属していたさ。親に剣技を教わったおかげで多少なら扱えるから、スティアが剣で術が撃てるようにしてくれたんだ」

「どういうこと？」

「俺の杖みたいな感じだよ」

「あれか。」

疑問に思ったルリアにセントがそう言うすぐに納得した。

「参加するように頼んだから、やろうとは思っていたけどあれは大変だったわ。何度も調整したりしたからね」

スティアは思い出したのか、そう言う溜め息をついた。

魔力の多さは、血筋が関係してくるためどうしても差が出てしまい魔術がほとんど使えないという人も少なくない。

そのため、誰でも使えるように様々な物に魔力を込める技術が生み出された。

詠唱無しで魔術が使える術符などがその一例である。

「……つと、だいぶ長話をしちゃったね」

スティアが、ふと時計を見てそう言った。

「このあと、ちょっと術の調整とかしたいんだがいいか？」

「わかった」。スティアとウェディはどうする？」

ルリアは、よく分からない話が続いて眠りこけているエミリを抱き上げて、二人に聞く。

「あたしたちも付いていくわ。最近魔術使ってなかったし、こいつの剣の状態もついでに見ておきたいからね」

「勝手に決められたのが少し不服だけど、まあそういうことな」

「じゃあ行きましょう」そう言うと五人は席から立ち上がると、食堂を後にした。

第15話 有意義な午後

「……………これでいいかな？」

ふうっ、と大きく息を吐いてからステイアは立ち上がった。

「ちょっと使ってみて」

そして、手に持っていた剣をウェディに投げ渡した。

「あぶなっ！？」

思わぬ行動に、ウェディは咄嗟に身体をずらして剣の軌道から外れると、顔目掛けて飛んできた剣の柄を掴む。

「し、死ぬところだっただろ！」

ウェディは顔を真っ青にして叫んだ。

「あら、あんたなら避けられるんだからいいじゃない」

しかしステイアは余り気にしていない様だった。

「それよりも、早くそれ使いなさいよ」

そう言われ、ウェディは何か言いたげだったが渋々構えた。

「そういえばさ、何を相手にすればいいか？」

「知らないわよ。自分で考えなさい」

今は、ウェディの剣をステイアが点検、調整を終えて調子を見るところだ。

「そう言ってもなあ。ただ素振りするだけで判るものなのか？」

「それはあんた次第よ」

はあ、と溜め息をついて構え直すと何時もやっているように剣を振る。

「……………どう？」

「やっぱり相手がいないと駄目みたいね」

それを聞いて、ウェディは必死で相手を思い浮かべようと頑張っていたが中々上手くいかない。

そのとき、ちょうどセントがやってきた。

「なにやってんだ？」

「ウェディの剣を診てたのよ。でもあれが相手居ないと術が使えな
いって言うから、確認が出来なくて困ってるのよ」

スティアの話を聞いて、セントは深く頷いた。

「それなら、俺でいいなら相手になろうか？」

「セントは剣を使ったことあるの？」

「剣は無いが前に槍なら振り回したことならあるよ」

セントはそう言って、左手を掲げる。

するとその左手に光が集まって形を成し、杖となった。

「――！」

セントの行動に首を傾げていたスティアだったが、突然起きたことに驚いていた。

「特に切り結ぶわけじゃないんだからこれでも大丈夫だろう」

「そうだけど、杖壊れたりはしないの？」

セントは頷くと、未だに頑張っているウェディの元へと歩いて行った。

「ウェディ？」

「うわっ！？」

ウェディは、セントが近づいてきたのが気がつかなかったのか驚いて、反射的に振り向きつつ剣を横一閃に振った。

「セントっ！？」

突然のウェディの行動にスティアが反射的に叫んだ。相手が誰だか気がついたウェディも、軌道を変えようとする。

しかし、セントは顔色一つ変えずに持っていた杖で上手く受け流し、後ろへ飛び退いた。

「大丈夫っ！？」

「ああ、少し驚いたがな」

顔を真っ青にしていたスティアは、それを聞いて安堵したのか力無くその場に座り込んだ。

「セント、すまねえ！」

ウェディもその場に剣を落とし、駆け寄って謝った。

「特に怪我とかも無かったから気にすることないさ。それよりも……」
セントは言い淀みつつ視線をスティアに向けた。

「？」

それにつられてウェディの視界がスティアを捉えたとき、顔が青くなつた。

「あ、やば……」

「行ってあげたらどうだ？」

「お、おう……ほんとに悪いな……」

そう言くと、ウェディは急いでスティアの所へと行き謝り始めた。
相当大声で謝っているらしく、部屋中に響いている。

しばらくその光景を見ていたが、セントはふと持っている杖に目をやった。

透き通った水色をしている杖はうつすらと光を発している。

「どうしたの？」

「ん？……ああ、ルリアか」

セントが振り向くと、ルリアとエミリが此方にやってきた。

先ほどまで、別の場所で身体ならしとして魔術の訓練をしていたのだが、どうやら終わったようだ。

「あの二人を何とかしてくれないか？」

ルリアは言いたいことが解ったのか、面白げに微笑見ながら頷いた。
「ちよつと待っててね」

そう言つてエミリを撫でると、スティアの所へと歩いて行きまだ謝っているウェディに声をかけた。

「？」

エミリはこういうことが分からなかったようで、首を傾げていた。
ウェディの声が止まってから少しすると三人とも此方へ向かつてきた。

「セント、ごめんなさい……」

スティアもなんとか立ち直つたようだが、まだ若干目が赤い。

「もう過ぎたことだから気にするなよ」

セントは笑いながらそう言った。

「それよりもやるんだろ？」

「え、ええ…お願いしていいの？」

一度頷くとセントは杖を構えた。

ウエディも剣を構えたが何を思ったのかすぐに下ろしてしまった。

「なあ、スティア」

安全な所まで下がっていたスティアはウエディの方を向いた。

「これ、前と同じで大丈夫なのか？」

「若干前よりも多彩なことが出来るはずだけど基本的には同じね。色々試してみて」

それを聞いてウエディは頷くと、再び剣を構えた。

「障壁張ったから、本気だしても問題ないはずだ」

「わかった。いくぞっ！」

そう言うとうエディは素早く踏み込み、ちょうど胸の高さで白く光を発している剣を振り抜いた。

だが、セントは杖で軌道を変えると同時にバックステップで若干後退し紙一重で避ける。

杖に当たった直後に一瞬青白い光が走った。

その後もウエディは立て続けに斬撃を繰り出す、全て防がれていた。

「……見たところは大した問題はないかな」

ウエディの手元を見ていたスティアは、鞆から取り出した手帳に何かメモをしていた。

「スティアお姉ちゃん、何してるの？」

エミリが興味深そうにスティアのメモを覗き込んでいた。

「ウエディの剣の修正するところをメモしているのよ」

そう言うてエミリの方を向いて微笑んだ。

ちょうどルリアもエミリの様子を見ていたので、目があった。

「あれ、そういえばスティア眼鏡していたんだね」

「そうよ。でも普段は特に問題無いから掛けてないわ」

そう言うとスティアは少しずれた縁の赤い眼鏡を掛け直して、視線を戻した。

「そうなんだ」

そう言つてルリアはスティアの邪魔にならないように、エミリを抱き上げた。

「大体これくらいでいいかな」

そう言つと眼鏡を外して、鞆にしまった。

「はあっ！」

気合いの入った声と共にウェディが大上段から剣を降り下ろす。

先ほどまでと同じようにセントは杖で受けたがその瞬間に今までよりも眩い光が起こった。

「！」

目が眩んだため、衝撃に耐えきれずセントは後方に吹き飛んだ。

何とか着地しようとしたが、勢いが強すぎて後ろに転がつて倒れた。

「セントっ！」

おもわずルリアはセントに駆け寄る。

そして他のメンバーもセントのところに集まった。

「いてて…」

腕をおさえながら、セントは上体を起こした。

「お兄ちゃん！」

ルリアに降ろしてもらったエミリが飛びついた。

「心配させて悪かったな」

そう言つと抱きついているエミリを撫でた。

「大丈夫っ？」

「ああ。少し腕を打っただけだから大丈夫だよ。それに、手合わせとかするならこれくらいの怪我は付き物だからな」

「そっか…」

ルリアはそれを聞いて、安堵の表情を浮かべた。

「またごめんなさい…」

「もう気にすることないさ」

セントはエミリを抱いたまま立ち上がった。

「それよりももう夕方だし夕飯にしよう」

「おう、そうだな」

「……………」

「ご、ごめん…」

ウェディは頷いたがスティアに睨まれて、少々縮こまった。

そんな様子を見て、セントは面白そうな表情をすると、この場所から出ていった。

「あつ、待ってよ」

ルリアも慌てて後を追った。

「そういえばあんたの剣、特に問題なかったから」

「わかった。色々と悪いな」

「あら、別にいいわよ」そう言うと二人も部屋を後にして、食堂へと向かっていった。

第16話 真夜中の疾走

夜も更けて日付が変わろうとする頃、セントは一人ぼんやりと窓の外を眺めていた。

既にルリアはベッドに潜っていて、エミリも一緒に眠っている。

一応、エミリはルリアの親戚ということになっているのだが、一緒にいる時間が短いわりにとてもよく懐いていて、周りから見たら姉妹としか見えなかった。

「……まあ、俺も似たようなものか」

そんなことを思っていたセントは、苦笑いを浮かべた。

事実、一ヶ月くらい前までセントもルリアとは全く繋がりは無かったのである。

「……………」

再びセントは外を眺めた。

暫くするとおもむろに立ち上がり、ドアノブに手を掛けて部屋から出ていった。

カタン

「ほえ？」

ちょうど、ドアが閉まる音にベッドに潜り込んでいたエミリが顔を出した。

（お兄ちゃん？）

眠そうに目を擦りつつ、セントのベッドへと行ってみるとそこにはセントの姿はなかった。

「？」

不思議に思っただけで部屋のあちこちを捜したが、何処にも見当たらなかった。

部屋の外も確認しようと思ったが、時間が時間なので諦めてベッドへと戻る。

だが、ちょうど窓を覗いた時に捜していた人物が見えた。

「お兄ちゃん！」

エミリは、勢い良く窓を開けて叫んだ。

すると下を歩いていたセントはそれに気づいて、振り向いた。

「エミリ？」

エミリは、セントが振り向いたのを見て手をふるとそのまま窓から飛び出した。

「なっ!？」

それを見るや否や、身体が勝手に受け止めようと走った。

しかし、エミリは器用に身体を回転させると、透き通った緑色の翼を出してゆっくりセントの腕の中に降りた。

「……頼むから驚かさないでくれ」

「えへへ」

無邪気に笑うエミリを見て、セントは溜め息をついた。

「はぁ………とりあえず寒くないか？」

「うん！」

そうは言っても、今夜は何時もより冷え込んでいて、また寝起きということもありエミリは薄着だったのでセントは着ていたマントを掛けてやった。

「お兄ちゃんはどうして外に？」

「眠れなくて、気晴らしに散歩しようと思ってな。どうやら起こしてしまっただけだ……」

苦笑いを浮かべながらそう言うと、セントはエミリを撫でた。

「わたしも付いていていい？」

「別に構わないが……戻らなくても平気なのか？」

「うん！」

エミリは嬉しそうに言うと、顔をセントの胸に押し当てる。

「………まあ仕方ないか」

そう言うと、セントはゆっくりと歩き始める。

学園はほとんどが森に囲まれているせいで、何処へ行くのにも森を通らなければならぬのだが、余りにも森が広いため楽に行くこと

が出来る街は、セリアしかないのである。

森を歩くだけでも良かったのだが、あえてそこを目指すことにした。暫く歩いていると、ぽつぽつと建物の灯りが見えてきた。

「ふう…」

セントは立ち止まって一息つくと、空を見上げた。

寮を出てから暫くは木々に覆われて真っ暗だったが、街に近づくにつれて徐々に明るくなり、月明かりだけで充分に見渡すことが出来るほどまで明るくなった。

因みにエミリはというと、途中から隣を歩いていたのだが、ふらふらとしていたので再びセントに抱き上げられていた。

この時間帯に起きているのはまだ大変なのだろう。

そう思いつつ、街の中へと歩き始めた。

夜中ということもあり、通りには人一人見当たらない。

「やっぱりまだ若干冷えるな…」

ずれてしまったエミリのマントをかけ直しながらそう言った。

セントも余り暖かい格好をしていなかったが、我慢出来ないほど寒くもない。

「さてと、どうするか…」

少々歩きながら考えていたが、すぐに遠くのほうで騒がしいことに気がつき、耳を澄ませる。

すると、その原因が近付いて来るらしく徐々に音や声が大きくなっていた。

「……戻ったほうが良さそうだな」

面倒なことに巻き込まれる前にそう判断したセントは、踵を返し来た道に戻るうとする。

ドスン！

「ひゃあっ！」

だが、何かが背後からぶつかり悲鳴が聞こえた。振り返ってみると暗くて良く分からなかったが、小柄な少女が尻餅をついていた。

「大丈夫か？」

「……………」

さすがに無視できず、セントはそう声をかけて手を差し伸べたが、怯えているのかその手を捕ろうとはしなかった。

「まだ近くにいますはずだ。探せ！」

「……！」

だが、先ほどから聞こえていた怒声がまた聞こえると、慌てて立ち上がろうとする。

「っ！」

だがバランスを崩し、セントに寄り掛かるように倒れ、苦しそうな表情をした。

先ほどぶつかった時に足を挫いてしまったようだ。

それでも痛む足を我慢して、無理に立ち上がり逃げようとしていた。その様子を見たセントは、エミリにかけていたマントを自分にくくりつけ、ずり落ちないようにすると少女を抱き上げた。

「ちょよ、ちょつと!？」

突然の行動に驚いて、思わず声を上げた。

「足挫いたんじゃ、逃げきれないだろう」

「……………」

降ろせと言わんばかりに抵抗していたが、それを聞いて腑に落ちないものもあつたが、セントが言ったように走ることが困難なため、渋々従うことにした。

「とりあえずここから離れるからな」

そう言う少女の足に負担が掛からないよう静かに走り始めた。

「いたぞ！」

だが、近くの路地裏に入る前に見つかってしまい、追っ手が来る。

「見つかったか……」

セントは、走る速度を上げて記憶と勘を頼りに道を駆け抜ける。

それでも少女を抱き上げているというハンデもあり、追っ手との差が徐々に縮まってきていた。

（やばいな…）

不安そうな目で見つめる少女に、セントは大丈夫だと視線で言ったが内心は焦っていた。

このままでは、追いつかれてしまうのだが良い打開策が見つからないのだ。

追っ手と戦うにしても相手がどのくらいの数なのか不明である。

さらに、こちらは少女を庇いながら戦わなければならないため、移動しながらの攻撃が出来ない。

よって、戦闘には多少自信はあったが却下となった。

（なら、あれをやってみるか…）

そう決めると、二人並ぶと通れないような狭い道に入る。

「あ…」

少女は前を見て、思わず声を漏らした。

不運にも道はだいぶ奥に入った所で行き止まりとなっていたのだが、セントはそれを狙っていた。

「しっかり掴まれ！」

そう叫ぶと、片手を器用に掲げて杖を取り出し地面に突き立てた。

すると、自分の足下から一本の水柱が勢い良く上がり、セントらも一緒に上がって行く。

「ひゃあああ！」

「ふえ！？」

あまりの衝撃に少女は慌てて力を込めて、落とされないように掴まった。

また、ずっと寝ていたエミリも驚いて目を覚ました。

「くっ…」

何とか倒れぬように水柱の上でバランスを保ち、十分な高さまで行くと思根に飛び移った。

そして安全な中ほどまで歩いた所で水柱が跡形もなく消えた。

「逃がしたか」

行き止まりの壁を見て、追っ手の一人がそう言った。

「しょうがないが撤退だ。一度出直すぞ」

その言葉が、屋根の上にまで聞こえてくる。

どうやら難を逃れることが出来たようだ。

そして、何事も無かったかのように再び街は夜の静寂に包まれた。

第17話 人の暖かさ

「ふうっ」

少女をゆっくりと降ろして一息ついた。

セントは追っ手の姿が完全に見えなくなってから、少女の容態を診るために、とりあえず寮に入る前にいたルリアの家へと向かったのである。

「どうして…」

「ん？」

少女は警戒しながら部屋を見渡していたが不意に口を開いた。

「……………」

だが、セントが聞き返すと再び黙ってしまった。

「お兄ちゃん、ここどこー？」

ここについてから同じ様に部屋のあちこちを見ていたエミリが、興味津々に言った。

「ここは、ルリアが今の場所に移る前に住んでいた所だ」

「そうなんだあ」

エミリが再び部屋の探索を始めたのを見ると、セントは再び少女に目を向けた。

「確か足挫いたんだよね？」

その言葉に少女が小さく頷いた。

診てみると、足首の辺りがすぐ分かるくらい青く腫れていた。

「これは酷いな…」

そう言っ腰に付けていた袋を取ると、中を探し始める。

少女が、不思議そうに見ているのを背に袋から包帯と、小瓶を取り出した。

「回復魔法はあまり得意じゃないから、多少しみるが我慢してくれ」
そう言っ小瓶の中の液体を包帯に数滴たらすと、包帯を巻いた。
小瓶の中身は、王都に住んでいた時に友人に教えてもらい自分で調

合した薬である。

「っ……」

少女は反射的に顔をしかめたが、我慢出来ないほどでも無いようで、すぐ元に戻る。

セントは手早く包帯を巻くと、もう一度少女を抱き上げてベッドに寝かせた。

「悪いけど出掛ける。何か作っておくから適当に食べておいてくれ」

「え……？」

その言葉に、俯いていた少女が顔を上げてセントを見た。

「ここにいてもいいの……？」

「ああ。怪我してるのに、外に放り出す訳にはいかないだろう？」

そう言うセントは少女の頭をポンポンと撫でた。

「それじゃあ、またあとでな」

「あ……」

少女が何か言おうとしていたが、それに気づかずにセントは部屋を出ていった。

「エミリ、戻るよ」

「はあ……」

ぱたぱたと駆け寄ってきたエミリを抱き上げて、家を出た。

外はだいぶ明るくなり、若干朝焼けも見え始めていて、この街の一日が始まるうとしていた。

「そつえば、今日試験だったな」

そう言う夜明け前の街の中、足早に歩いていった。

部屋に一人残された少女は、これまでのことを思い返していた。突然、謎の集団が故郷に襲ってくるまでは平和に暮らしていた。そしてそれが自分を狙っていることに気がついたときは、親友の計らいで村から逃げる事が出来たが、もう故郷に戻ることはない。もし戻ったとしても、追い出されてしまうだろうと思っているからである。

それからはずっと逃げながら生活をしていた。

初めの頃は宿屋なども利用していたのだが、何度も彼らに見つかるうちに人を避けるようになり、今では野宿が普通となっていた。

「どうして……」

そのため、何故見ず知らずの少年が自分を助けたのか分からず、少女はふと呟いた。

だが特に返答が戻ってくるわけもなく、再び沈黙が支配した。

「……………ううっ……」

不意に感情が込み上げてきて、嗚咽を漏らす。

そしてとうとう抑えることが出来なくなり、声を上げて泣き始めた。嬉しいのか悲しいのか分からないが、涙が止まらない。

もう太陽も見え始めて外が明るくなっていくなか、少女の泣き声だけが部屋中に響いていた。

「くしゅんっ！」

「あら、風邪でもひいたの？」

だいぶ頬が赤いルリアを見て、スティアが心配そうに言った。

今朝方、セント達が戻ってきたときはまだルリアは就寝中であつた。だが、エミリがベッドから抜け出したときに毛布がずれ落ちてしまい、更に窓も開いたままだつた。

その結果、体調を崩してしまつたようだ。

「たぶん……ちよつとだるいんだよね……」

若干ふらふらとしているルリアが辛そうに言つた。

「今日の試験休んだ方がいんじゃないの？」

「だいじよぶ……今日は休めないから……」

今回は実技試験なのだが、これから始まる授業などに大きく関わつてくる。

当然良い結果が残せば、選択できる授業の幅が増え、より高度な内容のものも取ることができる。

故に欠席してしまうと授業を選ぶにあたつて、制限が多くなつてしまう。

さらに各グループごとに評価がつけられるので、実際よりもだいぶ低い評価となり周りにも影響を及ぼす。

あくまでも個人ごとではないので、出席さえしてしまえば余程のことがない限り、ある程度の評価は取ることができる。

「でも……」

スティアもそれはわかつていたのだが、今のルリアの状態ではどうも大丈夫じゃないように思えた。

もし、今回の試験が入学試験のように実戦形式ということになれば、恐らく途中でまともに動けなくなるかもしれない。

何よりも、ルリアの体調が余計悪化することを危惧していたのである。

「みんなに迷惑かけられないし、それにセントは自分の好きにすればいいと言ってくれたから…」

だがルリアのその言葉には、辛そうだがとても強い決意のようなものが感じられた。

スティアはルリアに無理させたくなかったが、強制したくもなかったために悩んだ。

「スティア？」

突然黙り込んでしまった彼女にルリアが不思議に思って声をかける。

「……………しょうがないわね」

「？」

「無理だけはしないでね」

結局、ルリアの意志を尊重するという形で引き下がったスティアはそう言った。

普段よりも随分柔らかい声だった。

「うん……………ありがとう…」

先ほどのスティアの言葉に安堵していると、ウェディが歩いてきた。

「おはよお……………」

「おう、おはよ」

ウェディは、何気なく挨拶を交わしてから、ルリアの様子に気がついていた。

「ってやけにだるそうに見えるけど大丈夫か？」

ウェディがそう聞いたとき、普段とは何か違うスティアの視線を感じた。

過去にも何度かあり、それはいつも放っておいてほしい時などにあった。

「平気……………」

「……………そっか。まあ無理だけはするなよ」

結局、ウェディはあまり言及しないことにした。

「そういえば、セントはどうしたんだ？」

「ん…………今エミリちゃんを連れて、薬を貰いに行ってるよ……」

「そっか。なら、先に食堂に行くわよ」

そう言つてスティアは、ルリアの手をとる。

「え…でも、セントが…」

「いいの。きっと食堂まで来てくれるわよ」

「う、うん…………」

「それに体調を良くするなら沢山食べてもらわないとね」

「そんなあ……」

あまり食欲が無かったので、スープだけで済まそうとしていたがそれは叶わないようだ。

「……一応、あれはあれなりに心配しているんだよね？」

半ば引き摺るような形で、ルリアを引つ張りながら食堂へと歩いていくスティアを見ていたウエディが、そう呟くと後を追つていった。

第18話 再びの森

「はあっ！」

気合いの入った声と共に振られた剣は、飛びかかってきた狼を二つに切り裂いた。

「白き輝きよ、我が意に従い敵を貫け！……ライトニング！」

ウェディの目の前に迫った獣を白く輝く矢が貫き、獣もろとも跡形もなく消え去った。

「ふう……」

スティアは一息ついて他に何もないことを確認すると、ウェディを殴った。

「つてえ！何するんだよ！」

「ちゃんと周りを見ながら戦いなさいよ！今のも危なかったじゃないの」

「みんながフォローしてくれるから、今みたいにしているんだよ。」

このほうが俺も楽しだな」

「はあ……」

スティアはウェディの考えに呆れて、ため息をついた。

「もしあんたが怪我したりしたら、皆心配するでしょ？特にルリアが」

「………今度から気をつける」

「よろしい」

ウェディが不服そうに言ったのを見て、スティアはそう言って頷いた。

「もう……スティアもウェディも速すぎるよお……」

ちょうど、ルリアが若干息を切らしながら小走りで向かってきた。

「あら、ごめんなさい。つい……」

最初こそゆっくり歩いていたが、いつの間にか普段のペースで歩いてしまったスティアは、素直に頭を下げた。

「にしても、こんな広い森の中で目印なんて見つかるのか…」
ルリアのやや後ろから、セントの姿も見えた。

彼は、ルリアの代わりにエミリを抱き上げて歩いている。

「見つけやすいものだとは言っていたけど、普通に考えて怪しいよね。どれだけ広いと思っているのよ」

今回の試験というものは、セフィルが言っていたように森で行われ、何処かにある目印を取ってくるというものだ。

ちなみにルリアは、セントが貰ってきた薬を服用し、今では快調とまではいかないものの、だいぶ楽になっていた。

「きつと見つけられるよう何か仕掛けでもあるんじゃない？」

「ん…」

「？」

皆が悩み始めたなか、エミリだけがよく分かっているのか、不思議そうな顔をして見ていた。

「とにかく、先進もうぜ。結局は見つかるんだろ？」

検討がつかないと自分でも分かっていたため、すぐに考えるのを諦めたウエディがそう言った。

「そうね」

スティアもウエディの言葉に同意し、あとの二人も頷いた。

「ねえ、いくらなんでも多くない？」

「たしかにそうかもな……」

再び歩き始めてからだいぶ経ったのだが、何故だか立て続けに獣や
らが襲い掛かってきた。

スティアも、いい加減嫌になっっているのか若干声が刺々しくなっ
て、歩く速度もそれとなく速くなっていた。

ウェディもそれに気がついていいるのか、同意はしたものの、少々縮
こまって歩いている。

「はあ、はあ……」

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「うん……」

だが、問題はルリアだ。

エミリが心配そうにルリアの顔を覗いている。

ルリアは薬の効果が薄れてきたのか、顔が先ほどよりも赤くなっ
て、辛そうだった。

足元もしっかりせずふらふらとしていて、今にも倒れそうである。

「！、大丈夫か？」

「うん……平気……」

スティアたちの少し後ろを歩いていたセントが、遅れていることに
気がついて駆け寄る。

ルリアは前の二人に追いつこうと、走り始めたがすぐに足がもつれ、
セントに支えられていた。

もし、彼がいなければ転んでいただろう。

「ごめん……」

「なに、気にするなよ」

セントは、ルリアを何度か撫でるとエミリを呼んだ。

「エミリ、前の二人に止まるよう言ってくれないか？」

「はぁーい」

エミリは、返事をする翼を二、三度動かして先に行く二人の元へと向かっていった。

「さて、まだ歩けるか？」

「うん…たぶん…」

そう言っていると、セントに支えられながら歩き始めた。

「ルリア、大丈夫！？」

先を歩いていたスティアが、慌てた様子で戻ってきた。

「ごめんなさい、気づいてあげられなくて…」

そして、ルリアに頭を下げた。

若干スティアの肩が震えていることにルリアは気がついた。

「ううん…心配してくれてありがとう…」

ルリアはスティアの身体を優しく抱き締める。

「おーい、大丈夫か？」

「…！」

少しして、先の方からウェディの声がするとスティアの身体がびくつと震え、一瞬にしてルリアから離れた。

「ス、スティア…？」

突然の動きにルリアは戸惑って、スティアに呼び掛けたが反応はない。

「あれ？泣いてるのか？」

そして、エミリを連れてその場に現れたウェディが、スティアを顔を見て言った。

ドスッ！

「ばかぁっ！」

その結果、脇腹に蹴りが入り、余りの痛みにウェディはその場に蹲

る。

「泣いてなんかいないわよ！」

「お、おい！」

更に追い討ちをいれようとするスティアを、慌ててセントは止めに入る。

「スティア…ちょっと落ち着いて…？」

「！…ごめんなさい、ちょっと取り乱したわ」

そんなこんなで、ウエディが動かなくなってしまったので、彼が回復するまで休憩にすることにした。

「うう……」

暫くすると、呻き声が聞こえてきた。

「あ！気がついたよ」

スティアと戯れていたエミリがその声に気がついて、駆け寄ってきた。

「いてて……。今どうなってんだ？」

「んとね……」

「あんたが起きるまで待つてたのよ」

エミリの言葉をスティアが継いだ。

「そ、そっか……わりいな」

咄嗟にウエディが頭を下げたのを見て、エミリが不思議そうな表情をした。

「なんで謝ってるの？」

「え……い、いや……」

思わぬ方向からの質問に、戸惑っているウエディを面白そうに、スティアは見ている。

「まあいいわ、そろそろ出発するわよ」

それだけ言っと、ルリアの方へ歩いていった。

「？」

エミリは再びよく分からなかったのか、ウエディとスティアを交互に見ていた。

「ルリア、気分はどう？」

「ちよつとさつきよりは良くなったかな…？」

「そう…無理しないでね」

「うん…そういえば」

ドオオオオオオン！

「きゃあっ！！」

突然爆発音と共に大地が揺れ、バランスを崩したスティアは尻餅をついた。

「大丈夫っ？」

若干動揺しながらも、ルリアは手を差し出す。

「え、ええ……ありがとう」

「おい、大丈夫か！」

すぐにウエディも集まってきた。彼も、突然の出来事に戸惑いを隠せないようだ。

「うん……でも、今は…」

「だいぶ近い場所で爆発が起きたんだと思うけど……」

「お姉ちゃん…」

先ほども、辺りをうかがっていたエミリが泣きそうな顔をして、ルリアのマントの裾を引っ張っていたことに気がつく。

「！」

ルリアは、先ほどの音に驚いたのだと思い、エミリを抱き上げる。

「どうしたの？」

「お兄ちゃんが…」

「セントがどうかしたの？」

なるべく落ち着かせようとするがやはり子供であるため、ぎゅっと抱きつくだけだった。

「ねえ、セントは？」

スティアが、セントだけがないことに気づき、ウエディに問いかける。

「あれ、一緒にいなかったのか？」

「！！」

今まで寝ていたウエディは当然分らないようだが、ルリアはエミリの言いたいことに気がついた。

（急がなきゃ！）

「さっきまではいたはずなんだけど……って、ちょっとルリア！？」

突然走り出したルリアの後を、スティアとウエディは慌てて追う。だが、ルリアは病人のうえ森の中であるにもかかわらず、風のような軽快な走りをしている。

その為、すぐに後ろの二人が見えなくなった。

それでも、後ろは気にせずただひたすらに走り続ける。

ドオオオオン！！

先ほどよりも大きい爆音が響き、連続して音が聞こえるようになった。

（どうか間に合って……）

心の奥でそう願いつつ、木々の間を駆け抜けていった。

第19話 再三の戦い

「くそっ……」

セントは立ち上がった。

彼の身体には所々傷が出来ていて、満足に動くことは難しかった。セントは、思うことがあり皆には黙って抜け出した。

それは入学試験以来、一度森に来たルリアが襲撃されたため、ずっと警戒をしていた。

そして、セントが読んでいた通り襲撃に遭い、今の状態に至る。入学試験では、魔術を使う者何人かの集団だったのだが、今回は剣を得物とする者一人だけだった。

だが、男は魔術も心得ているようで、それが厄介だった。

セントは槍をつかったことがあるとはいえ、本来接近戦は得意ではない。

お互い得て不得手があり、始めのうちはほぼ互角な戦いをしていたが、接近戦が得意の相手が有利となりセントは徐々に傷を負っていき、今の状況となっている。

「おらあっ！」

「っ！」

ガキン！

再び距離を詰め、上段から振り下ろされた剣を杖で受け止める。

セントの杖は、彼自身の魔力で構成されていて滅多なことがなければ、折れたりすることはない。

「はっ！」

彼は、上手く剣を受け流すとすぐに杖を振るう。

杖自体は相手を捉えないが、水の刃が至近距離で襲うが、特に表情も変えずに身体を捻って回避した。

「フレイムスピア！」

ゴォッ！

更に追撃を試みるが、相手が回避しながら唱えた魔術によりに、進路を塞がれ一度後退する。

「逃がすかあ！」

だが、着地と同時にすぐ距離を詰め、後退に合わせて男が再び剣を一閃させた。

セントは咄嗟に反応し、間合いから外れようとバックステップをするが、剣先が着ていたマントをかすめ、端が少し斬れた。

「チツ、また外したか」

恨めしそうに舌打ちをして、一度セントを睨むと再び剣を構えた。セントは、こうなることは分かっている懸命に打開策を練っていたが、中々有効な策が浮かび上がらない。

策が浮かび上がらない。（そろそろ限界か…）

内心焦りつつも決して顔には出さずに、相手を待ち構える。

再び距離を詰めて来たのに対し、水の刃で牽制をして時間を稼ぐ。

「小賢しい真似を！」

痺れを切らした男がそう言うのと剣を大きく振り、飛んできた刃を一掃させた。

だが、セントは特に驚くこともなく後ろに下がると詠唱を始めた。

「流れゆく水よ、その強き力で全てを押し流せ！…アクアフロート！」

詠唱が終わると同時に彼の前から大量の水が溢れだし、至近距離まで迫っていた男を押し流した。

そして間を開けず再び詠唱を始める。

「水よ、視界を閉ざす霧となれ……ルミナスミスト！」

男が体勢を立て直すのが出来ず身構えていると、突如霧が開始した。下手に近づくことが出来ず身構えていると、突如霧が開始した。

霧はすぐに広がっていき、瞬く間に何も見えなくなった。

「余計なことを…」

男は、すぐに魔術だと分かったようだが、特に捜すわけでもなく正面を向いたままだった。

「……まあいい」

そう呟くと踵を返し去って行ってしまった。

「……っはあ」

男が居なくなつてから、先ほどの場所にセントが現れ、彼は大きく息を吐くとその場に膝を着く。

彼は先ほど霧の魔術以外にもうひとつ発動させていたのである。

それは自身の身体を見えなくする魔術である。

仮に霧を使つて不意を突いたとしても勝てないと判断したために、相手をやり過ごそうとしたのだ。

「やはりキツかったな……」

セントは苦笑いを浮かべてそう呟くと、杖に寄りかかりながらも立ち上がるうとした。

一度に慣れていないほどの多くの魔力を使用してしまうと、一時的な欠乏状態になり、身体に影響がでる。

人によつて若干違いがあるが、脱力感や疲労感に襲われるといった様なものがほとんどだ。

セントが詠唱した魔術は、アレンジがされていて、より持続するようになっているために両方とも結構な量の魔力を使う。

同時に詠唱したが故、多くの魔力を消費することとなり、欠乏状態となつた。

「ん……」

セントは先ほどから立ち上がるうとしていたが、どうしても力が入らず、諦めて仰向けになつた。

「……セント……」

しばらくそのまましていると、不意に声が聴こえたような気がした。彼はなんとか身体を起こして、辺りを見渡したが、未だに霧が残っているため、遠くまで見る事が出来ない。

「そうか……解除……」

そう呟くと急激に霧が薄れていき、とうとう元の森の中の景色へと戻つた。

「セントっ！」
そしてそこに現れた景色の中に、駆け寄ってくる仲間達の姿があった。

「……っと、悪いな。変な心配させてな」
事情を話し終えたセントは、すまなさそうに言った。

「良かった……」

ルリアは、先ほどからセントに顔を押し付けて、涙ぐんだ声で繰り返していた。

「ホントよもう、いきなり爆発音がするわ、セントがいないと思ったら今度はルリアとエミリがいなくなっちゃうわ、大変だったのよ」
彼の肩を叩いて、スティアが言った。

「お、おい、その辺にしておけよ」

彼女が何度も何度も叩いていたために、見かねたウエディが止めさせようと声をかけると、スティアは手を下ろした。

「……もう大丈夫……？」

ようやく落ち着いたルリアだが、心配そうにセントの顔を覗く。

「ああ。完全とまではいかないが、もうだいぶ動けるだろう」

そう言うと、セントは立ち上がり、ルリアと同じように彼にしがみついていたエミリを抱き上げた。

「それじゃあ、行こう」

セントの言葉に皆が頷くと、風の抜ける森の中を再び歩き始めた。

カサ……

セント達が見えなくなってから、先ほど戦っていた場所に男が戻ってきた。

先ほどは、片手でも扱えるほどの大きさの剣を使用していたが、今はそれは何処にも見当たらない。

そして、代わりに自分の身長近くまである大振りな剣　　いわゆる大剣を背負っていた。

「おや……ラス、どうしたのですか」
「！」

突然、誰かの声が聞こえて反射的に背負っている大剣の柄に手を掛ける

だが、声は聞いたことのあるものだったらしく、すぐにその手を下ろすと声のした方を向いた。

「ファイか……」

ラスと呼ばれた男がそう言うと、前の木の陰から別の男が現れた。ファイと呼ばれた彼は、何か人を惹き付けるような雰囲気を持ち、ラスとは違い華奢な身体つきをしている。

「たまたま通り掛かったんで戦いを見せてもらいましたよ」

そこまで言うと、ラスへと歩み寄り始めた。

「あなたは戦いになると熱くなりすぎです。相手は子供なんですよ？」

「まあ……自分でも分かっているんだけど、どうしても癖でなあ……」
ファイの手厳しい言葉に、ラスは苦笑いを浮かべて空を仰いだ。

「……まあいいか。それより、どうだったか？」

主語の無い突然の質問に、ファイは呆れたように笑った。

「ラス、ちゃんと内容は言わないと伝わりませんよ」

「いいじゃないかよ。何時ものことなんだし、あんたなら分かっているんだろ？」

「それもそうですね」

「……」

なら言うなよ、と突っ込みたかったが、余計なことを言えば的にされると思っていたラスは、口には出さなかった。

「……なかなかいい線までいっていると思いますよ。あの杖といい、二重詠唱といい、中々の技術です。何より、あなたと互角に戦えたのですから」

その言葉を聞いて、ラスは首を傾げた。

自分と互角に戦えたところで大したこと無い、そう戦えて当然だと思っていた彼は、どうやらファイの評価を信じられないようだ。

「そうなのか？」

「ええ。…まず、あなたは自分を低く見すぎです。本来ならこの国で五折の指に入ってもおかしくない…」静かだがいつになく力のあ
る声にラスは目を見開いた。

「お、おい…」

「！…すみません。…ともかく、あの子は期待できますよ」

ファイは、自分が熱くなっていたことに気がつき、一度謝ると自分の意見をまとめた。

「そうか。ありがとな」

「いえ、私も暇潰しにはなりました。…では」

そう言くとファイは、一度微笑みを浮かべて頭を下げると森の奥へと消えていった。

「…とりあえず、戻るか」

それを見送ったラスはそう呟くと、腰に着いていたペンダントに描かれた魔方陣に触れる。

ヒュン

途端にペンダントが光を発したかと思うと、既にラスの姿は無かった。

森は三度静寂に包まれた。

第20話 不思議な場所

「これは……………」

しばらく歩くと、一行の前に高くそびえる絶壁とそれに空いた洞穴が姿を現した。

「うわ……すげえでかいなあ」

「そうね…」

洞窟の奥は闇に包まれていて見ることが出来ないが、普通に走り回れそうなくらいの広さである。

「……………」

皆が思い思いの感想を抱いているなか、セントは辺りを見渡していた。

「セント、どうしたの？」

それに気がついたルリアが、彼に問い掛ける。

「……………どうやら、この崖はずっと続いているみたいだ」

「そうなの？」

「ああ、おそらくな」

エミリが、彼らの言葉を聞いて前を見た。

だが、木々が生い茂っているため、奥まで続いているということとは分からなかった。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「わたし、見てくるね！」

「え？」

そう言うと、エミリは翼を広げ二、三度はばたく。

「……！」

ルリアが、理解したときには、もう宙へと舞い上がっていた。

「エミリちゃん！？」

慌てて掴まえようと手を伸ばしたが、あと少しのところまで空を切っ

た。

「大丈夫だよ、お姉ちゃん」

エミリはそう言っと、大空目指して昇っていった。

「……………」

手を伸ばしたルリアも、エミリを抱いていたセントも啞然とした様子で、動かずに見送った。

「……まあ、大丈夫なんじゃないか？」

先ほど、ルリアが叫んだときに気がついたウエディが言う。

「でも……………」

「とにかく、ここ待ちましょ。変に動いたら、それこそはぐれてしまっわ」

「うん……………」

スティアの説得に、ルリアは渋々納得した。

「でも、どうするのか？」

彼女のことはスティアに任せて、ウエディがセントに話し掛ける。

「……………」

「セント？」

「……………ん？」

彼は、何か考えていたようで二回呼び掛けてやっと気がついた。

「珍しいな。セントがぼーっとしてるなんて」

「ああ……悪いな」

ウエディがセントの様子を見て、不思議そうに言った。

「まあ、いいや。で、どうするんだ？」

だが、ウエディはあまり気にすること無く、本題を切り出す。

「まあ、色々と考えてはいるがエミリが戻ってきた時に決める」

そう言っと空を見上げた。

ちょうどその頃、エミリは木々が足下になる高さまで昇っていた。上には、雲と太陽しかない。

陽が差し込んでいるわりには、枝が細かく絡まっていて、ここに出るまで少々時間がかかった。

「ん……」

キョロキョロと辺りを見渡すが、前に見えている崖はずっと縦にも横にも延びている。

セントの言った通りだ。

だが、それよりも彼女はこの崖が何処まで続いているのか気になり、更に上を目指す。

「んしょ……」

上へ昇るごとに風が強くなり、何度も飛ばされそうになりながらも何とか頂上を目指す。

そして、下に広がる森が小さくなり始めた頃、ようやく崖の上へと辿り着いた。

「わぁ……」

そこに広がる風景にエミリは目を見開いた。小さな民家がひっそりと建っているのだ。

エミリは、着地すると家へと近づいていき前まで来た。

そして、古ぼけた木製のドアの冷たい感触を我慢しつつ耳を当てた。中からは誰もいないようで音ひとつしない。

彼女は手を掛けてドアを引こうとしたが、壊れているのか微塵も動

かない。

「ほえ？」

押しても引いてもびくもしない。

「むー…」

結局、ドアから入ることを諦め、他に入ることが出来そうな場所を探し始める。

反対側にまわったところで小さな丸窓を見つけた。

そこから中を覗くと、木のテーブルが置いてあるのが見えたが、他には何も見当たらない。

この窓に取っ手の様なものがあつたが、何かに引っ掛かってこれも開かなかった。

エミリは民家を後にして、辺りを見渡す。

下で崖を見たときよりも大分狭いこの空間に、短い草や花があちらこちらに生えている。

更に強く吹き付けていた風は、今では嘘のように優しく駆け抜けていた。

エミリはその中をゆっくりと歩き、先ほど出てきた方の崖に立った。そして、一度だけ名残惜しそうに振り返ると宙へと身を任した。

空間が違つかのように、風が再び吹き付ける中、昇るときと違い、エミリの身体はどんどん速度を上げていく。

地上に大体近づいたところで、翼を動かし減速を始めた。

ガサササッバキバキッ

「！！」

突然不穏な音が聞こえ、皆咄嗟に身構えた。

「！、エミリちゃん！？」

そして、音の源を見つけようと辺りを見渡していたルリアが叫ぶと、駆け出す。

「あ、お姉ちゃん！」

エミリは木々の枝に引っ掛かった状態でルリアの姿を見つけると、手を振った。

「大丈夫!？」

そんな彼女を見たルリアは、先ほどの音のことであって相当心配しているのであろっ、顔が少し青い。

ほかの三人もエミリの姿に啞然として固まっていた。

「うん!」

バキッ

「!？」

エミリがルリアの言葉に頷いた時、彼女を支えていた枝が折れ、再び落下する。

「うつらああ!」

突然のことにセントですら動けなかった中、ウェディが咄嗟に反応し素晴らしいスタートを切ると、数歩助走をつけて飛び込んだ。

トスン

「ぐえっ」

だが、余りに必死で飛び込んだため、目測を誤り彼の背中にエミリが落ちてきた。

「ちよつと、大丈夫!？」

「うん!ちよつとびっくりしたけど…!」

エミリが答えていると、突然後ろから腕が絡んできた。

「お姉ちゃん?」

どうやらルリアのものらしいその腕は、若干震えている。

「もう…ほんとに…」

辛うじて聞き取れるくらい小さな声で呟いた。

だが、その直後腕の力が抜けてルリアは突っ伏してしまった。

「ルリア!？」

慌ててスティアが抱き起こす。

だが、ルリアは気を失っているらしく目を覚まさなかった。

ガサッ

「お兄ちゃん、後ろ!」

ガッ!!

エミリに言われるがまま振り向くと同時に杖を振るうと、熊のようなものの爪とぶつかり合った。

だが、圧倒的な力の差でセントは吹き飛ばされる。

「ぐっ……！」

吹き飛ば先にあった木に背中を強く打ち、一瞬呼吸が止まる。

「セント！」

スティアは思わず叫んだが、ルリアが目覚まさないでいるために駆け寄ることができない。

獣はスティアの声に気づき、次の獲物を一番近い位置にいたスティア達と決め、向かっていった。

「はあっ！」

ウエディが彼女の前に出ると、矢が放たれたかのように駆け出す。彼は元々運動能力が高いうえ、スティアが彼の剣に能力上昇の補助効果も付けたため、時折人間離れした動きをすることもあるのだ。

ザッ！

一瞬で獣との距離を詰めると、横薙ぎに剣を一閃させる。

だが、堅い皮となっていてらしいその体に大した傷を負わすことは出来なかった。

そのため、相手も怯むこと無く爪を降り下ろした。

先の攻撃で背を向けていたウエディはすぐに回避行動をとる。

直後、その場所には深々と爪跡が残った。

「大丈夫か？」

ウエディは、視線を獣から外さずセントの側まで行くと声をかける。

「ああ…もう平気だ」

セントはそう言う杖を構えた。

グウオオオオ！

獣は咆哮をあげ、二人に襲いかかる。

「ウエディ、フォローする」

「了解っ！」

そう言う第一撃を左右に別れて避ける。

右に避けたウエディは宙で反転し獣の方を向き、着地と同時に地を蹴った。

「おらあっ！」

気合の入った声と共に薙ぎ払った。

ザンッ！

先ほどと同じところを捕らえた剣は、今度はしっかりと裂いた。

その痛みで相手は仰け反る。

「アクアバイト！」

「ライトニング！」

先ほど回避してから詠唱を始めていたセントと、いつの間にか詠唱をしていたスティアの魔術が獣を襲った。

ギャワアアア！

「ウエディ！」

「おう！」

光の矢と水の槍によって深手を負いながらも、未だ倒れない獣にウエディが剣を向けた。

すると彼の剣が僅かに光だす。

「はあっ！」

三度距離を詰めると、次々と斬撃を繰り出す。

「終わりだあ！」

そして、大きく左に振りかぶると斜め上方向に引き抜いた。

グアアア…

獣は断末魔を上げ、他と同じ様に光となって消えた。

「ふう…」

ウエディは剣を二度振ると鞘へと閉まった。

「やはりすごいな」

先ほどの動きを見て、セントが感心した様子で言った。

「俺にはこれくらいしかないからな」

「ほんとよね。魔術も勉強もろくに出来ないんだから」

「それは言い過ぎだろ…」

そんな会話をしつつ、三人はルリアとエミリの元へと戻った。

「あつ、セント!」

「ルリア、もう大丈夫なの?」

「うん。ごめんなさい…」

どうやら大事には至らなかったようで、ルリアは直ぐに目を覚ましていた。

「気にすることないわ」

「うん…」

げんなりとしてしまったルリアを何とか元気付けようとスティアは試みる。

「もつと頼っていいのよ。皆あなたの具合が悪くても、来ることに同意したんだし、何より仲間なんだから…」

「うん……ありがとう…」

少しずつ、笑顔が戻ってきてスティアは一安心した。

「お兄ちゃん!」

「ん、どうした?」

三人が戻ってきてから、辺りを見ていたエミリがセントを呼んだ。

「紙落ちてたよー」

「紙?」

エミリの言葉に疑問を持ったセントは、彼女からその紙を受け取った。

それは、カードの様なもので二つ折りにされていて、片面に紋章が書いてあった。

「これは…」

セントは、中を開くとそこに書いてある文字を読み上げた。

「探し物は…我にあり……?」

その直後、五人の姿が森の中から消えた。

気がつけば、建物が見える場所にいた。

「な、なんだ？」

突然周りの風景が変わり困惑している五人。

「お疲れ様。今回の試験はこれで終了だ」

突然周りの風景が、変わったことで困惑している五人に、顔を知っている人物が声をかけた。

「！、セフィル先生！」

五人の様子を見て、セフィルは不思議そうな顔をした。

「終わりということは…」

「これが、目印なの？」

ウェディとスティアが言ったその言葉にセフィルが頷く。

その後、どうやらまだ戻ってきていない生徒がいるようで彼は幾つか連絡事項を伝えると、再び戻っていった。

「…なんか締まらないね」

ルリアの口からそう溢れたのをきっかけに皆が笑いだした。

それは呆気なさから来たのか、それとも試験が終わったことへの安

堵からなのか分からなかったが、笑いを押さえることは出来なかった。

「あーっ！」

部屋に戻る途中、スティアが大声を上げた。

「ど、どうしたの!？」

「あの洞窟、何があるのか調べなかったじゃない！」

そう言っただけスティアは、何故かウエディを叩き始めた。それも、本気で。

「って、何すんだよ！」

どうやら彼女はあの洞窟に入る気満々でいたらしい。

そのために、やや機嫌が悪くなっているウエディに八つ当たりをしている。

「煩いわね、早く戻るわよ!……それじゃあね。しっかり休みなさいね」

彼女はそう言うと、すぐ歩いていってしまった。

「……理不尽な」

短い間に結構な回数殴られたウエディは、そう呟いた。

「ほんとによく殴られるね…怪我とかしないの？」

ルリアは、蹲っているウエディを見て少々気の毒そうに言った。

「ああ…このくらいで怪我してたら身体が持たないしな……」

そんな彼の言葉にますます、ルリアはさらに気の毒に思った。

「まあいいや。じゃあな、体調しっかり治せよ！」

そう言うと、ウエディはスティアの後を追っていった。

第21話 追われし少女の不安

ギイイ……

ドアが疲れた声を上げながら開いた。

「ん……………」

その音に気がつき、寝ていた人物はゆっくりと目を上げる。

そこにはいつもとは違い、天井が見えた。

横を見ると、人の足が視界に入った。

「……！」

ドアが音をたてたのなら、誰かが開けたのはほぼ当然である。

慌てて逃げようとしたが、足の痛みによりそれは叶わなかった。

「お、おい……」

だが、聞き覚えのある声に恐る恐る振り返って見ると、そこには暗闇のなかでも輝くような銀髪をした少年の姿があった。

「どうかしたのか？」

少年、もといセントは少女の行動に戸惑いを覚え、心配そうに声を掛けた。

少女は、ほつとしたような表情を見せるとふるふると首を横に振った。

「……そういえば、名前言ってなかったな。俺はセント、昨日はすまなかったな」

その言葉に少女は再び首をふる。

「ありがとう……」

そして、消えてしまうような小さな声でそう言った。

「ん？」

「……………」

「……？」

だが、少女が突然泣き出してしまいセントは驚いた。

「うわあああん……」

少女は、戸惑っているセントに顔を押し当て、声を上げた。

「な、泣くなよ……」

セントは、何とか声を掛けて落ち着かせようとする。

だが、そんな努力も虚しく少女が落ち着くまで、数十分を要したのであった。

「……ということなの……」

ようやく落ち着かせることが出来たセントは、事情を彼女から聞いた。

彼女はナタリアと名乗り、この国とは別の国の出身ということだ。

セント達のいる大陸には、ラドヴィス、リディナ、トルポリックの三国がそれぞれ治めていて、彼女はリディナから来たということらしい。

そして、追われているということは何となく分かっていたが、誰に追われているかまでは分からないと言った。

「そうか……大変だったな」

「うう……」

再び泣き出しそうになったナタリアを宥めつつセントには、若干違えど似たような立場にいたことがあったために、多少なりとも気持ちがあった。

「原因とかも心当たりは無いんだよね？」

その言葉にナタリアは小さく頷いた。

「少し探ってみるか……」

「……？」

セントの言葉を聞き取ることが出来ず、彼女は彼を見た。

「なに、こっちの話さ」

「あう……」

だが、セントには撫でられるだけで、はぐらかされてしまった。

そういえば、ナタリアには昨日から気になっていたことがあった。

何故かこの少年に撫でられるのは嫌では無いのである。

ずつと人目を避けてきたのだから、触られることなんて絶対に受け入れることは出来ない、と思っていた。

だが、それとは別に何となく、くすぐったく思うのも事実で、ナタリアは少し複雑な表情をしていた。

セントはそんな彼女を見て、微笑むと手を離す。

そして、ナタリアの足に巻かれている包帯に手を伸ばし、ゆっくりとほどこいていく。

「まだ足は痛むか？」

「ううん………っ」

彼女は首を横に振ったが、セントの手が腫れがあつところに触れ、刺すような痛みが走った。

「つとと、悪いな……」

そのことに気がついたセントがすまなさそうに言った。

「ふむ…腫れは治まっているみたいだが……」

足の腫れは、昨夜は酷かったが今ではほとんど無くなっていた。

だが、彼女の様子から見るとまだ痛むようで、暫くは安静が必要のようである。

「…………あの……」

「ん？」

そう考えていると、ナタリアが再び声を掛けてきた。

「その……出ていった方がいい……の？」

「え？」

セントは一瞬、耳を疑った。

「どういうことだ？」

「えっと……………」

思わず聞き返すと、ナタリアは再び黙り込んでしまった。

だが、若干俯き気味である彼女の表情は暗いものだった。

セントは改めて理由を考え始めたが、先ほど彼女が経緯を離れたこともあり、幾つか理由は浮かび上がった。でも決定的なものは無かった。

「んと……………迷惑かと思って……」

「そういうことか」

「うん……」

どうやら、ナタリアは自分によってセントも狙われるかもしれないことを危惧して、言ったようだった。

「……確かに狙われるかもしれない」

その言葉にナタリアは、さらに表情を暗くした。

「だが……」

そう言うセントは、再びナタリアの頭に手を置いた。

「見捨てるようなことするのは嫌だからな。足が治った後も、気が済むまでここにいればいい。出ていけとは言わないからさ」

彼女には、それだけで充分だった。

全く知らない土地で、独り闇に紛れながら生活をしていた彼女には、頼る人が欲しかったのだ。

そのことにこそ気づいていないが、それでもひどく感激し、目に涙を溜めながらも何とか声を出すことだけは堪えた。

「それに……」

そう言ったセントの手が、僅かながら震えているのに気がつく。

「……………」

「…？」

さらに突然セントが黙ってしまい、暫くしても彼は黙ったままでいたため、ナタリアは不思議に思い顔をあげた。

涙目なのに加え、少々上目遣い気味になってしまっているが気にしない。

「どうしたの…？」

恐る恐る声を掛けると、セントはピクリと反応して彼女を見た。

「…いや、なんでもない」

そう言くとセントは彼女から手を離す。

「…じゃあ、悪いがまた出掛けてくる」

そして、一言だけ言い残すと部屋から出ていった。

「あ……………」

セントが部屋から出ていくとき、ナタリアには彼の頬に一筋の跡があり、それが光ったような気がした。

また、先ほどのこともあり、彼女にはどうしても、何でもないようには思えない。

（どうしたんだろう…）

セントが黙り込んだ時、彼は過去でも振り返っているのか遠い目をしていた。

その過去は彼にとって何らかの因縁があり、それは自分のせいで思いつかれた、と彼女には予測できた。

（やっぱり……）

そして、ナタリアの頭の中ではここを去るという考えが大きくなる。自分としては、彼の厚意に甘えたいが迷惑を掛けたくない。

何より、拒絶されるのが怖いのだ。

それでも先ほどの考えを決意するには至らず、暫く悩み続けたが、結局、結論が出ないまま意識は闇へと落ちたのであった。

第22話 水面下の組織

「ほお………あいつがか」

夕日が差し込んでくる部屋で、壁に寄りかかっている人物が、黒髪の少年の報告を聞いている、そう漏らした。

「うん。見た限りだと、元気そうだったよ」

「そうか。まあそのうち、あんたに連絡役頼むかもな」

その言葉に、少年が小さく頷いたのを見ると、一度咳払いをする。

「さて、それより新しい依頼が来ている。それも名指しで、だ」

「そうなの？」

普段とは違うことに少年は首を傾げた。

「ああ。それに、詳しい内容は追って話すと言うことだ」

「ホント？…なんか変な話だね」

「まあな……とにかく、この場所に行ってくれ」

そう言うのと、少年に一枚の紙切れを渡した。

少年は、まじまじと紙を見ると再び顔を上げた。

「わかった。じゃあ、またね」

そして、二、三度手を振ると少年は部屋を後にした。

「あら、もう大丈夫なの？」

「うん。昨日は心配かけてごめんね」

朝、ルリアの姿を見つけたスティアが彼女の側に駆け寄る。試験の日から今日まで、結果の集計やら何やらで授業が出来ず、休日となっていたのである。

その間、ある生徒は魔術の訓練に精をだし、またある生徒はまだ新しい友人らと交友を深めるなど、それぞれ有意義に過ごしていた。スティア達も、例に漏れず自分のすべきことをしていた。

だが、ルリアは体調の悪いまま長い間森の中を歩いたために、翌日には風邪が悪化してしまい、数日間寝込んでいたのだ。

それにより、スティアは彼女のことを心配でしうがなかったのである。

幸い、今日にはほとんど治っているようで、こうして挨拶をしている。

「セントは？」

「えっと……あれ？」

ルリアは後を向いたが、彼の姿はなかった。

「さっきまで一緒にいたのに……」

「どうするの？探しに行く？」

「うん……ちょっと待ってて」

そう言って、引き返そうとしたルリアをスティアが呼び止めた。

「何言ってるのよ。私も行くわ」

「でも……ウエディは？」

「いいのよ、あんなのは気にしないで。それより行くわよ」

「う、うん……」

さつさと歩いていくスティアの背を、疑問を抱きながら追っていた。

「悪いな。急に呼び止めたりして」

「別にいいですけど……時間大丈夫なんですか？」

「すぐ終わるから大丈夫だ。それに今日も大したことないし、遅れても問題ないだろう」

「は、はぁ……」

何処か適当なセフィルの発言に、セントは少々呆れつつ苦笑した。

先ほど、彼はルリアと共に教室へと向かっていたのだが、偶然通り掛かった教員であるセフィルに呼び止められた。

ルリアは、気づかずに先に行ってしまったのだが、どうやら彼に用があるようだ。

「ちよつと付いてきてくれ」

「？、分かりました」

すぐ終わると言っていたために、その場で話すのかと思っていたが、どうやら場所を移すようで、セントは首を傾げながらもセフィルについていった。

「ふぁ……」

「おつ、起きたか？」

「む……」

途中で、セントの背中で眠っていたエミリが、小さな欠伸をして眼を覚ました。

「おはよー……」

「おう、おはよ」

「ほえ？」

いつものように朝の挨拶をするが、何故かセントではなくセフィルが挨拶を返した。

そのため、エミリは声のした方をセントの背中越しに顔を覗かせる。

「お兄ちゃん、だれ？」

「セフィル先生だよ。覚えてないか？」

「うーん？」

どうも今一つのエミリの反応に二人は苦笑した。

「……まあいい。それよりも本題なんだが」

セフィルは一度咳払いをすると、辺りを見渡して誰もいないことを確認する。

「ラーレイン魔術組合って知ってるか？」

「ラーレインじゅつ……？」

「ラーレイン魔術組合だ」

彼の言葉をエミリは聞き取れなかったのが分かり、セントが繰り返す。

セフィルには、そのやりとりとセントの様子から、何かしら知っているように思えた。

「…要は入ってことですよね？」

「うむ。一応詳しい話は今日の放課後するから、とりあえず考えておいてくれ」

「分かりました」

「それじゃあ、用件はこれで終わりだ。先に教室に向かってくれ」
セフィルはそう言つと、来た方とは逆の方に歩いていった。

「……………」

彼が立ち去ってから、セントはその場から動こうとしなかった。

「お兄ちゃん？」

暫くしてもそうであつたために、不思議に思つたエミリが心配して声を掛ける。

「ん？」

「どうしたの？」

「ああ…何でもない」

だが、セントの表情は何処か複雑そうに見えた。

「エミリ」

「ふえ？」

「この事をルリア達には言わないでくれるか？」

その言葉の意図はエミリにはよく分からなかった。

「うん…？」

そのために、深く考えずに頷いてしまったが、やはりどこか疑問が残っていた。

それでも彼女は特に問い詰めることもしなかった。

これも、セントに信頼を置いているためであり、彼なら何かしらの考えがあつての発言だろうと思つた故である。

「さてと、早く戻るか」

「うん！」

そう言った彼は、いつもの彼だった。

「ふうん。何だかんだで結構選べるじゃん」

ステイアは、渡された授業選択の案内を見て、口には出していないが意外そうだった。

授業の選択の可否は、事前に行われた試験の結果に基づいて、決定された。

そのために、彼女はあまり期待していなかったのだ。

「でも、まあ良かったなあ」

「うん…みんなありがとう」

「もう、何で謝るのよ。水臭いじゃない」

試験のことを引き摺っているかのようなルリアの言葉に、溜まらずスティアが口を尖らせた。

「う、うん…」

「まあ、いいじゃんかよ。それより、早く決めようぜ」

だが、ウエディが横から口を挟み、話題を変えようとしたために、スティアは反射的に彼を睨み付ける。

「ス、スティア…？」

その鋭すぎる視線に、少々怯えつつも恐る恐るルリアは呼び掛けた。

「あら、ごめんなさい」

ウエディはいつも思っているのだが、何故スティアはあんなにも切り替えが速いのだろうか。

すごいことだと思うのだが、彼としては強く当たるのをやめてほしい。

だが、ずっと前から何度か言ってきた今に至っているため、殆んど諦めていたりする。

「貴方たちはもう決めたの？」

そんなことを考えている彼を余所に、スティアは話を進めた。

「俺は、古代語とか受けようかと」

セントは、自分の授業選択案内をスティアに渡した。

それには幾つかチェックが付いていて、『古代語応用』と書かれているところにも付いていた。

「古代語っていうと、魔術書の？」

「ああ、そうだ」

「でも何故？」

馴染みこそはあるが、魔術書にはほとんど訳も載っているため、わざわざ習う必要は無いのでは、とスティアは思っていた。

「前々から興味があつてな。丁度の機会だから受けようかと」

「そっか。ルリアは？」

「え、えつと……」

スティアは、ルリアに聞いたが、彼女はどもってしまつ。

「決まってるの？」

「うん……」

申し訳なさそうにスティアに案内を渡した。

「……でも、一応目星は付いているみたいじゃない」

「うん……でも、エミリちゃんの分もあるから……」

「あー……そういうことね」

どうやら、ルリアとエミリは同じ授業をとることにしたらしい。

「ねえ、エミリちゃん」

「ほえ？」

「ルリアに任せちゃっても大丈夫？」

「うん！」

スティアには悪気は無いのだが、どこか腑に落ちないところがある。

「ほんとにいいの？」

「うん！」

「そっか……じゃあ……」

結局、ルリアは既に決めていた授業を受けることにした。

「エミリちゃん、よろしくね」

「うん！」

とりあえず決まったことに安堵しつつ、隣で興味深そうに彼女の案内を覗き込んでいるエミリを撫でた。

「そつえば、スティアはどうしたの？」

「あたしはね、これよ」

「魔……製学？」

よくイメージが掴めないルリアは、疑問符を浮かべた。

「そうよ。魔製学で、色々と護符とか作るらしいから、こいつのこともあるし受けることにしたのよ」

スティアは、後ろでうんうん悩んでいるウェディの脇を小突きながら言った。

「そうなんだ」

「で、あんたは決まったの？」

「い、一応……って、おい！」

有無を言わず案内を奪い取ると、内容を見て軽い目眩を覚えた。

「何よこれ！一つしか決まってるじゃないの！」

「そうは言っても、仕方ないだろ！」

「二人とも、少し落ち着いて」

再び口論となった二人をルリアが宥めにはいる。

「まあいいわ……どうするのよ？」

「うーん……どれがいいんだか……」

彼自身何がやりたいのかよく分からず、決めることは出来ずにいた。

「ちよつといいか？」

「！、はい」

「ウエディは試験の時、剣を使っていたよな？」

「え、ええ……」

突然声を掛けてきたセフィルに、戸惑いを隠せない三人だが、彼は特に気にすることもなく話を進める。

「あまり人が多くなかったから細かく記載しなかったんだが、『演技演習』の中で、剣技とかの武術も一緒に扱うつもりだから、良かったら受けてみてくれ」

それは、ウエディにとって嬉しいことだ。

彼は魔術が使えないために、スティアが剣に魔力を込めて使えるようにした。

彼自身、技術自体はほとんど問題ないのだが、魔術の方ではあまり使いこなせていないのが、現状である。

それ故に、同時に学べるのはこの上ない機会なのだ。

「本当ですか！？」

「ああ。一応俺が指南することになっているが、時々知り合いにも来てもらう予定だから、他にも色々と学べる筈だ」

「分かりました。ありがとうございます！」

「良かったじゃない！」

戻っていくセフィルの後ろで、スティアがバンバンとウェディの肩を叩いた。

「おう。後は…」

ウェディは実技演習の他に、何とか付いていけそうなものを選ぶことにした。

「これで決まったようだな」

「そうだね」

皆無事に決まり、ほっとしていたがセントだけは、本の少しだけ浮かない顔をしていた。

そして、それに気がついたのはエミリだけだった。

第23話 術士組合

「ここが組合事務所だ。学園長にお願いして、自分の部屋を利用している」

セフィルは、セントとエミリを中に招き入れた。

彼の部屋は学園内の教師達が寝泊まりできる場所にあるのだが、一部生徒の出入りもあるために、学園長が配慮して少し離れた場所にある。

「ほえ」

エミリが興味深そうに辺りを見渡した。

自分達の部屋よりも幾分広く造られているこの部屋には、あまり物が置かれていない。

「それじゃあ、一応説明するからそこに掛けてくれ」

二人は言われた通りに席に着くと、セフィルは説明を始めた。

そもそも、ラーレイン術士組合とは、この国に住んでいた何人かの魔術士達が、立ち上げたのが始まりだと言われている。

初めは、術による手伝いのようなことをやっていたのだが、現在ではほぼ依頼内容の枠がなくなった。

その為に、情報収集のようなものや秘密にしなければならないような内容も時々くることもある。

本部はこれまで転々としてきたが、現在はとある伝説の賢者の名を冠した街にある。

組合には数十人ほどが所属しているが、この場所ではセフィルを含めて三人ほどだ。

「……と、まあ大体こんな感じだ。もしかしたら、知っていることを繰り返しただけかもしれないが」

セフィルは一通り説明を終えると、一枚の紙を差し出した。

「断りづらいかも知れないが、嫌なら言ってくれて構わない。此方も強制してまで入れるつもりはないからな」

セントは、先ほどから俯いて黙ったままだった。

エミリが心配そうに見つめるなか、彼は不意に顔を上げて沈黙を破った。

「…一つだけ、言わなければならないことがあります」

「ん？」

「先生は、三年前の出来事の噂を知ってますか？」

「…その年で組合のことを知っているから、只者ではないと思っ
てはいたが…その話題を持ち出すとはな…」

セフィルは、目を見開いて、だが何か興味を持つような目でセントを見た。

彼が言った出来事とは、三年前に遡る。

当時、ラドヴィスは他二国とまだ今のような友好的関係がなく、こ
こだけやや孤立している状態だった。

領土拡大等のために、いつ攻め入って戦争が起きてもおかしくはな
い状態だったが、双方も消極的だったのか余り小競り合いも無かつ
た。

そのなかである日、王都から西の方で突然眩い一筋の光が、天へと
昇っていった。

それは、国中の何処からでも見えたという。

すぐにその光は消え、その日は特にそれ以外は何も無かった。

だが翌日から何故か雨が続き、終には分厚い雲が広がり嵐となった。
その激しさは凄まじく、ほとんどの建物が瓦礫の山と化した。

奇跡的に死者は出なかったものの多大な負傷者を出して、街は絶望
に包まれた。

だが、当時の王 今の先代にあたるのだが、すぐさまに対策を打
ち立て、街の復興に取り掛かる。更にそれまで対立していたリディ
ナ、トルポリック両国に救援を求めた。

突然の要請に外交官は耳を疑ったが、それぞれの王は事情を知ると
すぐに行動に移した。

そのかいあってか、街は半年近くでほとんど元の姿へと戻ったのだ

が、今も王都の人々に深い傷を残している。

この惨劇、自然災害として認識されているのだが、一部の魔術士達の間では人為的ではないかという話があるのだ。

セフィルもその中に含まれるのだが、根拠を掴んでいるわけでもなく、真相も謎のままなのである。

「だが……組合とは関係ないんじゃないのか？」

彼は、真相が聞けるかもしれない期待を抑えつつ、セントに問う。

「いえ。あれは…組合に來た依頼が全てのきっかけです…」

それは、あの日の三日前になる。

当時、王都にいたセントは術士組合で既に活動をしていた。

「セント、来てくれたか」

その日彼は組合王都支部顧問のアーサーから、事務所の方に来るように予め連絡されていた。

アーサーは、今のセフィルよりも若干年上程度とまだ若いのだが、これまでに魔術の分野で多くの理論を打ち立て、功績を残してきた古の賢者とまではいかないものの、実力は当時で王国一、世界で見てもトップクラスで、魔術を扱う者の間では知らない者はいないとも言われている。

「さて、新しい依頼の件なんだが……」

「？、何かあったんですか？」

語尾を濁す辺り、何やらあったのだろうかと思惑に感じたセントは、率直に問い掛けた。

「今回の依頼主、国の関係者になっているのだ。しかも、機密事項としてな」

「！」

セントは、今日事務所に誰も見当たらないことを不思議に思っていたのだが、それを聞いて理解した。

この組合はそもそも、薬草などの代理採集などと言ったいわゆる便利屋の様な活動を中心に行っていた為に、これまで国など大きなことに絡むようなものは無かった。

それ故に、アーサーもこの依頼に関しては信頼できる者のみで行おうとして、彼だけを呼び出した。

「内容は、地下にある魔方陣の効力を止めることだ」

「……はい？」

だが幾ら機密事項とはいえ、余りに唐突過ぎる内容に啞然とし、そう聞き返すことしか出来なかった。

「ど、どういふことですか？」

「んとな、セント、この国が閉鎖的になってきているのは知っているよな？」

「は、はい。ここ半年前に突然ですよね？」

その言葉にアーサーは深く頷いた。

実際、ラドヴィスと隣国との関係が悪化したのは昔からではなく、ほんの数ヶ月前からのことだ。

国境の街では、何人かの商人が出入国を断られたという話も彼らの耳に届いている。

「ああ。王の命令に臣下達も疑問に思った。そして、その内の何人かが何か裏がないか調べ始めたのだ」

「そんなことやって大丈夫なんですか？」

セントは首を傾げながら聞いた。

「勿論、そんなことがばれたら逆臣の汚名を着ることになるからな極秘でだ」

彼も納得したのを見て、アーサーは話を進めた。

「とにかく、どう調べあげたのかは分からないが、城の近くの地下に魔方阵が在ることが分かった」

「そしてそれが原因ではないか、ってことですか？」

「お前は理解が速くて助かるな。説明する側も楽だよ」

依頼内容を聞いていれば、何となく分かることだとセントは思ったが、それを指摘するよりも気になることがある。

「確証はあるんですか？」

「ある……とはいいい切れない。だが、これ以外に原因となるような不自然なところが全くないらしい」

「そうなんですか」

「それに、魔方阵の停止は素人では出来ないから、むやみに城の術師にも頼むこともできずに悩んだ結果、この組合に白羽の矢が立ったということだ」

魔方阵には幾つか種類がある。

今回の場合、それが原因ならばその魔方阵は他人に作用するものと

なる。

このように他人に何らかの作用をするものは、陣を描いてそれに魔力を注ぐことで、それが周りに作用するような形になる。

魔力が残っている状態で無闇に陣をいじってしまうと、最悪の場合陣の魔力が暴走することもある。

魔力が暴走を起こした場合、その魔力の性質に従うことがほとんどだ。

例えば、火の性質をもっていたのならば、独りでに燃え上がったりする。

だが規模が相当な大きさになり、更に性質も個人によって異なるために、実際のところ起きてみなければどうなるかは分からない。

その為に先に魔方阵の魔力を無くさなければ、停止させることは出来ないのだ。

「一応、停止の操作は私がやるが、セントには万一の時の人払いを頼みたい」

人払いという言葉に、若干の違和感を感じつつセントは、呆れるように溜め息をついた。

「……わざわざ遠回しに言わなくていいですよ。普通に言うてください」

「それはすまない。…とにかく誰か来たときに、此方の作業が終わるまで足止めて欲しいんだ」

セントは暫しの間、考え込んでいたが不意に口を開いた。

「分かりました。あまり力になれないかも知れませんが…」

「ありがとう。そして、すまないな。セント」?

「…いや、なんでもない。また明日打ち合わせをするから来てくれ」
「……はい」

セントは、彼が何故謝ったのか気になったが、特に問うことはせず、その日は組合を後にしたのだった。

第24話 潜入

「来てくれたか」

後日セントは再びアーサーに呼び出されて事務所へと赴くと、アーサーの他に見知らぬ人物がいた。

「そちらは？」

「ああ。今回一緒に来てもらう者だ」

「よろしくね！、えっと…」

「セントだ。君は？」

「フォルスだよ」

そう名前を告げると、につこりと笑った。

「それじゃあ、明日、日中に行動を開始する。段取りは前にそれぞれに言った通りに行うつもりだ」

「はい」

「でも、何で昼間なの？」

アーサーの計画にフォルスは首を傾げた。

「依頼主が、入り口までの案内をしてくれるんだが、城に近いところにあるらしく、夜間だと警備やらなどで動きづらいそうだから、敢えてそうした」

「そっかあ」

夜中こっそりと盗みに入るといふのはよく聞く話である。

人目に付きにくいというのが理由にあるのだろうが、よくあるが故に警備が厳しくなっていることがある。

依頼主の話では過去に一度だけやられたことがあるらしく、それ以降警備が厳しくなったという。

逆に、白昼堂々盗みに入るといふ血迷った行動を起こす者はいないだろうという心理から、昼間は中々手薄となることが多いのだ。

昼間ならば誰かしら城内を通り掛かるということもあり、わざわざ見回りを割り当てる必要もないのだが。

「城に入る訳では無いし、もし見つかったときに寧ろ遣り過ごしやすいからな」

「成る程」

フォルスも納得したのを見て、今度はセントに視線を移した。

「セントは、何かあるか？」

「いや、特に無いです」

「そうか。じゃあよろしく頼むな」

仲良くしとけよ、とアーサーはそう言うのと、何か作業するらしく奥へと消えた。

「ねえ、セント」

「ん？」

彼がいなくなると同時に、隣にいたフォルスが話し掛けてきた。

「セントは、いつから此処に？」

「んと、一年くらい前からかな。どうしても魔術を習いたくてな。

先生に頼んだんだ」

「先生って言うと、アーサーのこと？」

「ああ。そしたら、入ったらどうだって勧められてな」

「そっかあ」

うんうん頷いているフォルスにセントが同じ質問をしてみると、

「内緒っ！」

と笑顔ではぐらかされてしまった。

その日は二人とも特に予定がなかったため、色々と話してから別れた。

当時のフォルスは現在よりも髪が長く、やたらと幼い顔立ちであった。

それだけではなく、何故だか雰囲気や言動なども少女のようであったために、周りからはそうとしか見えなかった。

セントも、初めは少女であると勘違いをしていたために、男だと聞いたときにはすぐには信じられず、耳を疑った。

本人はと言うと、何とか少年に見えるように努力しようとはしているのだが、余り成果が見られていないのが現状である。

彼はセントに何かアドバイスを貰おうとしたが、そのようなことを知っているはずもなく、ただ苦笑いを浮かべるだけだった。

そんなこんなで次の日、彼らはアーサーに連れられて城の近くの林に来ていた。

彼によると、依頼主とは此処で落ち合うこととなっているが、三人が着いた時にはまだ依頼主の姿は見えなかった。

「なんか楽しみだね」

「おいおい…遊びに行くんじゃないんだから」

緊張感のないフォルスの言葉に、セントは若干呆れ気味である。

「だって、未知の洞窟に行くんだよ？ドキドキしない？」

何やら一人盛り上がりつつきているフォルスの話を聞き流していると、城の方から誰かがやって来た。

「いやいや、遅れて申し訳ない」

肩を上下させてそう謝りつつ、乱れてしまった服装を正していく。

「どうやら、この初老の紳士が依頼主の様である。」

「いえ…何かあったのです？」

「会議が入ってしまいました…今も上手く抜け出して来たんです。申し訳無いんですが案内は出来ません」

「分かりました……では、場所の方を教えてください」

「うむ。ここからあの方向に向かえば、魔方阵のあるところに繋がる洞窟の入り口に出れるはずです。ただ、その洞窟が人口的に造られた様なので…」

その言葉に、アーサーは頷いた。

「何らかの罠があるのは承知の上。必ず、良い報告を持って戻ってきます」

「任せておいてよ！」

アーサーに相槌を打つように、フォルスが言った。

依頼主は、彼を見て柔らかな笑みを浮かべた。

「これは何とも頼もしいお嬢さんですな。宜しく願いますぞ」
そう言うと、彼は踵を返して城のほうへと戻っていった。

「…また、間違えられていたな」

「うわぁん、セントおゝ！」

フォルスはまた少女だと間違えられてしまい、セントに泣きついた。
「仕方無いだろう。そんな格好では…」

そう言いつつ、セントはフォルスを慰める。

「…二人とも、そろそろ行こうと思うんだが…」

アーサーはやや呆れつつ二人に言うと、少しずつ歩みを始め始める。
「あつ、ごめん」

「すみません」

そう言うと、二人はアーサーの後を追った。老紳士の言った通り、暫く歩いていると洞窟が見えた。

やや急な斜面に空いた穴は、なだらかな下り坂になっていて人一人くらいならば充分に入ることが出来そうである。

「どうやら、ここらしいな……二人とも、細心の注意を払って行動してくれ」

セント自身、フォルスと同じ様に確かに好奇心があった。

そのためにセントは油断して二人の足を引っ張らないよう気を引き締めて頷いた。

「そうだね」

そう言ったフォルスは、何となく何処か雰囲気が変わったようにも感じられるが、余り変わらない気がする。

「それじゃあ、行くぞ」

だが、アーサーにはそれだけで充分伝わった様だった。

彼がそう言うと、未知の洞窟へと足を踏み入れていった。

内部は老紳士の言うように、確におかしな所が幾つかあった。

この洞窟自体は元からあったのかも知れないが、狭いところでは壁や天井も突起した岩などが不自然に削られていて、奥まで行けるようになっていた。

「やっぱり狭いなあ……まだ着かないし……」

少し屈んだ状態で進んでいるフォルスが、不満を漏らした。

入り口の光はもう見えなくなり、大分進んだのだがまだ魔方阵には辿り着かない。

逆に同じような場所が多いために、余り進んでいないような錯覚さえ覚える。

「もしかして行き止まりとかないよね？」

「それは大丈夫だ。僅かだが風が吹き抜けているのが感じられる」

「そっかあ」

もうしばらく進むと、徐々に広くなり、開けた場所に出た。

「うわぁ……」

幾つもの岩の柱が高い天井まで伸びている光景は、鍾乳洞の様に神秘的で目を奪われ、思わず溜め息が漏れる。

「これは流石に人の手じゃないよね」

フォルスは、繁々とそれらを見ながら言った。

「確かに……魔術でもここまで細く削るのは相当難しそうだしな……」
そんなことを話していると、アーサーが灯していた光が消えた。

「!!、何……?」

二人とも反射的に身構えたが、アーサーは特に気にせず辺りを見渡す。

すると柱で影になっている所から、僅かながら光が漏れていることに気がついた。

彼は何の躊躇いもなく近づき、床に手をやった。

ゴト……

「わぁっ!」

突然驚いたようなフォルスの声が聞こえてきたが、アーサーはセントがいるから大丈夫だろうと思い、音がして外れた石蓋を持ち上げた。

「当たりだな」

そこには、更に下へと続く階段があった。

若干奥の方が明るく見えるが、どうやらここから人口的に造ったようだ。

「光よ……」

杖を前に掲げて小さく呟くと、再び杖に小さな光が宿る。

「助けて……」

それと同時に再びフォルスの声が聞こえてきた。

「おーい……って、何やってんだ?」

だが、今度はそれが助けを求めるものだったために不思議に思い、岩影から出て前方を照らし出す。

「その……フォルスが躓いて……」

「だつてえ……」

そこには何があつたのか、絡まって倒れている二人の姿があつた。明らかに普通に転んだ訳では無さそうである。

「とりあえず……解くの手伝って……下……さい……」

「もう……明かり消すなら言つてよ！」

フォルスが、頬を膨らませて言つた。

「いや、悪い悪い」

結局、アーサーに助けて貰つて自由になれた後に彼が事情を聞いてみると、どうやらフォルスは暗闇が苦手らしく、明かりが消えたときからセントの腕にしがみついていたのだが、フォルスが躓いた勢

みでセントも倒れた挙げ句絡まったらしい。

実際のところ、相当複雑にこんがらがっていたため、酷い転び方をしたと思われる。

「ってか、暗闇駄目だったんだな」

「だってさあ……」

若干涙目になっているフォルスに、セントがそんなことを聞いた。

セントも、先ほどまで息が絶え絶えだったが今は落ち着いたようだ。

「うう……」

「お、おいっ」

だが、フォルスが俯いてしまい慌てて慰めに入る。

（仲良いのは悪いことじゃ無いが……大丈夫……かな？）

その様子を見ていたアーサーは、微笑んでいた。

それは二人が仲の良いことに対してなのか、それとも緊張感が無いことに対しての苦笑いなのかは、本人も分かっていなかった。

第25話 最深部の別れ

「ふう…疲れたあ…」

フォルスが大きな溜め息をつくとき、その場にへたりこんだ。

「大丈夫か？」

「うん……平気」

アーサーが見つけた階段は、更に下へと続いていた。

階段を降りきった後は、壁や天井が綺麗に削られていて、人工的に造られた通路のようになっていた。

だがそれは、まるで迷宮の様に入り組んでいて大分長い時間歩き回り、広い空間へと出た。

「それにしてもでかいな」

この場所に辿り着くまで殆んどが狭い空間の行き止まりであり、魔方阵も描かれてはいなかった。

それに比べるとここは異様に広く作られていて、それは盛大に舞踏会などを行っても余裕がありそうなほどである。

アーサーの杖の灯りだけでは全貌を見ることは出来なかった。

「少し休んでくれ。ちょっと奥まで行ってくる」

アーサーはそう言うと、二人の傍らに自分の杖を置き、奥へと向かった。

少し歩くと、彼の背後に光源があることもあり、奥は見る事が出来ない。

「…デイルビジョン」

アーサーは一度立ち止まって目を瞑ると、そう呟いた。

眼を開くと、しっかりと奥の壁まで見えるようになった。

この術は一時的に光の感受性を増幅させるもので、アーサー自身で編み出した。

これにより、明かりがない暗闇でもある程度まで見えるようになるのだ。

だが、この術の効力が残ったまま外など明るい場所を見てしまうと、余りの光に視界が白くなり何も見えなくなってしまう、酷いときには意識を失うこともある。

さらに、半ば無理矢理に高めるために身体に負担を掛けてしまう。

それ故に、先ほどまでの三人で行動しているときは、少々視界が悪いが光を呼び寄せていたのである。

アーサーは、明るくなった部屋を改めて見渡す。

まるで大規模な舞踏会でも開催出来そうなほど広いこの場所の床に、うつすらと線が描かれていることに気がついた。

（当たり前か？）

線を追っていくと、円と幾つかの模様を描いているようで、振り返って確認することは出来ないが、どうやらそれは後ろにも続いている。

彼が思った通り、どうやら此処に魔方陣が描かれているようだ。

「……………解除」

アーサーは再び眼を瞑って呟くと、視界は元に戻っていた。

そして後ろを振り返ると、いつの間にか随分と進んでいたのか、遠くに光が見えた。

アーサーは早足で二人のところへと向かっていく。

「あつ、どうだった？」

フォルスがゆっくり立ち上がって彼に聞いた。

「ああ、やはりこのようだ。奥に魔方陣があった……ん？」

アーサーは二人に報告しているときに、フォルスの顔が先ほどよりも赤くなっていることに気がついた。

「熱でもあるのか？」

「え？突然どうしたの？」

「そういえば…確かにさっきよりも顔が赤いですね」
セントが徐にフォルスの額に手をやる。

「……………もしかして、僕？」

「ああ。何かあったのか？」

「うん。何も無かったはずだよ」

アーサーが奥に向かっていている間も特に騒がしくならなかったために一応聞いてみたが、案の定無かったようだ。

「まあ、大丈夫そうだな」

「うん。だるいとか、そういうことはないよ」

フォルス自身大丈夫と言っているために、アーサーは本題に移ることにした。

「そうか。…それより、やはり此处に魔方陣があるみたいだ。暗いせいで見えないが…」

その言葉にセントが、戸惑いを隠せない様な表情を見せた。

「で、でも、何も魔力が感じられないじゃないですか」

「そうなの？」

「そこなんだが…もしかしたら見つけれないように、何らかの仕掛けがあるのかも知れないな」

本来魔術を扱うものは、大方他人のものでも魔力を感じられる。これを利用して、仲間や相手の位置を大まかだが把握することも出来るのだ。

因みに、フォルスは護符など自身の魔力を消費しないものを使うため、長時間かけて意識を集中させないと、魔力を感じることが出来ないのである。

アーサーはそう言うと、二人を魔方陣の方に移動させる。

「これが、陣の一部だ」

そう言つて、杖を床に近づけ照らし出した。

「……どれ？」

「これだよ」

中々見つけられずにいるフォルスに、セントが屈んで少しだけ色の違う部分を示した。

「何か薄くない？」

フォルスが率直な感想を述べる。

確かに彼の言う通り、線は染みのように薄く目を凝らして見なければ

ば分からないほどだ。

「一応、薄くても魔方阵としては成立するが……確かにこれでは分かりづらいな」

色々と話している二人を他所に、アーサーは魔方阵に手をやった。同時に、魔力が体の中に流れてくる。

どうやら魔方阵には魔力が残っているようで、何か細工がしてあるが故に普通には感じられないようだ。

彼は、その魔方阵から感じられる魔力の性質を、経験と感覚から予測していく。

「……！」

突然、フォルスが顔を上げ辺りを何度も見渡した。

「どうかしたのか？」

「……誰か……来る」

「！、本当か？」

「うん……まだ遠いみたいだけど……」

ちょうどアーサーも終わったのか、立ち上がって二人に向かい合った。

「そうか。ならば、早く始めなくては。二人とも、何かあったら宜しくな」

「大丈夫なんですか？」

「ああ。恐らくな」

そう言って、後ろを振り返ると再び魔方阵に触れる。

すると、陣がうつすらと光始めて暗闇に浮かび上がった。

どうやら始まったようで、セントにも魔方阵の魔力が感じられるようになった。

一度に大量の魔力を外から取り入れてしまうと、余程魔力が無いときでなければ、欠乏時と同じように何らかの症状が起こるために、少しずつ取り込まなければならぬ。

もし下手に大量の魔力を身体に流して気でも失えば、魔力が暴走して自身も無事ではいられなくなる。

二人は、周りを警戒しつつもアーサーを見守っていた。

時間は刻一刻と過ぎていき、それにつれて特にフォルスに焦りが見え始めた。

「もう時間が…」

だが、自分たちには手伝おうにもこの事に関しての技術、理論を知らないために何も出来ない。

ただ、待つということが非常にもどかしく思えた。とうとう近づいてくる足音が聞こえてきた。

だが、未だにアーサーが終わる気配はしない。

「！、気づいたみたい…」

「分かった」

向こうは走り始めたのか、足音が早く小刻みになっていた。

フォルスは術符を取り出して構えた。

セントはというと、短く詠唱を始めて杖を生成した。

これはアーサーの下で勉強していたときのある日、夢で見てから出来るようになっていた。

更にアーサーから色々と教えてもらい、水弾を飛ばす程度ならば詠唱無しで可能になったのである。

「行くよ！」

「お、おい！」

フォルスが暗闇に向かって駆け出した。

彼は魔力を感じることは苦手であるが、気配を察する能力が非常に高い。

そのために視界が無しに近い状態でも、大まかな位置関係は感覚から分かるのだ。

一番近い所にいる敵に狙いを定め、術符を投げた。

ドン！

狙い通り、相手に術符が触れたと同時に小さな爆発がおき、後ろへと吹き飛ばした。

ガシャッ

衝撃で倒れ、金属がぶつかるような音が聞こえた。

どうやら、鎧の様なものを装備しているらしく、余りダメージは期待できなさそうだ。

「！、セントっ右！」

フォルスの声に、ほぼ時間差無しに反応した。

セントは左に飛び退けると同時に、杖を振るう。

水弾は大人一人を弾くほどの威力で、遠くまで飛ぶ。

「わあっ！」

フォルスは突然飛んできた水弾を、身体を捻って間一髪避ける。

ちょうど攻撃動作の直後立ったために、反応が遅かった。

「ちよつと！、こつちに飛ばさないでよ！」

「悪い！」

そう一言謝ると、ようやく目が慣れてきたセントも前へと出た。

先ほどと余り変わらないが、それでも魔方阵から僅かに発している光のお陰で、僅かながら周りが見える。

「はあ！」

相手の攻撃をうまく避け、そして鋭く振り抜いた杖は、脇を捉えそのまま横へと吹っ飛ばす。

ガン！

吹っ飛んだものは、思いの外のびていき、そのまま壁にぶつかり下へと落ちた。

だが行き着くまもなく、別の敵が攻めてくる。

「くっ……」

何とか攻撃を防ぎつつ、次々と捌いていく。

だが敵の数は一向に減らず、時間だけが過ぎていく。

幸いこれまでアーサーの方にまで攻撃が行っていないようだが、まだアーサーも終わる気配がしない。

「っ！、うそ……」

突然、フォルスが小さく声を上げた。

「どうした！」

セントがすぐに彼の元へ行くと、動揺からかフォルスの動きがそれまでよりも鈍くなっているように感じる。

「あれ……」

彼が短く指差した方を見ると、空の鎧が転がっていた。

セントはすぐに分からず、また攻撃が来たために考えを中断した。

フォルスも再び戦い始めていて、動きも戻って来たようだ。

安心して戦いに集中しようとしたとき、さきほどの鎧が無くなっていることに気がつく。

「！、まさか……」

そう思った時には目の前に、鎧の剣が迫ってきていた。

「！」

「エル・ハイドレード！」

刹那、アーサーの声が響き渡り、セントに迫っていた鎧を貫いた。

「先生、終わっただんですか！」

「いや、まだだ」

それだけ言うと再び、詠唱を始めた。

「断絶された空間……マイトセパレート！」

短い詠唱の後、丁度三人を囲むように巨大な壁が立ち上がった。

「フォルス、ちょっと来てくれ」

「あれ？、アーサー！」

「悪いが時間がない。…恐らく、あれらは魔術によるものだ」

「そうなの？」

そう言っただけでセントの顔を見るが、彼も気づかなかったようで首を傾げている。

「ああ。だから、あれは幾らでも攻めてくる。こっちが消耗してやられてしまう」

「じゃあ、どうしたら……」

「とりあえず、魔方阵の魔力は半分位までなくなったはずだが、まだ時間が掛かる。だから、二人は先にここを出てくれ」

「！？、じゃあ、先生は……？」

「私は大丈夫だ。魔力なら幾らでもあるからな。もう少し陣の魔力を減らさないと危険だが…」

そう言ったとき、彼らを囲んでいた壁が一瞬歪む。

「…時間がない。頼む…」

「でも…」

どうしても、アーサー一人を残すことはしたくないセントが食い下がる。

もしそんなことをしてしまえば、アーサーは確実にやられてしまう。

「……分かった。ここから出ればいいんでしょう？」

すると、俯いていたフォルスが口を開いた。

「ああ。こいつのことも頼む」

「任せて。アーサーも無事に戻ってきてよ！」

そのフォルスの言葉を聞いて、アーサーは満足そうに頷くと背を向けた。

「ああ。必ず…」

と同時に、壁が崩壊した。

「凍てつく氷よ、絶対零度の楔となりその懷に抱えよ……シーズフ

ローズン！」

ビキビキッ！

物凄い音と共に、部屋の中にいた鎧が全て凍り付く。

「行け！」

そしてアーサーの怒声に弾かれたかのように、二人は地上目指して走り出した。

第26話 少年の迷い

「……結局、俺はその友達と共に地上へ戻ってきました。それで降は再びその洞窟には行っていないのでどうなったかも分かりませんが、後の嵐を引き起こしたのは確かです……」

セントはそう言うと言いついてしまった。

「そうか……。よく、話してくれたな。ありがとう」

「……………」

エミリが心配そうに彼の顔を覗く中、セフィルは言葉を続ける。

「俺にはセントがどう思っているのかは分からない。だがそれでも来て欲しいという思いは変わらない」

「……………」もう少し時間を頂けませんか？」

「ああ、別に構わないぞ。決まったら何時でも言ってくれ」

「ありがとうございます……それでは」

「あら、遅かったじゃない」

部屋に戻ると、そこにはステイアの姿があった。

「あつ、ステイアお姉ちゃん！」

「何故ここに？」

「ルリアが一人だったから色々と話していたのよ。そしたら彼女が部屋にこないって誘ってきたから、ついてきたの」

その本人はトイレにでも行っていたのか、後ろから現れた。

「二人とも何処行つてたの？」

「ああ、ちよつと先生に用があつてな」

「そっか」

ルリアは特に深入りせずと頷くと、エミリを自分の膝の上へと座らせる。

「何の用だったのよ」

「まあ、授業とかについてな…そういえば、ウェディは？」

「さあ、どつかで油でも売ってんじゃないの？」

何となく予想がついていたが、予想通りのステイアの返答だった。

今頃学校の何処かをさまよっているのかも知れないが、セントは深く考えるのをやめた。

「そ、そっか…」

「やつぱり呼びに行った方がいいんじゃない？」

「いいのよ、あれは放っておいても。まず何処にいるのか分からないのにどう呼ぶのよ」

「そ、そっか…」

(ウエディ、ごめんなさい…)

何処か強引な彼女に勝てず、ルリアは心の中で静かに謝っておくことにした。

「ところでさ、まだ詳しい自己紹介してなかったわよね？」

ふと、ステイアがそんなことを言い出した。

「そういえば……そうかも」

よく考えてみると、確かに素性など分からないことも意外と多い。

「あたしは、ラインタイトっていう村から来たのよ」

「ラインタイトって、確かトルポリックとの国境沿いだったよね？」

「あら、知っているの？」

ステイアが珍しそうな表情で言った。

「うん。一度だけ訪れたことあるんだよ」

「ふーん、珍しいわね」

ラインタイトは国境近くにあるのだが、セリアとは違い余り商人などが立ち寄るということは無く、自給自足に近い村である。

というのも、ラドヴィスとトルポリックとの国境線上にはずっと大きな河川が流れていて、更にラインタイトから下流に行くと別の街があるのだ。

そこは両国に跨がる街で過去に一度だけ分断しかけたが、古くから二国の貿易拠点となっていて、更に海からも定期船も往来しているために、城下町にも勝るほどの繁栄を遂げている。

その為にほとんどの人はそちらへと向かい、ラインタイトへ訪れる人は村の親族がほとんどで時折迷い込んでくる人がいた。

「そうなの？」

「ええ、村に来るのは大抵同じ顔ぶれよ。ルリアも誰かに会いに行つたの？」

「えつと……あれ？」

彼女にはラインタイトを訪れた記憶は確かにあった。

緑と河川に囲まれ、城下町などのような賑わいこそないものの、そこにはない様なのかな景色が浮かび上がる。

「何しに行っただけ……」

だが、そこで何をしたのか誰にあったのかも思い出せず、恐る恐るスティアの顔を見ると少しだけ落胆したような表情をしていた。

「ごめん……」

「いいのよ。ずっと前に行ったのでしょ？」

反射的に謝ってしまった彼女だが、スティアの言葉にますます申し訳なくなってしまう。

「うん……」

「セントはどうなの？」

「……………」

今度は、セントに質問をしてみたが気づいていないのか反応がない。

「セント？」

「ん？」

「なんだ、聞こえてるじゃない」

スティアの言葉に、彼は状況を理解した。

「すまない。どうやら無視していたようだな」

「何か悩みでもあるの？」

「いや、少し疲れてるだけだ」

言われてみれば確かに彼はやや疲れた表情をしていた。

「そっか。ならもう休んだら？」

「あたしも構わないわよ」

その言葉に小さく頷いて、すまないな、と言うと部屋へと入っていった。

「……それで、ルリアはどこから来たの？」

「んと……私は、トルポリツクのローレシアから来たんだよ」

「あら、そうなの？」

スティアは、ルリアがラドヴィス出身ではないことに少し驚いた。

「うん。ローレシアは国の北東にある港町なんだよ」

「東つてことは……ここまでずいぶん遠いじゃないのよ。よくわざわざここに来たわね」

トルポリツクは、大陸東側一帯を領地としていてほぼ中心には東西に分けるように山脈が縦に走っている。

領地が広いために、街は点々と存在しそれらを結ぶように道が走っていて、ほとんどの場所で馬車による定期便がある。

それでも街の間の移動は半日かかる事もあり、それこそ国を横断するということになれば、峠道など道の悪いところもあるため三、四日かかる。

「でも入学試験があれだったから、前もってセリーアに越してきたんだよね。ローレシアからここの学校にくるのなんて私くらいしかいなかったから」

「そうだったの。でも、どうしてトルポリツクじゃなくてこっちの学校に来たの？」

「それはね、向こうだと魔術学校のほとんどが上層階級の人たちしか入学できないってのがあったからこっちに来たの」

貴族のような上層階級の中では自分のステータスというものが非常に重要となり、トルポリツクではそれが著しい。

特に魔術は才能に左右されることが多いために、習得が難しいが故に完璧に扱えれば非常に強い武器となる。

そのため皆ほとんどが一度は魔術学校へと通うため、魔術学校が富豪や権力者ばかりを集める傾向にあるのだ。

もちろん大衆が入学できる学校もあるのだが、トルポリツクでは数が少ないため倍率が高く、結局のところそれなりの才能がなければ入学することができないのである。

「ふーん、何だかいろいろと面倒くさそうね」

「でも、そのお陰でスティアたちにも会えたから……」

「ちょっと、嬉しいこと言ってくれるじゃないのよ」

少し照れくさそうに笑ったスティアは、そう言いながらルリアの肩を叩く。

彼女が手を出したときにはルリアは少し驚いたが、すぐに照れ隠しの行動だと分かりルリアもつられて笑った。

その後もそれぞれの生い立ち以外にも自分の趣味など、様々なことを話した。

中でもスティアとウエディは幼馴染ではないことにルリアは驚いた。スティアの話によると、昨年あたりにウエディがライントイトへと越してきたようで、お互いに知り合ってからまだあまり経っていないそうだ。

だがそれでも、二人の気が合ったのかすぐに打ち解け、数週間ではとんど現在のように話していたという。

ルリアは珍しいね、とスティアに言うと、先にセントとルリアの出会いを聞いていたために、自分の方が稀よ、と突っ込まれてしまった。

ルリア自身、人を助けることは普通なことであると思っているためにあのような行動をとった訳であるため、あの状況で頼んだことこそずるいとは今になって思っているが、彼女はそれ以外のことを稀だと言われて少々ショックを受けていた。

「……………っと、もう日が落ちてきたわね。そろそろ戻ろうかしら」
いつの間にか部屋には夕日が差し込んで少し寂しげな独特の雰囲気となっている。

「きつとウエディも心配してるよ」

「寧ろ怒っているわよ。どうして置いて行っただってね。………そうだが、セントのことなんだから」

「セントがどうかしたの？」

「あくまであたしの予想だけど、もしかしたら何かあるかもよ」
突然のスティアの言葉にルリアは理解できずにいた。

「どうゆうこと？」

「さっき通ったとき、何処か思いつめたようだったから、恐らく何かしら悩みでもあるのかと思ってね。彼自身の問題ならあなたになら彼も話しやすいはず……」

「そっか……」

「押し付けるような形になってしまっけど、あたしもできる限り協

力するから」

「分かった…ありがとう」

スティアが部屋を去った後、ルリアは色々と思い返していた。今日の朝までは、特に何の様子の変化もなかった。

そうすると、やはりセントが突然いなくなってしまった時に何かあったのだろう。

（やっぱり……）

だがはたして、彼は自分に話してくれるのだろうか。

エミリならば彼と一緒にいたために何があったのか分かるだろうが、まだ幼い彼女に聞くのは酷である。

結局、大した考えも出ることもなくルリアは、いつの間にか抱きついて眠ってしまったているエミリを膝に座らせたまま、彼女の意識は夢の中へと吸い込まれていった。

「…………む」

気がつく、外は暗くなっていた。

セントはとりあえずベッドに横になって先ほどのセフィルとの会話を思い返していたのだが、思っていたよりも疲れていたようでいつの間にか寝ていたようである。

彼の部屋を出ると、二人が一緒に眠っている姿があった。

「おいおい、風邪引くぞ…」

彼は頬を緩めつつそう言っていると、ルリアのベットへと移動させた。

そして、セントはふと窓の外を見た。

「……少し夜風に当たるか」

自分にとって何かきっかけになれば、と願いつつ、彼は外へと向かっていった。

第27話 少女の思い

「…で、聞いてみたの？」

「うつん……いざ聞こうとすると、どうしても…」

そういうとルリアは俯いてしまった。

彼女は今、スティアと共に談話室にいた。

あれから二週間ほど経過したが、ルリアはどうしても躊躇してしまい、これまで彼の悩みについて聞くことが出来ずにいた。

次の日から授業も始まり、彼の様子も普段と変わらないように見えるのだが、時々思いつめたように見えた。

何度かエミリにも聞いてみたりはしたのだが、彼女は首を振るだけであつた。

「そう……、じゃああたしから言っておくわ」

「ごめん……」

「あたしの方こそ、無理言つてごめんなさいね。あなたの方がセントも話しやすいと思つたけど…」

スティアは気にしないで、と言っているのだがルリアはどうしても申し訳無く思つてしまう。

そんな彼女を見かねてか、スティアは再び口を開く。

「そんなに気を落とさないで。あなたは彼に、逆に迷惑をかけるかもしれないから聞けなかつたのでしょうか？」

「うつん…」

「それは彼も同じで、あなたに迷惑をかけたくないから、話そうとしないのよ。あなただって、もし彼の立場にいたならば同じことをするはずよ」

話の途中で俯いてしまったルリアは、そのまま小さく頷いた。

「だから、そんなに気を落とすことも無いわ。下手に聞きだそうとしても、時期というものもあるからね」

「そっか…」

それらの言葉で、幾らか気持ちが軽くなったように感じられた。

「なんかこう聞いていると、スティアは過去に色々あったみたいだね」

「まあ実際に色々あったんだけど……今となったら役に立ったみたいね」

「そ、そっか……ごめん……」

ルリアは何やら触れてはならないことを聞いたと思って謝ったが、スティアは苦笑いを浮かべた。

「あたしが可哀想だとか思わないでくれる？、確かに色々あったけど、思っているようなことじゃないからね」

「う、ごめん……」

スティアに対して申し訳無くなり、ルリアは再び俯いてしまった。

「ちよっと、そんな気にしなくてもいいじゃない。あたしが苛めているみたいじゃないの」

「そ、そっか」

ここでもしウエディがいたならば、恐らく余計な一言を言って殴られているに違いないが、幸い彼はセントと共に手合わせに行っている。

「さて、重い話はここまでにして……選択授業の方はどうだった？」

「えっ、いきなり？」

突然話題が変わり、戸惑っているルリアを不思議そうに見た。

「だって、一応決めることは決めたじゃないのよ。それに、これ以上下手に話してごちゃごちゃになるよりは、いいと思うわ」

「そっか……」

それを聞いて、ルリアは少し残念そうに肩を落とした。

「もしかして……まだ何かあった？」

「ううん。ただ……スティアの色々あったのが少し気になって、それを聞いて納得したのか一度頷くと、過去を懐かしむように話始めた。

「そうね……昔……といってもそんな前じゃないけど、一緒につるん

でた子がよく悩みを持ち掛けてきてね。いつも相談にのってたんだけど、そのときに自分なりに色々と学んでったのよ」

「へえ……スティアってどこかお姉さんみたいな雰囲気を感じられると思ってたけど、もしかしたらそのせいかな？」

「どうかしらね。ウエディのお守りつてのもあるとは思っけど」

「あはは……」

ルリアとしては、何故スティアはここまでウエディを悪く言うのかがよく分からなかった。

恐らく嫌いでは無いのだろうが、余計なことを聞く勇氣は彼女には無いようだ。

「それで、授業の方はどう？」

「中々良い感じだよ。魔力の根本つてのを今やっていて、フォトンとフォノンの総称なんだって」

「フォトンなら聞いたことあるわ。付随魔術で使われるのよ」

「そうなんだ……。まだちょっとあまりやってないから、よく分からないんだよね」

スティアはそうね、と言うと詠唱を始めて指先に小さな光を灯した。「フォトンっていうのは、イメージを具現化している物質のことよ。今あたしが光をイメージしたから、こうやって光が出来るの。付随魔術なんかは、これを他の物に付加させるのよ」

そう言うと、スティアの指先に灯っていた光が四散した。

「フォノンのほうはよく分からないけど、総称する位だから似たようなものだと思うわ」

「そっか……。ちなみにスティアの方はどう？、確か魔製学だよな？」
何処からかメモを取り出してスティアが言っていた内容を、一通り書き留めると逆にスティアに問い掛けた。

「そうよ。説明を聞いたところでは、結構深くまでやるみたいだからそのうち何か作ってあげるわね」

「えっ、ほんとに？」

「ええ。実習とかもあるだろうし、きっと自分じゃあ使わないだろ

うからね」

「そつか。じゃあ、期待しているよ！」

ルリアには、スティアがどういうものを作るのか興味があった。

スティア曰く、ウェディの剣は付随魔術でも初歩的な技術の物であるため、今のところあれが限界らしい。

そのため、彼女自身授業に対して大いに期待を寄せているようである。

「さて、そろそろ行くわよ」

話が一段落した所で、スティアはそう言うのと立ち上がった。

「あつ、ほんとだ…」

スティアに言われてルリアは外を見ると、既に日没を迎え静寂の闇に包まれ始めていた。

彼女は一瞬だけ足が止まったが、ふるふると首を振るとスティアと共に歩き出した。

「そらああつ！」

気合いの入った声と共に大上段から降り下ろされた剣を、セントは紙一重の差で避けるとすれ違い様に脇を狙って薙ぎ払う。

だが、ウエディもその勢いを利用して身体を宙に浮かして、薙ぎ払いの上を通過した。

ダッ！

そして、着地するとすぐに身体を切り返し再びセントへと突進する。それは瞬く間の出来事でセントも追いついて行けず、今ウエディに背を向ける形となっている。

「はああっ！」

ウエディはすかさず、一度脇へと小さく振り被ると素早く横に一閃させた。

ガキン！

しかし、その斬撃はセントを捉らえるか否かの所で防がれた。

彼は背を見せたままの状態で、斬撃を受け止めたのだ。

バチィッ！

「っ！」

その時、セントの右手に痛みが走り、一瞬力が緩んだ。

その次の瞬間には、彼の手にあった杖が宙を舞った。

「……ふう。やっぱり勝てないな」

セントはそう言って、苦笑いを浮かべた。

「俺にはこれしか無いからさ。でも、最後は一応魔術使えたから勝てたけど、普通の剣だったら分らなかったな」

「いや、それでも大分疲れてたから、あまり変わらなかっただろう」

これまでセントはウエディの魔術を避けるために、魔術を相殺させたりあまり剣に触れないようにしていたのだが、これまで長い時間ずっと手合わせをしていたため、少し疲れが見え始めていた。

更に、まともに受け止めてしまった上に咄嗟の事だったために防ぐことが出来なかったのである。

「それはそうと、セント。何かあったのか？」

「ん？」

だが、ウェディには引つ掛かることがあった。

「いや、最近動きが鈍い感じしてさ」

それを聞いたセントは、目を見開いていたようだったが、すぐにすまなさそうな表情になる。

「…やはり、出てしまうか……すまないな…」

「俺は別に気にしてないけど、話せるんならルリアには話した方がいいんじゃないのか？」

「ああ…そうだな…」

彼女の元気が無いのはウェディも気づいていて、この手合わせからセントに関係があるのではないかと思っている。

「んじゃ、今日はもう戻ろうぜ。エミリも寝ちゃってるみたいだし」
ウェディが指差した方を見ると、壁に寄りかかって眠ってしまった。
いた。

「そういえば昨日だいぶ遅くまで起きていたな…」

そんなことを思い出しつつ、彼女を抱き上げると部屋を後にした。

「ルリア……その、色々とすまない……」

「ううん。ただ……滅多に顔に出さないから、心配してただけだよ」

「そうか……」

「エミリちゃんの様子も何処か違うからさ、自分だけ仲間はずれみたいに感じちゃって……」

感情が溢れそうになるのを何とか押さえて、ルリアは言葉を続ける。
「仲間なんだから、いつも一人で何とかしないで、もっと頼ってくれたっていいじゃない……セントには及ばないけれど、」

「……………」

そう言いきると、ルリアは俯いてしまった。優しい淡緑の瞳からは、堪えきれずに溢れた涙が零れ落ちていく。

「……………どうやら……」

ルリアの言葉から暫くの間、沈黙が続いていたがそれをセントが破った。

「迷惑にならないようにしたつもりが、裏目に出ていたようだな……」

「すまない……」

その言葉にルリアは顔を上げるとその時、彼の頬を一筋の涙が流れた。

「セント……」

「……つまらない話だが、どうか聞いて欲しい……」

少しだけ間をとり、そしてゆっくりと話始めた。

第28話 それぞれの決意

：魔力とは、本来フォトンとフォノン二つの物質の総称である。

フォトンは体内を構成する物質の1つで、生命を維持するためには不可欠のものであり、多かれ少なかれ誰にでも存在する。

これを放出するときはその時の想像を具現化する性質があり、それこそが魔術を操ることとなる。

フォノンは外に放出されたフォトンのことで、過去にとある魔術士によってフォトンとは別の物であると証明された。

フォノンは不安定な物質であり、基本的には長い時間イメージを具現化することは出来ない。

しかし、イメージがはつきりしていればしているほどフォノンは崩壊しにくくなり、歴史に名を残すような者の中には通常の数十倍もの時間、フォノンが崩壊せずにイメージを具現化し続けたという逸話もある。

また、杖などを媒介として魔術を発動させても若干崩壊しにくくなる。

フォトンには本来の性質の他に、何かしらの性質が付いている。

フォノンも同じで、その性質に近いものの魔術を発動させると、正確に具現化したりフォノンが崩壊しにくくなったりする。

しかし、それを知る術というものが未だ確立していない上に、実際魔術として使いやすい性質とは限らないため、よく使う魔術と性質が一致しないというのも少なくない。

更に、フォトンの性質は血筋などに影響されず、何によって決定するのか分かっていない。

また稀に、フォトン本来の性質のみ持つ場合もあるのだが、何らかの影響があるのかも分かっていない。

現在、フォトンの性質の判別方法、そしてその性質を決定する因子と成り得るものを明らかにするのが、研究士の研究課題ともなっ

いる。

パサ…

「ん……ふう」

手に持っていた筆を置くと、両腕を上に向けて伸びをした。窓から射し込んでくる柔らかい月明かりが、優しく照らしてくれる。細やかな風が開いた窓からやってきて、彼女の髪と戯れては再び外へと帰っていく。

「こんな感じかな」

蒼髪の少女ルリアは、自分でまとめあげた資料を読み返し始めた。美しく流れるような文字で書かれているそれは、以前スティアと話したフォトン、フォノンについて書かれている。

「……………あ……」

ふと彼女は、とあることを思い出した。

それは、恐らく自分にとって大きな出来事になったかもしれない、とルリアは思っている。

あの夜、彼から全てを聞いたとき彼女には分かるところもあったが、

全ては理解できなかった。

そのためにもう声を掛けるべきかわからず悩んでしまい、暫く沈黙が続いた。

「……すまない……つまらない話をしてしまったな……」

「ううん、そんなことはないよ。ただ、初めてセントのこと聞いたのもあつてさ……何を言ったらいいのかわかんなくて……」

「ごめん……、と言った時には再び彼女の目に涙が溜まっていた。」

「そうか……」

再び二人の間を沈黙が支配する。

ルリアは、ふとあることに気づき疑問を持った。

「……セントはどうしたいの？」

そして彼に問い掛けた。

これまでの話では確かに彼の話ではあつて、何故悩んでいるのかも話すには話していたのだが、意見というものが話されていなかった。

「……………」

「私には分からないけれど、セントはセントが思うようにしていけばいいと思う……。セントがやってくれたように、私も頑張つて支えていくから……」

彼が顔を上げると、ルリアはにっこりと笑つて見せた。

「あつ、でも私が足引つ張つちやいそうだなあ……」

やや上目で色々と考えていたのだが、不安要素ばかり浮かんでしまふのか時間を重ねることに焦りが見えてくる。

そんな彼女が何処か可笑しく見えたのか、彼の口元が若干緩んだ。

「ちよつと、笑わなくても……」

「い、いや、すまない」

セントは正直に謝つたのだが、ルリアは頂垂れた。

「うう、そこは否定してよ……私が馬鹿みたいじゃない……」

そう言つてしょんぼりしつつ顔を上げ再びセントの顔を見た。

（そつえば……いつの間にかいつものセントに戻ってる）

そう思うと、自然と笑顔になった。

「でも良かった。なんか久しぶりに笑ってくれた気がするよ」

「確かにそうだな」

セントは再び真剣な、かつ何処か吹っ切れたような眼差しでルリアを見た。

「明日：先生のところに行ってくる」

「そうか。よく決断してくれたな」

セフィルは満足そうに頷くと、セントに一枚の術符を渡した。

「組合の証だ。なるべくいつも持つておく様にしてくれ」

「これは…?」

再びそれを見ると、術符は青色へと変わっていた。

「それは持ち主の魔力によって色が変わり、持ち主が分かるようになってる。また、それを持っているもの同士で位置が分かるようになる。くれぐれも失くさないように」

「分かりました」

「それと、依頼の方についてはなるべく授業に支障が出ないように

するから安心してくれ。…ところで、ルリアはどうかしたのか？」

セフィルは一通り説明し終わると、今度はセントの隣にエミリとともに座っていたルリアに言った。

「えっと…言いづらいんですけど、私たちも入れさせてもらえませんか…？」

「！」

セフィルはなんとなく分かっていた様だが、隣にいたセントは驚いた表情をした。

「ふむ…個人的には歓迎なんだが…」

セフィルが語尾を濁したことにルリアは首をかしげた。

「一応俺も教師だから、生徒に無理を頼んで怪我させる訳にはいかないんだ」

「…そうですね。すみません、無理言つて…」

少し考えれば分かることであつた。

組員らが慎重に能力を見極めて、候補者を立てていることはあの夜の話で分かっていた。

「その代わりに、もしやってくれるのなら、暫くの間俺の補佐として手伝つて欲しいんだ」

「補佐…ですか？」

「ああ。聞いたかもしれないが、今ここには俺含めて三人しかいないものだから、事務的なことを済ますのが大変なんだ」

その時、不意にセントが口を開いた。

「…先生、少し時間をもらつていいですか？」

「ああ。俺は少々席を外すが戻るなら勝手に戻っても構わないからな。後日言つてくれ」

そう言つと、机の上に置いてあつた封筒を手にとって部屋を後にした。

「さて、訳を聞かせてくれないか？」

「んと……」

いざ言おうとするが、どうしてか言いづらいものがある。

「お兄ちゃんを助けたいって言ってたよ」

「ち、ちよつと！」

慌ててルリアが遮ろうとしたのが、エミリの言葉が確かであることを裏付ける。

「えつと…そ、そういうこと…」

しかし、セントは首を横に振った。

「それはありがたいんだが、危険な目にあわせる訳にはいかない。そのうち、事務以外もやることになるだろうから…」

「でも、補佐だったら先生もいるし…。それに…ただ待っているだけは嫌だから…」

そう言った彼女には何か強いものが感じられ、思わず息を呑んだ。そして、セントは何か諦めたかのようにため息をつく。

「俺がつべこべ言えるようなことでもないな。まあ、好きにすればいいさ」

「ごめんね…」

「いや、そもそも自分の考えで縛り付けるのも嫌だしな」

「セント……」

サアアア……

気がつくと、先ほどまで読んでいた資料に折り目が付いていた。

「あわわ……」

彼女はとりあえず、手で折り目を展ばすと置いてあつた本で押さえる。

そんな様子を面白がるかのように、森のざわめきが聞こえてきた。

「ふあ……、そろそろ寝るかな」

そう思い、机の上を片付けると再び突っ伏した。

ついさつきまで眠っていたこともあり、またすぐに眠れそうだ。

（本当に良かったのかな……）

意識が薄れて行く中で自分にそう問いかけたが、特に答えが帰ってくるわけでもなく、彼女は意識を手放した。

寝静まった部屋には、彼女が閉め忘れた窓から入ってくる森の風が吹き抜けていく。

そして、透き通るような緑色の術符がその風に任せてゆらゆらと揺れていた。

第29話 とある一日

「そもそも、付随魔術は魔術が使えない人でも使えるようにするために、作られ…」

魔製学の教師の声だけが聞こえてくる教室の中、スティアは特に書くこともなく、パラパラと教科書を捲っていく。

「…によって、例えば火を使わずにも調理が出来る様になったり様々な物が便利になった。更に…」

彼女は独学とはいえ、これまでに学んだことがあるためにある程度付随魔術に関しては、分かっているつもりであった。

今話されている内容は知っている知識で、技術のほうも実際にウェディが使っている剣では簡単なものながら問題なく発動している。

教科書にも、とりわけ興味の引くような内容もあつたわけではなく、流し読みではあつたがすぐに索引まで見終わってしまった。

「…そのため、使い方によっては脅威にもなり得ることを覚えておいてほしい。あくまで…」

ふと、空を流れる雲が視界に入り外を見た。

スティアが座っている場所は教室の一番後ろでかつ窓の隣であるため、居眠りしていたりしても特に気づかれることもない。

外は普段と変わらない光景が広がっているだけであつた。

「じゃあ、これから手順に入っていくが…」

結局、時間が潰せそうな物もないため一応復習も兼ねるつもりで授業を聴こうと思い、彼女のノートを開いた。

付随魔術は、魔力、正確にはフォトンを術符などの媒介に込めるための魔方陣と、その込めたフォトンを魔術として発動するための魔方陣の二つを刻むのが一般的である。

一般的には、循環を示す円が基礎となつてその周りに詠唱の代わりとなる文を書くと言う形式の魔方陣が使われることが多いのだが、媒介の形などによっては刻むのが困難であつたりするため、その代

わりとして文字を魔方陣として利用したりすることもある。

魔術を発動するための魔方陣は、通常の詠唱魔術で補助として使用するものと似ているため、文字を使用した際のものが上手く扱えれば特に問題は無い。

しかし、フォトンを経介に込めるための魔方陣が特殊で、ほぼ全てのものの形を比較しても一目で分かるほどだ。

この魔方陣の扱いと、フォトンを込める際の放出の仕方が難しいとされ、付随魔術が発明されてからまだあまり月日が経っていないということも重なって、研究があまり進んでいないのである。

このフォトンの放出ができるようになるまで、弟子入りして学んだとしても習得出来るとは限らず、実際に彼女もその感覚を掴むまでに三年はかかって更に一年かけてウェディの剣に施したのだ。

彼女は真面目なときとそうでない時の差が激しいが、根は努力家であるが故に独学で身につけることが出来た。

このように完璧につかいこなすのが難しいにも関わらず、ここまで付随魔術が普及した背景には、既にフォトンを帯びた鉱石などが見つかつたため、難しい作業をしなくてもよくなつたことがある。

通称輝石と言われるそれは、普通の鉱石と同じように地中にある程度まとまって存在しているとされて、新たにフォトンを加えたいが放つておくと自然にフォトンを取り込んで、

再び使えるようになる。

付随魔術と同様に輝石についてもあまり分かっていないが、この性質が他に応用できるかどうか研究が進められている。

「…難しいため、この授業では主に輝石を使つての実習とする。まず…」

大まかな手順が書き示されて多くの生徒が写していくが、既に書き込んでおいたステイアは書き足すことはしなかった。

（そういえば、ウェディが今日何かやるとか言つてたけど…何だっ
たかしら？）

それどころか、集中力が切れてしまったため、授業とはまったく関

係の無いことを考えていた。

「斬撃は、なるべく単発ではなく幾つか組み合わせで、相手が防御したところを利用して狙え！」

校舎の外の広場で、セフィアはそう言いつつ繰り返される斬撃を裁いていた。

現在、実技演習で担当の彼は、受講者であるウェディに稽古をつけていた。

一週の中で実技演習は2コマあるのだが、実際に取ったのは双方合わせて二人だけで、それも一人ずつとなっていた。

「おらっ！」

「下手に大振りになると……」

気合が入って振りが大きくなったところを見逃さず、すれ違ふように後ろへと受け流し振り向き様に背中を狙う。

ウェディもそれが分かっていたのか、勢いを殺さずにそのまま軌道

から逃れようとした。

「うわっ！」

しかし、セフィルはそれを狙っていて彼の足を払うと、ウエディはきれいにすつころんで地面に突っ伏した。

「このように、簡単に返されてしまう」

「いてて…」

剣には刃がついていないため、切れることは無いがそれでも叩かれると痛いのは確かである。

「ウエディは真つ直ぐに向かってくるものが多い。速さで押すのもいいが、もつと裏を突くようにすべきだ」

「裏…ですか」

「ああ。まあ、滅多に剣を使う機会なんか無いだろうが…」

ラドヴィスでは、比較的治安がよく王都の付近ではちよつとしたいざござはあるものの、盗賊に襲われるなどといったことはまず無く、武器を持つ者は主に商人などの標的となりやすい者や、彼らに雇われるいわゆる用心棒や兵士、未開の地や危険な場所に足を踏み入れるような冒険家、そして強奪を繰り返すような盗賊などである。

実際にウエディもこれまで剣を使ったのは此処での試験関係と、手合わせ程度である。

「と言うより、なるべくそんな機会は来ないほうがいいのだろうな」セフィルはウエディを立たせ、先ほどの稽古に関しての感想と指摘、そして心得のようなものを話すと、授業の終わりを告げた。

彼自身人を殺すために教えているわけではなく、あくまで身を守るため、そして人々を守るためである。

魔術など自分には持て余す力を持つと、いずれ野心を燃やす者も現れる。

それ自体は決して悪いとは言い切れないこともあるが、関係の無い人々が巻き込まれるのも事実であり、そして多くの場合巻き込まれていった人々が重荷を背負うこととなる。

それらのことに対抗できるような心の持ち主を育てようと、彼はや

っている。

術士組合の顧問を担当したのも、そのことが関係しているのであった。

「…それじゃあ、お疲れさん」

そう締めくくると、訓練用の剣をウエディから受け取って先に校舎へと戻っていった。

「裏、かぁ。戦ってる最中は何も考えてないし…後でカイトにでも聞いてみるかな」

ウエディも倒れたときについた砂埃を簡単に落とすと、次の授業に向けて戻って行った。

第30話 再会

朝日が照らす森の中、大小二つの影が通り抜けていった。

「部屋の中埃だらけになつてなきやいいな」

「お姉ちゃん、どこ行くの？」

「んと、此処に来る前に少しの間だけ住んでいた場所だよ」

「ほえ」

今日は休講で、ルリアは久しぶりに彼女が住んでいた家へと、戻ることにしたのだ。

因みに他の三人は、場所を借りて勉強会を開いている。

これはウエディが授業に遅れをとり始めたことを案じて、開催された。

魔術を会得していない彼には、やはり理解が難しいところも多い。

一応これまでスティアが定期的に教えてきていたのだが、今回だけは彼女もお手上げで仕方なくセントに頼んだのである。

ルリアはと言うと、前の部屋に置いてきた物を片付けたいということとで抜けてきたのであった。

足早に歩いていると、あまり経たないうちに森を抜けてセリアの街に着いた。

「そういえば、エミリちゃんは一度セントと来たんだよね？」

「うん！」

彼が度々セリアに訪れていることは知っていたが、その理由というのは夜風に当たりたいということであった。

夜風に当たるだけならばわざわざ街にまで行く必要は無い思ったが、前のこともあり何かあればきつと言ってくれるだろうということとで、特に言及することはしなかった。

「えっと……こつちだったかな」

若干道を間違えつつも人気の無い路地を抜けて、彼女の家に至りたどり着いた。

「なんだか久しぶりな感じだなあ……」

そんなことを思いつつも戸に手を掛ける。

（あれ？）

そして開けようとしたが、ふと中から音がしたような気がして手を離した。

（ここ……だよな？）

不思議そうにこちらを見るエミリを他所に、そう思ったルリアは何歩か後ろへと下がり家を見た。

どこからどう見ても記憶にある彼女の家と同じで、家の周りの様子も違っではいなかった。

（さっきのは気のせいかな）

そう納得して戸を開けると、少しだけ物が少なくなつて広く感じられるが自分の家であつた。

「ふう……じゃあちよつと持っていくものを整理してくるから、待つててね」

「はい」

そう言つて、隣の部屋へと入つていった。

エミリも、ルリアの入つていった部屋とは違う場所へと入った。

「あれ？」

ベツトの上には若干不自然に毛布が敷いてあるが、それ以外は特に何もなかった。

「いないのかな……」

何か探しているようであつたが、どうやら見つからないようである。

「その声は……エミリちゃん？」

「！」

他を探すために部屋を後にしようすると、彼女を呼ぶ声が聞こえてきた。

「あつ、ナタリアお姉ちゃん！」

声の主は此処に滞在しているナタリアで、彼女は毛布をはけて姿を現した。

「今日はセントと一緒にじゃないの？」

「うん！、今日はお姉ちゃんと一緒だよ」

「そうなの……」

いつもセントが来るときは夜間だけで、白昼に訪ねてくるのは一度も無かったために、ナタリアは隠れていたのだ。

実際、簡単に見つかってしまいうような隠れ方だったのだが、咄嗟のことだったためこの程度しか出来なかった。

「今日はどうしてここに？」

「よく分からないけど、何か取りに行くって言ってたよ」

彼女はエミリが来たことで安心してしまったのか、足音が近づいていることに気がつかなかった。

「……確かあっちにあつたはずんだけど……って」

「……」

二人が話していると、何も知らないルリアが部屋へと入ってきた。

ルリアの姿が見えた瞬間、ナタリアの頭の中が真っ白になった。

自分の様子を見に来るセント以外に訪れるとすれば、この家の持ち主か居場所を掴んだかも知れない自分を追っている者たちくらいである。

彼はいてもいいと言っていたが、普通に考えて自分の家に知らない人物が勝手に居座っていたらたまったものではない。

さらに自身は追われ身ということもあり、もし見つければ追い出される可能性のほうが大きい。

しかし、それにもかかわらずエミリと悠長に話していたということにひどく後悔をしていた。

そして、追い出されることもしようがないと思いつつも、もしかしたら分かつてくれるかもしれないと僅かに希望を抱き弁解を口にしたようにした。

「ナタリアっ……」

しかし、彼女の言葉は他ならぬこの家の主によってかき消された。

「ほら、私が分からない？」

「え……？」

予想外のことに混乱していたナタリアだが、その声を聞いて入ってきた人物をよく見た。

「あ……ル……リア……？」

それは、あの時街に来た追っ手から自分を逃がしてくれた、最愛の親友の姿だった。

入ってきたときはパニック状態になって気づかなかったが、長い月日が経ち、声なども大分変わっていても見間違えることはない。

「そうだよ！」

それが分かった時には、彼女の身体をルリアが抱き締めていた。

「よく無事で……」

ナタリアも何か言おうと口を動かしたが、何と言ったのか分からない。

しかしそんなことはどうでもよく、ただ今はこの温もりだけを感じていたかった。

暫くして彼女が落ち着いた頃を見計らって、ルリアは口を開く。

「でも、確かりディナに向かったはずじゃ……？」

「うん……リディナの小さな村で暮らしてたんだけど、また見つかって……」

ナタリアが街を出たのはもう随分前で、二人ともまだ幼かった。

それを知ってか、何故ナタリアがこんなにも過酷な人生を送らなければならぬのか、これまでルリアはずっと思っていたのである。

「それで、逃げてる途中にこの街に来たんだけど、足を挫いて……」

そう言うと、包帯が巻かれている足を見せた。

「でもその時に通りがかった人が助けてくれて、ここに連れてきてくれたの」

「そうだったの……」

この時何故だか分からないが、ルリアにはその人物が何となく分かった。

そもそも、彼女の家を知っているのは数人程度ということもあるの

だが。

「もしかしてその人、セントとか名乗ってなかった？」

「！、知ってるの？」

「うん。彼とは私もこっちに来てから知り合ったんだよ」

「そうなの……」

あの出来事以来、セントは自身のことを他にも色々と話してくれた。その中で、彼が度々夜風に当たりに外へ行くことも聞いたのだが、ナタリアのことに關しては何も聞いていなかった。

流石に見ず知らずの他人を勝手に自分の家に入れさせたことを言うのは抵抗があったのだろうか。

そんなことも思ったが、自分も似たようなことをしていることもあって、特に気にしなかった。

「そういえば、食事とかはどうしてたの？、足を挫いたんなら歩けなかっただろうし……」

「彼が代わりに作っておいてくれたの。最近はもうだいぶ良くなったから自分で作ってるよ」

そう言つてナタリアは少々ぎこちないながらも笑つて見せた。

「じゃあ、折角だし今日は私が作つてあげるね」

「いいの？」

「もちろん！」

ルリアは、笑つて見せると部屋を出て行つた。

「ふう……良かった……」

長話で眠くなつてしまったのか、目を擦っているエミリを隣に寝かせ、ふと思う。

これまで、自分に関わつたルリアがどうなったのかずっと気がかりであつたのだが、今日ルリアと再会したことで彼女が無事であることが分かつたのだ。

「これも……あの人のおかげ……かな……」

ナタリアはそんなことを呟き、ルリアが呼びに来るまでの少々の間、ずっと窓から空を見上げていた。

第31話 きっかけ

既に日没を迎えて月や星が暗い空に昇り、セリアの街が静かな夜に包まれるなか、ルリアはエミリを連れて彼女の家から慌てて出てきた。

「すごい遅くなっちゃったなあ」

彼女としては早く整理をしてウェディの勉強会に加わるつもりであったのだが、予想だにしていなかったナタリアとの再会によって長居してしまった。

勉強会は残念だったが、それよりも一番気がかりであったことがはつきり分かったことで、彼女は胸が軽くなったように感じていた。そもそも、ルリアがここまでナタリアを気にかけるのは、二人が幼少の頃にまで遡る。

まだセントラには詳しく話していないのだが、ルリアの父親は有力な商人の家系の人物で若くから主にこの大陸を中心に活動している。彼は移動の途中、たまたま立ち寄った小さな宿屋にて同じく宿泊客であったルリアの母親に出会いすぐに意気投合、特に目的もなかったために彼女も手伝いとしてついて行くことを決めた。

その後二人は縁を結び、ルリアを授かったのだ。

しかし、以前よりも商売も上手くいっていても一人では追いつかなくなっていた。

そのため両親は、まだ物心もついていないルリアを連れて商売をしていたのだ。

そんな忙しい日々を送る中、事は起きた。

トルポリツクの港街ローレシアに向かうため、国の中央を走る山脈を越える山道を通っていたのだがそこで盗賊の襲撃に遭った。

普通、長距離…特に峠道など人里はなれる所を通過するときは用心棒などを雇うのだが、これまで賊と遭遇したことはなかった。

さらにルリアの父親はある程度の体術を会得していることもあり、

雇わなくても大丈夫だろうと思っていたのである。

しかし、訓練などでの形式的なものとは別で、ルリアらを庇いながら戦わなければならなかった。

幸いその時は、荷物が幾らか駄目になってしまったが皆に大きな怪我は無かった。

それでも彼は自分が思っていたよりも無力であることを知り、ローレシアで暮らすことを決めたのである。

そしてそこでナタリアと始めて会うこととなった。

当時、ローレシアはこのラーレイン大陸の中でも有名な港街であった。

両親はこの場所に住むようになり、そしてこれまでのことを生かして雑貨屋を営むようになった。

「あれ？、ここはどこ…？」

大勢の人が行き交う道の端で、ルリアは母親とはぐれ迷子になってしまった。

「おかあさん…？」

今日は用がある様で彼女もついて行ったのだが、まだあまり街を知らないため、自力で帰ることは困難であった。

「うう……」

人ごみの中、母親を探し始めるが中々見つからず徐々に彼女は心細くなつていく。

「あら、ルリアちゃんじゃないの」

「あ……」

風も吹き始め街が寒くなってきた中、不意に彼女に声を掛けたのは、一人の女性だった。

「今日は一人なの？」

「ううん、おかあさんと一緒に……」

相手は自分のことを知っているようだが、ルリアにはその女性のこととが分からなかった。

ただ、その女性のお陰なのか先ほどまでであった心細さと言うのは薄れていた。

「でも、いつのまにか、いなくなっちゃって……」

「ちなみにどこに行くかとか分かる？」

「ううん……」

「そっか。それなら一緒に探しましょう」

そう言つてルリアの手を引いて歩き出す。

しかし、人がなかなか減らないせいもあり未だに見つからない。

暫く探していると遠くから手を振っている人物が見えた。

だが、ルリアの母親ではなくどうやら女性の知り合いの人らしい。

その知り合いは近くまで来ると女性と話し始めた。

会話の内容までは分からなかったが、ルリアはその間辺りを見渡し

て探していると、知り合いの後ろに隠れながらこちらを見ている少

女の姿があった。

それこそが、後の親友となるナタリアである。

「こんにちは」

ルリアはそんな彼女に声を掛けて、にっこりと笑って見せると、ナタリアも恐る恐る返事を返してくれた。

話がひと段落して、ルリアに気づいたその知り合いがルリアの母親

を見かけたとのことでその場所に行ってみると、今度こそ母親の姿があつたのだ。

その後の話で、その女性はどうかやらかいに住んでいるらしくルリアの両親の店にも度々来ているということだ。

そして、その女性の知り合いがことは別の大陸にある実家に帰らなければならぬため、今日は手伝いで色々と買い揃えていたらしい。

ちなみにナタリアは、ルリアに声を掛けた女性の娘である。

それ以来ルリアはよくナタリアのところへと遊びに行くようになり、二人は仲良くなった。

ナタリアは何処か消極的なところがあり、いつもルリアが守るような形となっていたが良い関係であつたのは違いない。

そんな生活を始めてから数年が過ぎたある日、ナタリアの母親宛てに一通の手紙が届く。

それは夫の友人からの手紙で、内容が深刻なものであつたのだ。

ナタリアの父はリディナで、未開の地に足を踏み入れてはその場所の状況を調査していた。

リディナには、人が入ることの出来ない巨大な樹海が存在していて、これまで多くの探検家などが中に入っていたが、奥まで足を踏み入れた者が帰ってくることはなかった。

その手紙によると、彼が帰還する予定の日を大幅に過ぎ、未だに行方が分かっていないということらしい。

色々と悩んだ末に、ルリアの母親にナタリアのことを任せて一人リディナに向かうことを決心する。

このときもしかしたら自分もその場所に行くこともないとは限らないため、ナタリアを危険な場所に連れて行くことは出来なかった。

出かける前日、ナタリアに父親の仕事を手伝つてくるとこまかして言うと、しぶしぶ納得してくれた。

一人残されたナタリアは、母親がいない寂しさを埋めるかのように、四六時中ルリアと一緒に行動するようになる。

さらに月日が流れ、とうとうあの日を迎えたのだった。

ルリアの両親は雑貨屋を営んでいたため街の住人とも接する機会も多く、色々と情報を手に入っていたのだがあの日の数日前からとある少女を探している人がいるという話をよく聞くようになった。

その中には、ナタリアのことであると気づいた者もいたようだが、何処か怪しいと思って教えなかったという。

だが、とうとう誰かが教えてしまったのか分からないが彼女のことを嗅ぎ付けられたのか彼らのところにも来たのだ。

それでも、いつかはそうなることを多少なりとも考えていたため、あらかじめ書いておいた手紙とナタリアの母親の手紙を渡し、一先ずルリアとともに隣町へ行くように指示をしてその場から逃れさせた。

もしナタリアの親族が何かだとすれば、後に二人を迎えに行つてその者に伝えればいいし、そうでなかったとしてもどちらかが一緒について逃げればいいと決めていたのである。

結果としてナタリアを探しているのは後者で、更に正体は分からないものの引き渡してはいけない相手であるということも分かり、作戦は成功したかのようなだったがひとつだけ誤算があった。

ナタリアとルリアは無事隣街に着き、ルリアは母親から渡された手紙を言われたとおりにナタリアに渡して、ナタリアはその内容を読んで言葉を失った。

父親が行方不明であること、母親は仕事を手伝いに行つたのではなくて彼を探しに行ったこと、なによりもここまで逃げてきたのは自分のせいだったこと。

ルリアはそんな彼女を何とか慰めつつ、安心させようとしたのだった。

結局その隣街の宿屋でルリアの母親を待つ事にしたのだが、そこで宿をとったことを後悔することとなる。

朝早く、息を切らしながら母親が宿に入ると部屋にはルリアの姿しかなく、部屋の机の上には書置きがあった。

『リディナへと向かいます。今までお世話になりました』

それを見た彼女は、目に涙を溜めて今さっき起きてきたばかりで何も知らないルリアをただ抱きしめることしか出来なかった。

それから、自宅へと戻るとルリアの母親もルリアを置いてナタリアの後を追っていった。

ルリアはこのことを毎日悔やみ、食事もまともにとらず部屋に籠ることが多くなっていく中、その様子をずっと見ていた父親はある日彼女にこう言った。

「ナタリアを探しに行きたいのなら、まずは一人で生きていけるようにならないと駄目だ。それにどんな危険があるか分からないから、自分や彼女を守るくらいのも会得しなくてはならない」

そして、手に持っていた一冊の本を彼女に手渡した。

「これは、魔術の本。魔術を身に付けることが出来れば、ある程度は防衛する手段となるだろう」

彼は詠唱をすると、部屋の中にも関わらず柔らかな優しい風がルリアのなでて吹き抜けていった。

「このくらいなら私が教えてあげられるがあまり使い物にならない。身を守るほどの力ともなると危険が伴ってくる。人を殺めてしまうかもしれない。そうだな……魔術学校を卒業できるくらいなら、道を踏み外すこともしないだろう」

「でも、それじゃあ……」

それでは見つけるのが遅くなってしまふ、と言おうとしたが彼が首を振ってルリアの言葉を遮る。

「確かに焦る気持ちは分かる。でも、独学では魔術は初めのうちこそ上達は早い、そこからが大変だ。恥ずかしながら実際に私も途中で挫折してしまっただけ」

職業柄なのかあまり笑顔以外の表情を見せない父親が照れているところを見るのは、彼女には不思議であった。

「弟子入りにしても、学校に行くのとあまり変わらないだろう。中途半端で行かせて、万一のことがあればあいつにも心配を掛けてし

まう。そうすると、ナタリアを探すのにも支障が出るだろう?」

ルリアはそれを聞いて、はっとした。

早く見つけてあげたいのは山々だが、現在母親もナタリアを必死に探しているのだ。

探している身としては、これ以上心配事を増やしたくないはずである。

「でも…例え卒業しても私がナタリアを探しに行ったら、お母さんは逆に心配するんじゃないの?」

「そのときにはもう十分な歳になってるよ。あいつもルリアよりも少し上のときに家を出て、世界を見て巡っていたからな」

「そっか…根本的なこと忘れてたけど、もし魔術学校に行っても私が魔術を扱えなかったら?」

「それは大丈夫だ。なんてったって俺とあいつの自慢の娘なんだからな」

わざわざ自称を変えてまで格好付けて言ったのが何となく可笑しくと共に頼もしく感じられた。

「…もー、挫折した人にそう言われても信用できないよー」

「それもそうだったな」

ルリアの言葉をあつさりと認めてしまったのが余計に可笑しく、更に彼が笑っているのにつられて彼女も笑いだした。

(そういえば、こんなに笑ったのっていつぶりだろう…)

あの日からだいぶ経つが、これまでルリアがまともに話そうとしなかったため、笑うこともしなかった。

しかし、この会話のお陰か心が軽くなったような気がした。

「ありがとう…」

「ん?、何か言ったか?」

「うっん、それよりもし会得できなかったら承知しないからねー」

そう笑いながら言った彼女の目には涙で一杯だったが、彼女も彼女の父親も特に気にしなかった。

それから毎日魔術の勉強を父とやるようになった。

本当に根拠があつて彼が言ったのかは分からないが、ルリアの伸びはすばらしく理屈こそあまり分かっていなかったが、簡単な魔術を扱うようになる。

さらにそれに追いつくかのように理屈も理解していき、彼が教えられることはもうないと言つくらいまで身に付けることが出来た。

頃を見計らい、父は魔術学校について調べそして隣国にあり現在彼女が所属しているオルレイ魔術学園を勧めたのだった。

その後、彼女は単身でセリーアへと移り住みセントと出会うことになる。

（そういえば…）

ルリアは、ふと腰についていたものを手に取った。

それは、紐に結ばれたガラス玉に透き通った藍色と若草色で流れるような模様が描かれている。

ルリアがセリーアに引越すときに、父親が御守りとして持たせてくれたものだ。

これは元々、彼が妻へのプレゼントとして渡したのだが、彼女から家を出る前にルリアに渡すように頼まれたらしい。

ちなみに元々は藍色だけの模様だったらしい。

ルリアが魔術の勉強を始めた頃に、ルリアと彼女の母親が再び巡り

会えるようにと願いを込めて二色目である若草色の模様を描いたのだ。

元からあった上に描いたため、色が混ざり合って調和するということはなかったが、中々綺麗な模様となった。

彼女はこれをいつも身に付けて大切にしているのだ。

（お母さん……）

今も何処かでナタリアを探している母親と再び巡り会わせてくれると信じて……。

しかし、あまり母親のことを考えてしまうと今やるべきことに集中できなくなるということから、普段はなるべく意識しないようにしている。

彼女は母親への思いを再び心の奥に仕舞い込んで再び歩き出そうとしたところ、目の前に人が迫っていることに気づかなかった。

ドン！

「きゃあ！」

相手も気づいていなかったのか、そのままぶつかってしまい彼女は尻餅をついた。

「いたた……」

「すみません、怪我はないですか？」

「あ、はい……」

見ると、相手は自分に対して申し訳なさそうにして、手を差し伸べてくれていた。

「道が暗い上に、自分は目が悪いものであなたに気づきませんでした」

顔までは良く見えないものの、体格や声などからして男性のようだった。

「私も考え事をして……すみません……」

彼は、ルリアの手をとって立たせると、一礼をして歩いていった。

「……………」

ルリアがその男性が歩いていったほうを見ていると、エミリが何かを手に持ってルリアの服の袖を引っ張った。

「どうしたの？」

「これ、さっきの人が落としていったよ」

エミリから受け取ったそれは懐中時計のようになにやら文字が刻まれている。

きっと大事なものに違いないとルリアは思い、一度エミリに向き合う。

「さっきの人を探したいんだけど、いい？」

「うん！」

まだそんなに遠くには行っていないはずであるため、時計が無くなっている事が分かれば戻ってくるだろうと思ったが、彼女は暗い中歩いてきた道を再び戻っていった。

第32話 夜の森の隠れ人

「……ルリアが帰って来ないじゃないのよ」

スティアが口を開く。

彼女もセントも今日は一日中ウェディに勉強を教え込んでいた。

スティア以外にも講師役がいたためにウェディが彼女に魔術を習うときほどは厳しくならなかったが、それでもずっと机に向かうことは彼にとっては大変なものとなったのである。

その本人は現在ようやく勉強漬けから解放されたものの、ほとんど気力を使いきってしまったためか彼の部屋で突っ伏している。

「確かに遅いな……」

彼女の話では日がまだ高いうちに戻ってくると言っていたのだが、既に日没を迎えてしまっている。

セントには幾つか心当たりがあったのだが、それにしてもこれは遅すぎる。

「……少し出掛けてくる」

大方ルリアを探しに行くのであろう、セントがそう言うとスティアの返事も聞かずに走っていた。

「ちよつと、あたしも行くわよ！」

慌てて彼女も立ち上がって彼の後を追っていった。

寮を出るときに、時間が時間であるため偶々すれ違った教師に呼び止められたが、二人は適当なことを言ってやり過ごし、外へと出る。

「ウェディに言わなくて良かったのか？」

ふとセントがそんなことをスティアに尋ねた。

「いいのよ。言ったところで特に変わらないし、言いに行くのは時間が勿体無いわ。それに……」

「それに？」

「彼なりに頑張っていたみたいだし、少しくらい休ませてあげてもいいかなってね」

どうやら、スティアのウェディに対する気遣いのようだ。

普段の扱いはあの様であるが、何だかんだ言ってスティアも彼女なりに彼のことを思っているようである。

「まあいいわ。とにかく先を急ぎましょう」

「そうだな」

何となくばつが悪く感じたスティアは半ば無理やり話を切り、二人はルリアの元へと急いだ。

同じ頃、ルリアはようやく森の入口へと辿り着いていた。

彼女の家を出てからだいぶ時間が経ってしまい、エミリも彼女の背中で静かに寝息をたてている。

結局、時計の持ち主は見つからず、しかし先ほどの場所に置いていくのも気が進まず、彼女は悩んだ末にしばらく預かっておくことにした。

現在彼女の家にはナタリアが居ることもあって、セリーアにはそう遠くならないうちに行くことになる。

そしてそのうちにきつと会えるだろう。

余り深く考えても仕方がないと思い、彼女は黙々と暗い森の中を歩いていくが、ふと以前夜の森を歩いたときを思い出した。

今日は以前よりも道が見える程度に明るく感じられ、時折風が吹くのか木々がざわついている。

というのも、街に抜ける道はあまり深く無いところにあるため、明かりが無くとも歩くことは出来なくもない。

それに比べて、以前通ったところは建物から更に森が深くなる方へと向かっているため、川辺以外は昼間でも薄暗いのである。

それでも足元は見辛く、眼が慣れてきても注意して歩かなければすぐに躓いてしまう。

そんな中を歩いている時、ルリアは突然何かの気配を感じたような気がして、足を止めて辺りを見た。

もちろん、何も見つからず再び彼女は歩き始めたが、心の中では少し不安を募らせていた。

前回のここでの試験では、魔術組合の者が適正かどうか調べるためにセントは戦っていたが、その前にも彼女は一度襲われている。

彼からその話があった時に、そのことは入学試験の時の腹いせか何かだろうと決めつけていて、二人は魔術組合に加入したのだからそのようなことはもう無いだろうと思っていたためか、ほとんど用心していなかったのだ。

今更ではあるが、気配を隠そうとしたが考えれば相手を刺激してしまいかも知れないため、平然を装うことにした。

得体の知れないものに対する不安や恐怖感が与える精神的圧力は大きい。

冷や汗をかきつつ何とか気づかれないようにと注意を払って寮へと向かっていった。

ルリアが気配を感じるよりも少し前、セントも何かの気配を感じ取っていた。

「！、……………」

急に立ち止まった彼を、スティアは不思議そうに見た。

「ん？、どうかしたの」

「……………いや、今誰かいたような気がしたが気のせいみたいだ」
辺りを察していたのか、少々の間後に彼が答える。

「そう？、なら行くわよ」

「……………」

スティアは余り気にせずにさっさと先へ歩き始めていったが、セントはどこか引つ掛かるところがあるのかもう一度だけ辺りを見た。

「！、スティアっ！」

そして、偶々奥の方に浮かび上がった光を見つけそれが何であるのか理解する前には、彼の身体はスティアを庇おうと動いていた。

「何…っきゃあ！」

振り返った彼女は、彼によってその場から吹っ飛ばされた。

刹那、その場所に火柱が上がる。

「いたた……………いきなりなにすんのよ！」

「いいから走れ!!」

「!!」

突然ぶつかってきたセントに対して怒鳴り声を上げたが、これまで見たことの無い彼の剣幕に驚きすぐにその気も失せてしまった。気がつくともスティアは彼に手を引かれ、森の中を疾走していた。

「ちよつと、どういうこと……」

走りながら状況をセントから聞こうとするが、すぐ隣で再び火柱が上がり言葉を失う。

今回はいつもの試験のときとは違い怪我をしても学校に戻される訳は無く、相手は何なのかも含めて全く分からないが自分の命が関わっているかも知れない。

セントはこれまでも何度か似たような経験はしたことがあるために冷静に対処出来たが、スティアは動揺を隠せなかったのである。

「詳しいことは落ち着いてから話す。今は走ってくれ」

いつの間にか杖を持っていたセントは手短に彼女に言っ、何とか打開策を打ち出そうと再び考えようとする。

その間にも二人を目掛けて容赦なく炎が姿を現し続け、彼は避けることにも集中しなければならぬ。

更には、今回はいつものように一人ではなくスティアもいるために強引に避けることも出来ない。

それでも彼は杖を振るったりして何とかそれらを避けつつ走り続けた。

（まづいな……）

しかしいくら走ろうとも相手を振り切れる気配は無く、下手に脇にそれて森の中深くへ逃げることも出来ない。

未だに二人とも怪我は負っていないかったが徐々にセントは焦りを感じ始めていた。

（やはり、今は一旦道をそれた方が良いのか……）

道をそれるととたんに視界が悪くなるために相手を振り切りやすくなるのだが、特にこの状況では来た道が分からなくなり、戻って

これる保障はない。

だが、これしか方法は無いと思いそれを彼女に伝えようとスティアのほうを小さく向いた。

その時によやくスティアが詠唱していることに気づいた。

そして気づいた時にはほとんど詠唱は終わっていたのか彼女は声を上げた。

「目を閉じて！」

セントが言われるがまま目を瞑ると、彼女は魔術を発動させる。

すると、今まで暗闇だった森が眩いほどの光で満たされた。

スティアはどうやら目眩ましをさせようとしたらしく、目を閉じていても明るく感じるほど強いものを詠唱したらしい。

だがそれは功を奏した様で、ピタリと炎の攻撃が止まる。

「今のうちに逃げるわよ！」

それを逃さずに二人はその場から逃げていった。

「ルリアっ!!」

先ほどの魔術で振り切ることが出来たのか火柱が上がりなくなった。そして、街のほうへと向かっているとスティアは倒れているルリアと彼女を揺さぶっていたエミリを見つけた。

「!、スティアお姉ちゃん!」

エミリはスティアの声に気がつくとすぐにこちらへと駆け寄ってきた。

「お姉ちゃんが…!」

すぐに駆け寄り、セントがルリアの様子を見る。

彼女はどうかやら気を失っているだけの様で、外傷が特に無いことから自分たちを襲ってきた者らにはやられていない様である。

「エミリちゃん、落ち着いて。ルリアは気を失っているだけだから大丈夫よ」

そう言うのと、スティアが泣きそうなエミリを抱きかかえて彼女を落ち着かせた。

セントはというと、いつ再び襲撃されても動けるようにとルリアを背負った。

「さて、無事に合流したが……これからが問題だな……」

「そうね……さっきの光で先生か誰か来てくれれば……なんて思わないほうがいいかしら……」

だが、来た道に戻るにしても先と同じ手段は通用しないだろうし、撃退するにも相手がどこに何人ほどいるのかよく分からない上、こちらが満足に動けないため厳しい。

「それは厳しいな……」

ほとんど手詰まりのような状況であった。

「……ほんとにウェディを連れてくれば良かったわ……こういう時に限って……」

「まあ、仕方ないだろう……とにかく、戻るだけ戻るか街へと一度向かって他から行くか……」

しかし、時間は結論が出るのを待つてはくれなかった。

スティアもセントも暗闇のどこかにいる相手を恨めしく睨みながら会話していると、狙ったかのように光が浮かび上がるのが見えた。

「残念だけど、わざわざ向こうからいらっしやったみたいよ……」

「みたいだな……」

そう言い終るや否や二人は左右へと、跳んだ。

先ほどスティアは動揺していたこともあつてかほとんどセントに手を引かれて走っていたのだが、元々の身体能力は良いほうである。しかし、今回は先ほどのように炎は現れなかった。

「……どうしたのかしら」

警戒しつつ辺りを見るが、特に変わった様子はなさそうである。

その時、突如一人の男性が姿を現した。

「二人とも、大丈夫かい？」

「！、あなたは？」

言葉からすると敵では無いのだろうか、警戒しつつもスティアは相手に問う。

「私は、ここの学校の者です。ここは私が引き受けますから、あなた達は戻っていてください！」

「そうしたら、あなたは……？」

「私は大丈夫ですから」

セントは、彼のベルトに術符が付いていることに気がついた。

（あれは……！）

それは、彼やルリアが持っているものとは色違いの術符であった。

「……分かりました」

「ちよつと、セント！？」

「この人ならきつと大丈夫だし、逆に俺たちがいるとかえって邪魔になるかもしれない。それに今も魔術で守ってくれている」

「……ほんとだわ……」

どうやら先ほど火柱が発動しなかったのはこの男性の魔術のお陰らしい。

セントに言われて注意してみるとスティアも気がついた。

「そこのお嬢さんには悪く思われるかも知れませんが……さあ、早く！」

「……わかりました。助けてくれてありがとうございます」

彼女も仕方なく男性の言葉に従うことを決めた。

「明日、先生に自分たちからも話しておきます」

「そうしてくれるとこっちも助かります」

セントは小さな声でその男性に言うと、スティアと共に学校へと向けて走っていった。

「さて、では覚悟してもらいますね」

二人が見えなくなるのを見届けた後、そう言っただけで彼もまた暗闇へと紛れていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8151d/>

気ままな風吹くこの世界

2010年10月10日04時08分発行